銀幕紙芝居

1.夢

　そこは妙にふわふわとしたミルク色の空間だった。
　靄がかった色合いの中で、誰か小柄な人影があちらに迷いこちらに迷いを繰り返している。うすぼんやりした角の向こうを覗きかけては気まずい表情で顔を背け、煙る道を行きかけてはためらって立ち止まってしまう。
　どうやら彼が居る所は迷路になっているらしい。こちらからははっきり見える姿なのだが、彼からは、このもやもやとした霧に隠され滲む視界に、なかなか進むべき道を見つけられないようだった。
（おい、こっちだ）
　俺はついに声をかけた。
（こっちだよ）
　びくりとして立ちすくみ、きょろきょろと周囲を見回している。幾度かこちらと視線が合ったと思うのに、すぐに必死に見張った目を逸らせてしまうところを見ると、俺にはただの靄としか見えないこの空間が、巨大な灰色の壁か何かで区切られていて、あちらからは俺のいるところすらわからない、そんな感じだ。
　声の方向を探るように、彼はしばらく小首を傾げていたが、やがて小さく溜め息をついて、再びミルク色にたゆとう世界を手探りで歩き始めた。
　よく見ていると、周囲は全く石壁ばかりというのでもないらしい。時々、何かを見つけたらしく、ひどく哀しげな切なげな顔になって、見つけたものから目を背けたそうにするのだが、どうにもそれは叶わないらしく、視界の端で捉えたまま唇を噛み、じっと動かなくなってしまう。
（おい、ここだってば）
　つい、もう一度声をかけた。
　今度は確実に方向を捉えたのだろう、はっとしたように顔を上げて、思い詰めた表情で走り出し、唐突に見えない壁にぶつかったように跳ね返されてよろめき、霧を乱す。霧の放つ淡い光の中で輪郭をぼやけさせながらもわかる、苦しげで悔しげな顔。そっと手を伸ばして正面に触れ、見えない壁に両手を突く。強く押す、が動かない。片方の手を周囲に伸ばす。周囲もまた壁のようだ。立てた掌が上下左右を撫で回しながら、見えない壁の形を作る。
　やがてたった一つ空いていた方向、それは元来た方向のようにも思えるけれど、そちらへ向かって彼は歩き出す。嫌々ながら、気の進まない顔で、不安そうな表情で、けれどだんだん冷えてくる瞳は鋭さを失い、やがてのろのろと速度を落として立ち止まる。
　その姿は呟いていた、結局こっちしかないんだな、と。
　力の籠っていた肩がゆっくりと落ちた。深い吐息。そして、もう一回、今度は震えるようにか細く長く、息が切れるときに奇跡が起きないかと願うように。
　息を吐き切って、それでも何かを待つように俯いたまましばらく堪え、やがて顔を上げ、周囲を見回し、微かに苦笑した。サングラスをどこからか取り出し、端整な動かぬ顔に嵌め込む。そのままま っすぐ歩き出す。まるで、この先に断崖絶壁が待っていようと全く構わないと言いたげな勢いで。
　だが、それは俺から遠ざかる方向だ。
　出口はこっちだというのに。今はここに俺が居るというのに。
（ここだ！）
　叫ぶ。
　霧を散らして力強く、もう一度。
（こっちだ、周一郎！）
　相手が突然振り返った。
『滝さん！』
　弾けた声で呼び返す。サングラスはかけたままだ。けれど、唇が笑み綻び、顔が一気に明るくなった。
　周囲の壁は消え失せたのだろう、まっすぐこちらへ走ってくる。手を伸ばしてくるのに答えて、俺は笑い返しながら待っている、ひどく素直な周一郎の笑みに見とれながら。

　ドサッ!!
「…ん、な…？」
　ふいにぐるりと視界が回って世界が衝撃に揺れた。霧が飛び散った視界は眩く、もぞもぞと体を動かしながら瞬きをしても光量に感覚が追いつかない。
　何とか薄目を開けてみると、妙に高い天井と見覚えのある木の板、そしてその向こうでゆらゆらと危なっかしく揺れている花が視界に入った。
「…え？」
　慌てて瞬きをする。何だろう、非常によくない予感がする。
「ちょっ…」
　ぱっちりと目を開いた瞬間、サイドボードの端からひょいとルトの顔が覗いた。
「にゃ」
「にゃ？」
　にやりと嗤うように真珠色の牙を剥く。サイドボードがなぜ頭上にあるのかも知りたいが、それよりもなぜこの小猫が悪戯っぽい顔で前足を差し出して見せているのかがもっと知りたい。ついでに言うなら、なぜルトはその前足をゆらゆらと揺れている薔薇、もとい、薔薇が満タンに生けてある花瓶に伸ばそうとしているのかが是非知りたい、いや知らねばならないような気がする、今すぐに。
「おいルト」「にゃ～」「いや、にゃ～じゃないぞ、にゃ～じゃなくてお前それ一体何を……何をってばかよせやめろうわわわわ！」
　ひゅ、うん、ごっ！
「ひっ！」
　頭の真横に落下した花瓶が跳ね上がり、水と薔薇を撒き散らしながら目の前を飛び渡っていくのを凍りついて眺めながら、俺はこういうときはどうしてスローモーションに見えるのかなと現実逃避に必死だった。
「うわぶっ、った、ぐもっ！」

　目一杯水を浴びて跳ね起きる。体に散った薔薇に刺されるかと思ったが、さすが高野、棘は全部処理済みだ。
「うにゃ？」
　え、何どうしたの、何でそんなお茶目なことしてんの不思議な人だねあんた？
　そんな感じでちょいと首を傾げたルトはひらりとサイドボードから飛び降りた。そのまま何事もなかったようにとことこと、ぐしょ濡れのままへたり込んでいる俺の前を通り過ぎていく。
「こ、の、や、ろう……っ」
「…」
　唸る俺をルトは振り返った。鳴き声を出さずに口を開き、牙を見せつける例の嗤い方、細めて三日月に見える目に宿るあからさまな嘲笑。
「てめ、人が大人しくしてたらいい気になりやがって…っ！」
「にゃ、あ、あ、ん…っ」
　まるで俺がいたいけな小猫をいたぶりにでもかかったように、芝居がかった悲鳴を上げてみせてルトがひらりと俺の手をかいくぐる。
「にゃああ」「にゃああじゃねえっっ、この猫野郎！」
　今日という今日はどっちが偉いんだかはっきりさせてやる、こう見えても俺だって万物の頂点、人類の末裔なんだぞ！
「いやまだ滅んでねえけどな！」
「にゃあ〜〜」
　戸口にひょいひょいと足取り軽く飛び跳ねながら逃げていくルトを追って、俺は突っ込んだ。部屋の戸は閉まっている、ルトがノブを回せるとは思えない。
「今度こそ俺の勝ちだなはははははは、は？」
　あわや追いつく寸前で、なぜかふいに目の前でドアが開いた。ルトはこれ見よがしに尻尾を立てるとくるりと回して見せ、次には開いた隙間から見事に飛び出していく。
「てめえええ……え……っ！」「っっっ！」
　ルトを追いかけ開いたドアに突進した俺は、もちろん、ドアを開けた人間に突っ込んだ。それほど重量級ではないにせよ、体を屈めて突っ込んでいるから、当然相手の視界には一瞬しか入らなかったのだろう、避ける間もなく俺と一緒に廊下に転がってしまう。
「わ、悪いっ！」
「…」
「あれ……？」
　突っ込んだ相手にのしかかってのマウントポジション、昔懐かしいラブコメなら一気に恋愛が始まってしまうところだったが、
「周一郎？」
「……はい」
　相手は溜め息まじりに頷いた。下から俺を見上げていた視線を、ゆっくりと降ろす。導かれて視線を落とし、見事に周一郎を廊下に貼りつけている自分の体勢に気づいてぎょっとした。
「わ、悪い！」
　慌てて飛び退く。
「捻らなかったか?!　大丈夫か?!」
「大丈夫ですが」
　複雑な顔でちらりと俺の頭のあたりを見やり、ゆっくり立ち上がってパンパンと服の埃を叩き落とした。数十万は下らないだろうオーダースーツも、周一郎にとっては吊るし同様の扱い、拾ったサングラスをかけながらまたも微妙な顔で振り返る。
「？」
「……その薔薇はあなたの趣味ですか？」
「ばら？」
　周一郎が無言で指差す方向に手をやり、髪の毛に絡んだ棒状のものに気づく。さっき被った花瓶の水の名残、中途半端な長さだったのだろうか薔薇一本、探った指先にしっとりと柔らかな花弁が触れる。同時に、自分の証明写真の上に重なった薔薇の冠を想像して慌てて引っ張る。
「ば、ばかっ、俺がそんなものを着けるわけがないだろっっ!!」
　力の限り否定して薔薇をもぎ取ろうとしたとたん、頭の皮が一気に突っ張った。
「いてっってってっ」
　涙目になりつつ薔薇を何とか髪の毛から外そうとするが、どういう絡み方になっているのか全く取れない。
「あれっ、ここをこう？　ったってってって！」
　涙目になりつつ必死に引っ張っていると、見るに見かねたのだろう、周一郎が近づいてきた。
「手伝いましょうか？」
「頼むっっ」
　触れば触るほどぐしゃぐしゃと、より深く複雑に絡んでいこうとする薔薇を扱いあぐねて、身を屈めながら全力で頼んだ。
「早く取ってくれっ」
「そんなに慌てなくても」
「高野に見られたらどうするっ」
「……大丈夫ですよ」
「岩渕に見られたらっ」
「……大丈夫ですよ？」
「おい、今疑問符を付けたなっ、付けただろうっ」
「……」
「ノーコメントかよっ！」
　周一郎はくすくす笑い出しながら手を伸ばしてきた。細やかな優しい動きで、何とか薔薇を取ろうとしてくれているようだ。
（前だったら、あり得ない光景って奴だよな）
　あの周一郎が、他人に自分で触れ、しかも楽しみながら困り事を解決していってくれている。

（あいつはどうなったかな）
　ふいに、夢の中、迷路で彷徨っていた周一郎の姿を思い出した。
　あいつは結局迷路を抜け出せたのだろうか。それとも今もまだ、あの中で彷徨っているのだろうか。最後に俺を見つけて駆け寄ってきてくれたような気がしたんだが、夢から醒めた『俺』はまだあそこに居たんだろうか……？
「なんか……暗示的な気もするよなあ……」
「どうしたんですか」
「え？」
「取れましたよ？」
「あ、すまん」
　へこりと頭を下げて顔を上げると、周一郎は淡いピンクの薔薇を片手に不思議そうに俺を見つめている。これがまたもう、歯噛みしたくなるほど地面を叩きつけたいほど絵になる姿で、俺はしみじみと神様の不公平を感じた。こういう、どんな女だってよりどりみどり的な奴が、自分や仕事のことで手一杯で女に見向きもしないという構造は、神様的には大丈夫なんだろうか。それとも、産めよ増やせよ地に満てよというのは当初だけの計画で、後は野となれ山となれになっているってことだろうか。
「滝さん？」
「ああいや、神様の計画には人類滅亡が織り込み済みなのかなあと」
「は？」
「ちがうちがう、まあちょっと妙な夢を見たもんでな」
「夢？」
　周一郎はまたきょとん、と可愛らしく首を傾げた。
「そう言えば僕も見ましたけど……」
　呟いて唐突に奇妙な表情で固まり、首を戻して体を建て直した。サングラスの向こうから俺を見つめ、なんだかわざとらしく目を逸らす。
「へえ、お前も夢は見るのか」
「…見ますよ」
「どんな夢？」
　書類とか書類とか書類とかだろうか。いや、周一郎は仕事を嫌がっていないから、もっと苦手なものが追いかけてくるとかだろうか。
（周一郎の苦手なもの？）
　考えて思わず首を捻る。
（あるのか？）
「滝さんは？」
　俺の問いかけはさらりと躱された。
「俺？　ああ、俺の夢はなあ」
　思い出して思わずにやにや笑ってしまった。
「お前の夢だぞ」
「…」
「ドイツ旅行の印象が強かったんだな、迷路が出て来た」
「……迷路」
「そうそう、けど、ああいうのじゃなくて、真っ白いとこでさ、霧の中みたいなところ」
「……霧」
　ぴくりと周一郎は片眉を上げた。
「そう、霧っぽいところの迷路。迷路っていうか、俺から見りゃ、何もないんだけどな。お前が霧の中に居て、見えない迷路みたいなところであちこちうろうろしててさ、透明な壁かなんかがあるみたいで、なかなか思うところへ行けないみたいでさ」
「……」
　周一郎は無言で先を促した。
「で、俺が声をかけるんだ、『こっちだぞ』って。なかなか気づいてくれなくってさ、二、三回声かけたところで、ようやく俺に気づいてさ」
　にやにや笑いが顔全体に広がった気がした。あり得ない光景だろう、いや全くあり得ない状況だろう。それを自分が夢の中でしていたとか聞かされて、こいつはどんな顔をするんだろう。ちょっと人の悪い期待が動く。
「で、そっからお前が嬉しそうに笑って全力でこっちへ向かって駆けてくるってところで目が覚め……？　周一郎？」
　俺は途中で話を切った。
　こんな顔は見たことがない。
　周一郎はサングラス越しにもわかるほど大きく目を見開いていた。品のいい唇がぽかんと馬鹿みたいに開いている。猫だまし？　目の前で何かが突然に破裂したのを見たような、驚きしか残ってない表情。けれど、猫の瞳で人の裏も表も見抜き、現実の背後の世界まで読み取る少年をこれほど驚かせるようなものが、世界に幾つあるだろう。
「どうした？　気分でも悪いのか？」
　さっき転倒した衝撃が今頃来たんだろうかと心配して声をかけたとたん、はっとしたように瞬きした周一郎が見る見る赤くなった。
「え」
「僕がそんなことするわけがないでしょう」
「いやお前」
「僕は迷路に迷ったりなんかしません」
　滝さんは何を考えてるんですか。
　冷ややかに言い放たれて、思わずむっとした。
「知らねえよ。けど、お前、駆け寄って来ながら、『滝さん』とか嬉しそうに呼んだんだぞ、ガキんちょみたいに開けっぴろげに笑ってだな」
「僕はあなたなんか呼びません」

　ぱっつり切り捨てるように言い切る。けれど顔の赤みはもう頬だけではなくて、耳あたりまでも広がっていて、俺は真っ赤になって弁解する周一郎という、世にも珍しいものを眺めることになった。
「あなたなんか呼んだって、一緒に迷うのがオチです」
「ほー、言ってくれるじゃねえか」
　俺はにやりと笑い返した。
「じゃ、どうして真っ赤になってる？」
「っっっ！」
　これは驚いた。周一郎は自分が赤くなっているのさえ気づいてなかったようで、咄嗟に片腕を上げて顔を隠しかけ、その自分にうろたえて慌ててくるりと背中を向けた。
（おいおい）
　あの朝倉周一郎がやり合ってる相手に背中を向けるだと？　お由宇が聞いたら、周一郎以上にびっくりするんじゃないか。
「朝食の用意ができています。早めに来て下さい」
　今度は俺も目を丸くして突っ立っていると、凍りつくほど冷ややかに言い捨ててさっさと歩き出していく。
「…お、おい！」
　お前の夢って何だったんだ、そう声をかけようとしたが、周一郎は物凄い速さで遠ざかっていってしまって、振り向く気配さえなかった。
「…何だよ、一体」
　ドイツでは結構素直だったのになあ。
　ぼやきながらパジャマを脱ぎ捨てた。
　いや、ドイツだけじゃない、最近はかなり素直に感情を出してくれるようになってきたと思っていた。付き合いもそろそろ一年を越すし、前よりずいぶんよく笑うようになったし、俺の側に居る時はあんまり警戒している様子もないし。
　ところが、ドイツから帰って一週間ぐらいたってから、またぞろ態度が硬くなってきた。他人行儀というのではなくて、さっきのように妙な憎まれ口をたたくことが増えた。
「何かやったっけ？」
　考え込みながらジーパンに脚を突っ込む。
　周一郎が傷つくようなこと……俺に対して距離を置かなくてはならなくなるような羽目に追い込むようなことを？
　何の覚えもない。特にこれといって、あいつがうっとうしがるような、急にあれこれ世話を焼くこともしていない。
　周一郎は病み上がりで旅行疲れもあったし、寝たり起きたりが続いていた。少し調子がよくて夜更かしすると、次の日の朝食に姿を見せないことも多かった。考えていたよりずっと多くの負担を、周一郎は無言で堪えていたのだとよくわかった。
　こいつは休ませなきゃだめだ。単に疲れがとれないというだけじゃない、体の芯からめちゃくちゃに壊すまで働きかねない。
　気づいて俺は、あいつがベッドに持ち込みかけた書類をひったくって高野に渡した。抗議の声は大声で歌いながら聴こえない、と言い張った。すぐに食うのを忘れるのは知っていたから、しつこく粘り強く食事を押し付けた。
　幸い休学中だったし、いろいろなバイトも一旦休んだり止めたりしていたから暇だったし、あいつの部屋に結構入り浸っていた。それでもあいつが眠れば黙って本を読んだり、ありがたくも優しい納屋教授のレポートをやっているだけだったから、邪魔はしていないと思…。
「げ！」
　くん、と足元が詰まって引っ掛かり、俺はベッドの上にひっくり返った。両脚を上げて見ると、考え事をしていたせいか、ジーパンの片方に二本とも脚を突っ込んでいる。道理で妙に脚が動かないと思った。
「ん、あれ？　おい、何だよ、んなろ」
　すぐに抜けると思っていたジーパンはなかなか抜けない。指でも引っ掛かってるのかといごいごと指を曲げ伸ばししたが、別にそんな気配もない。
「ジーパンのくせに俺に逆らう気か」
　ぶつぶつ言いつつ寝転がって下半身を引き寄せる。大体こんなになるまで突っ込んで気づかない自分に呆れる。
「もう五年も履いてやってるのに、ジーパン仁義を知らん奴だなこの……っ、」
　渾身の力で両脚から引きはがそうとした手に、び、っと嫌な感触があった。
「……あー……」
　確かに脱げた、脱げはしたが、おそるおそる持ち上げたそれには、股間に斜めの裂け目が入ってしまっている。
「こりゃ…無理だな」
　指先で探って嘆息した。たとえ縫い合わせたところで、これほど薄くなってしまっていては、すぐにまた破れるだろう。だましだまし履いたところで後数回、へたすりゃ、公衆の面前でパンツの色柄を誇示することになる。
「やれやれ」
　ジーパンをベッドに放り投げ、ごそごそと寝間着兼用のトレパンを身に着ける。こちらもかなり年期もの、高野に一度廃棄処分にされかけた代物、もちろん朝倉家にはふさわしくないだろうが仕方がない。まあ、ジーパンがふさわしいかと言うと、そういうものでもなかったが。
「金があったかなあ…」
　ボストンバッグから取り出した財布の中身を覗き込むと硬貨が六枚、ベッドに座り込んで並べてみる。締めて五百七十二円。
「うーん」
　とてもじゃないが、人形のエプロンも買えそうにない。
　食と住は保証されていて、授業料はバイトで何とかまかなってきたが、週給三千五百円を交通費に始まる諸費に当てると衣類が買えなくなるのは自明の理、それにしても厳しい。
「新しいバイト、探さなきゃならんなあ」

　短期でジーパンと諸費のストック分が作れるような奴。一応は周一郎に雇われている身だから、時間も内容も限定されてくる、そんなに気軽に他の仕事に手を出す訳にはいかないだろう。周一郎が俺を必要とした時には応じられなくちゃならない……、だろう、か？
『僕はあなたなんか呼びません』
　ふいと周一郎のことばが甦り、俺は硬貨を片付け、財布をポケットに突っ込んだ手を止めた。
（あれはひょっとして、俺なんかいなくていいってことか？）
　俺だけが、あいつの側に居てやらなくちゃならないと勝手に思い込んでいるだけなのか？
　チィーチチチチチ……と愛らしい声を響かせて、ベッドの上を鳥の影が横切った。
　ぐーぅるるるるる……と愛らしくもくそもない音が、ベッドの上に座った俺の腹から響き渡った。
「……はいはいわかったわかったわかった、シリアスな場面は似合わんっつーことだろ、わかったよ！」
　どこかで大笑いしてやがるだろう神様に、毒づきながらベッドを降りた。

　嫌になるほどの五月晴れだ。
「あら…」
「ま……ふふっ」
「くふっ」
　通りを歩くと周囲の視線が下半身に集まってかなり痛い。
　確かに、食堂に座る時に高野が上品に眉を潜めてみせたぐらいには薄汚れているし、毛玉みたいなのもついてるし、よれよれのトレパンで、往来には不向きだと知っている、知っているが他に履くものがなくて買えないんだし仕方ないだろそこ。
「…」
　それでも半眼になって眉を寄せながらひたすら歩き、何とかお由宇の家へ辿り着いた。
「…お由宇～」
「はぁい……あら、志郎」
　ざっくりしたサマーセーター、膝丈のスカートで出て来たお由宇は、俺の風体に構った様子もなくにっこりと笑った。
「お久しぶり。ドイツではいろいろあったらしいわね」
「は？」
　思わずぎょっとした。
「誰から聞いた？　どこまで聞いた？」
「え？　さあね」
「さあねって何だよさあねって」
「お入りなさい、お腹空いてない？」
　曖昧な微笑で背中を向けられ誘われて、慌てて靴を脱いで上がり込む。
「あの時関わったのってあっちの警察メインだぞ？　朝倉が話すわけないし、海部から情報来るわけないし、どっから何を聞いたんだよ」
「いろいろ派手にあったそうじゃない。海部運輸に警察が関わってたの、じゃあ朋子さんが亡くなったのは事故なんかじゃなかったのね」
「あ」
　肩越しに薄く微笑まれて気づく。
　ドイツへ観光旅行、そこまでは知られていても、連続殺人事件だの、俺も周一郎も危機一髪だの、そんなこんなをお由宇が知っているわけがない。
「カマかけたな」
　なるほどこうやってお由宇はあちこちから情報を引きずり出してくるのかと、ちょっと安心しかけた矢先、くるりと振り向いたお由宇が微笑みながら可愛らしく覗き込んで囁いた。
「『二度咲きバラ』城の女主人には会った？」
「おおおおお由宇？」
　何でそこまでって、いや何をいったい言い出すんだお前、と口ごもりかけると、その笑顔のまま、
「脱いで」
「は？」
「脱・い・で？」
「はあああ？？？」
「そのトレパン」
「えええっ」
「下着履いてないの？」
「履いてるよ、履いてるに決まってる絶対履いてる！」
「じゃいいでしょ、洗濯しておいてあげるから」
　微笑みとともに、さすがに武士の情けという奴か、ガウンを渡された。
「…」
　いつもいつも思うんだが、お由宇は一人暮らしのはずだが、このジャストサイズの男物が出てくるのはどう考えるべきだろう。田舎に居る親が出て来たとき用？　いやそもそも、お由宇の所に娘を心配してやってくる親というのが想像出来ない。
　まじまじとガウンを眺めていると、お由宇がなおも笑みを深めて促す。
「は・や・く」
「……どうも」
　本当ならきっとここはもっと色っぽい展開を期待していいはずだろうなあと溜め息をつきながらガウンを羽織り、トレパンを脱いだ。俺だから色っぽい展開にならないのか、それとも俺以外なら色っぽい展開になるのか……同じことか。
「頼む」「はい」
　お由宇はさっさとトレパンを持って消え、戻って来た時には熱いコーヒーを持ってきてくれていた。

「どうぞ」
「ん、すまん」
　受け取ってソファに腰を降ろす。
「周一郎の方はどう？」
「……お前ってテレパス？」
「さあ」
「またさあかよ、って、さあってとぼける必要がある方が気になるな！」
「うまくいってるみたいね、その様子だと」
　さらりと流され、心中を言い当てられて穏やかじゃなかったが、うまくしゃべれない部分でもあるからテレパスであってくれた方がいいのかも知れない、と思い直した。
「まあ、そうだけど……ドイツでは結構素直だったんだよ。けど、なんかこう、最近、また素直じゃなくなってきたんだよなあ」
「ふうん？」
　お由宇は小首を傾げる。
「素直な周一郎がいいわけ」
「そういうわけじゃないが」
　里岡直樹を思い出して複雑な気分になった。
「ただあいつが無理してるんじゃないかと思って」
「それなら大丈夫よ」
　お由宇はあっさり言い放った。自分のコーヒーを一気に呑み下し、挙げ句に俺のカップを奪い取る。
「え、俺の」
「もう一杯入れてあげるわよ」
　まだ一口しか飲んでいないコーヒーを恨めしく見やりながら、引っ掛かったところを尋ねる。
「何が大丈夫なんだ？」
「だって元々が意地っ張りだもの」
　お由宇は軽く肩を竦めて見せた。
「一人で生きていくのが本来のやり方でしょ。一般論を言えば、あなたみたいに手間がかかって面倒で厄介事ばかり引き起こして物事を難しくする人間を、『側に置き続けてる』方が不思議なぐらいよ」
「…何か俺、不幸を引き寄せる狸の置物って感じがするんだが…」
　それも処分しようとするといろいろ起こるんで、扱いに困って壁沿いの狭い所へとりあえず押し込められている的な。
「狸はもう少し可愛いわよ」「おい」
　くすりと笑ったお由宇は謎めいた笑みになった。
「心配しなくてもいいわよ」
「ん？」
「周一郎みたいな人間は、一度信頼した人間は死ぬまで信頼し続けるわ、何があっても」
「信頼？」
　脳裏を掠めたのは『マジシャン』と三日月、あのとき俺は、操られて周一郎を追い詰めたはずなのに。
「自分を殺しかけた男を信頼するか？　普通？」
「…あなたは抗ったわ」
　低くお由宇は呟いた。
「理不尽な命令に命をかけて反撃したでしょ」
「でも、なあ」
「…ほんとに」
　ふ、と小さな溜め息をついて、お由宇は微笑んだ。ごく稀に見せる、聖母じみた柔らかい笑みだった。
「どういうことなのかしらね」
「は？」
「あなたに繋がると、誰も彼も競ってあなたに心を委ねたがる」
「…そんなことありましたっけ」
　思わずことばがおかしくなる。お由宇の言う通りなら、俺はもっともててもててもててもてて困ってるほどもてるはずだろう。
「ばかねえ」
　お由宇は決まり文句をあやすように口にした。ブザーかなにか聴こえたのだろう、席を立って奥に消え、やがてトレパンと数枚の紙を持って戻ってくる。
「気づいてないのがいいところよね」
「何を？」
「そういうとこ」
「どういうとこだ」
「はい、どうぞ」
「あ、うん」
　差し出されたトレパンは乾燥機で乾かされて温かい。お由宇に背中を向けて履き替えながら、ちょっと今の季節には汗ばむ気もする。でも肌触りはさらさらで久しぶりにすっきりした気がして、俺はにこにこしながら尋ねた。
「そっちは？」
「アルバイト情報」
「っ」
　がっちん、と音がしたぐらい、俺が固まったのを気にした様子もなく、お由宇は背中から淡々と尋ねる。
「要るんじゃないの？」
「い、要る、要る、要ることは要るが、どうしてわかった？」
　慌ててくるりと振り返る。チェシャ猫の笑みでお由宇は俺を見上げる。
「ジーパンどうにかした？」
「うん」

「他に持ってないわよね？」
「うん」
「そのトレパンが最後」
「うん」
「週給三千五百じゃ買えないわよね。アルバイトを探すのに私なら情報を持ってるんじゃないかと思った。違ってる？」
「…違ってない」
「でしょ？　別に難しい問題じゃないわ」
「……お前以外にはな」
　出された紙を有難く受け取りながら溜め息をついた。
　どうして俺の回りには、こう頭の回る奴ばかりが居るんだろう。どうせ居るなら、ドジを治す薬とか、厄介事を引きつけない方法とか考えてくれりゃいいのに。
　それとも何か、必死に考えてくれているのを上回る速度で、俺が等級数的にドジのレベルを上げていっているのか。それで状況が改善しないのか……いかん、本格的に落ち込んできた。
「…とにかく、ありがとう。早速当たってみる」
「志郎」
　結局コーヒーをもらえないまま立ち上がって玄関に向かう俺に、背中からお由宇が声をかけてくる。
「あん？」
「……周一郎が信頼するのは」
「？」
　思わせぶりに切れたことばに振り返る。
　お由宇は一瞬ためらって、どこか眩そうな不思議な笑みで続けた。
「後にも先にも、きっとあなた一人でしょうね」

　お由宇はいつも人を煙に巻いて喜んでやがる、と毒づきながら歩く。
「いろいろわかってるなら、素直に教えてくれりゃいいだろうが」
　周一郎も周一郎だ。本当にお由宇が言うように俺を信頼してくれてるなら、あんなふうにあれこれけなすこたないだろう。そりゃ、俺よりちょっと決まってて、ちょっと頭が切れて、ちょっといろんなことを知ってて、ちょっと顔が良くて、ちょっと金があって……ちょっとか？
「……結局、俺の一人相撲なのかな」
　お由宇にもらったバイト情報の紙切れを手に立ち止まってしまった。
　俺は周一郎を友達だと思ってる。確かに年下だし、育った環境も抱えてる状況も何一つ共通点はないし、趣味も違うし話も合わない、なのに、どこかの一瞬で、世界の中にただ二人だけ、背中合わせに立っている、そんな感覚。
　けれど、そう思っているのは俺の方だけなのかも知れない。
　周一郎は、そのもう一つの視界の中に人間の裏表を見抜いて来た人間で、悪魔じみた頭脳を持ってて、財力を手にしたいことは何でもやれる。対する俺は、ジーパン一本買うためにバイト探しに走り回る苦学生、あいつにアドバイスできることなどないし、ストレス緩和剤にもならない……むしろ、別口のストレスを追加していっているかもしれない。
　あいつに俺が差し出してやれるものは、一方的なお節介、もしくは片側通行の『友情』みたいなもの。
　そういう『俺』を、周一郎は本当に必要としているんだろうか？
「…うーん…」
　ぐらぐらと胸の底が揺れ動いた。
「俺なら……必要じゃねえなあ…」
　呟いた矢先に脳裏を過ったのは今朝の夢、俺めがけて駆け寄ってきた周一郎。
（お前の側でなら安心してるんじゃないか？）
　訳知り顔の心の声に被さるように、理性が反論した。
（いやいや、あいつが必要としているにしても、それはお前というタイプの人間で、お前じゃなくてもよかったんだろ、きっと）
　お由宇の声が響く。
『後にも先にも、きっとあなた一人でしょうね』
「俺…一人」
　それはつまり『タイプ』じゃないってことだ。
（お前だって、ほんとはわかってるだろ）
　心の声がにやにや笑って言い添えた。
（あいつが必要としているのは休める場所、お前こそがあいつを休ませてやれる場所だって。お由宇はそれを言ってんだろ？）
（そうかあ？）
　理性が肩を竦めた。
（お由宇だって人間さ、周一郎の側にずっと居るわけじゃないし、間違うことだってあるさ、だろ？）
「……うううううん」
　頭の中の二分割にいい加減にぐるぐるしてきた。
「……まあ、いいか」
　溜め息をついて首を振る。
　どっちにせよ、今周一郎の側に居るのは俺だし、俺はあいつの『遊び相手』だし、『遊び相手』はややこしいことを考えたり突き詰めたりしてないで、楽しく遊んでやればいいもんだろう。
「だな！」
「ねえ」
「っ！」
　結論づけて歩き出したとたん、ぽん、と背中を叩かれてぎょっとした。
「滝くん？」
「っっっっ」

　響いた声が頭の奥底のとんでもない所に届いて、脳味噌が一気に気化した。ありえないだろそれは。そう唸ったのは理性のヤローで、それでも体は正直に振り返りながら応じてしまう。
「…きもと……さん？」
「やっぱり！」
　相手がにっこりと零れるように笑った。低めの背、淡いピンク系でまとめたラフな格好、唇を染めたルージュが何だか眩しい。城本百合香だ間違いない、中学時代のクラスメイト……ついでに俺の初恋の相手。
　何で自分が彼女にはいつもに増しておかしなことを口走るのか、何で彼女の前では笑うことさえ難しくなってしまうのか、何で彼女には優しくしたい半分も優しくできなくなってしまうのか、そんなこんなにひたすらうろたえて戸惑ってためらい続けた日々。
　それが一気に甦って全身を支配した気がした。
「あ、あの、あの、あの」
　何を言うべきかも考えられずにおたおたしている俺に、
「後ろ姿が似ていたから、そうじゃないかなと思って。でも、滝くん、って」
　くすり、と可愛らしく声を立てる。
「中学から全然変わってないのね、すぐわかったわ」
　それはあまり歓迎できないことだよなと思いつつ、トレパン姿を気にしていない気さくさも、笑うと余計ににじみ出てくる甘さも、城本こそ全く変わっていない、とぼうっとした。だが、すぐに気づいた、思い出から流れて来た時間と、二人に開いてしまった距離、城本の化粧した顔と俺のいい切れないことばに。
　ちょっと切ない気分になった俺を射抜くように、城本が笑った。
「滝くん、今、時間ある？」
「え？」
「久しぶりに会ったんだもの、お茶でも飲まない？」
　とっさに頭を掠めた輝かしい五百七十二円。奢りたいもんだろう、男なら。奢れるもんだろう、俺ぐらいの年齢なら。けれど、さすがにその額じゃ足りないとわかるぐらいは、頭はきちんと働いていた。
　俺の顔に浮かんだ困惑を読んだのか、城本は悪戯っぽく笑った。
「奢るわ、バイト代入ったから」
　そうとも、俺の一文無しは中学の頃から筋金入りだ、自慢にならないが。
「でも、女の子に奢らせるなんて…」
「相変わらずね、お人好し」
　城本は溜め息まじりに俺のことばを遮った。
（何だ？）
　ほんの一瞬、見過ごしてしまいそうなその一瞬、城本の目を妙に気怠そうな色が過ってどきりとした。それは捨鉢な気配、ここまでやっちゃったんなら、後はどうでもいいというような、人生に倦み疲れた気配。
（城本？）
　あの頃の彼女には、もちろんそんなものは微塵もなかった。なのに、今。
（何があった？）
　確かめる間もなく切り出された。
「じゃ、明日『ロード』で会いましょ。わかる？」
「あ、うん」
「ちょっと話したいことがあって」
「あ、うん」
「じゃ『ロード』に13時半ね」
「あ、はい」
　じゃあね、と城本はスカートを翻して去っていく。
　後ろ姿を見送りながら、今あった出来事は夢じゃないだろうな、と不安になった。そっと頬をつねってみる。痛くない。やばい、痛くないぞ。これはやっぱり夢か、夢だったのか、いやどうか夢ではないと誰か言ってくれ。
　俺はもっとはっきりした答えを求めて周囲を見回した。いつもならこういう時には、電柱に一発ごんとぶつかれば、すぐに夢かどうかわかるはずだ。
　なのに、こういう時に限って手頃な電柱が見つからない。
「あ」
　少し離れた所にぶつかりやすそうな電柱が一本あるのを見つけて、そっちへ向かってふらふら歩いていく、と、
「ぎゃ！」
　次の瞬間、俺は嫌というほどアスファルトに叩きつけられた。
「…おじちゃん、大丈夫？」
「ぐ、うぁ」
　のろのろと体を起こし、足に縄跳びの縄が絡んでいるのを見つけた。ちかちかした視界を必死に瞬いて周囲を見回し、声をかけてきてくれた女の子と、その子に向かって止めときなよ、おかしいよあの人、と不安そうに忠告する友達連中に気づいた。子ども達の遊んでる最中に突っ込んでしまったらしい。
「あ～ごめんな、すまんすまん」
「う、うん…」
　謝る俺からそそくさと縄を取り返す女の子に、重ねて詫びようとしていたら、
「くっくっくっ……」
　必死にこらえてるけど漏れちゃった的な笑い声が響いた。
　むっとして振り返ると、道のもう一方の端を歩いている男が顔を背けつつ、くつくつ全身で笑っている。
「んなろ…」
「くくっっ」
　俺が苛ついて立ち上がったのがまたおかしかったのか、今度は半分振り向いて男が笑った。人なつこそうないい感じの男だったが、普通そこまで見知らぬ他人の失敗を笑うか？　絶対一言言ってやろうと一歩踏み出したが、そこで男の向こうにあるものに気づいて立ち止まった。
　そうだよな？　この場合、あえてこっちだけ人道的に振舞わなくちゃならないわけはないよな？

　男は俺が諦めたと思ったのか、にやにや笑いつつ横目で眺めながら歩き続け…。
　ごん！
「っっ！」
　こっちまで聞こえるぐらいの音で電柱にぶつかった男が、悲鳴を噛み殺して踞る。
「ひっひっひっ…」
　俺は快く笑いながら向きを変え、踞ったまま泣きそうな顔で電柱を睨みつけている男を傍目に歩き出した。気のせいだろうか、どうも男の姿というか雰囲気というか、そういうものをどこかで見たような気がするんだが。
「知り合い、じゃないよなぁ……一体どこの誰だったっ……ひっっ！」
　じゃぶっ！
「……おじちゃん……」
「やめときなよ、ちえちゃん…」
「でもさあ…」
　おそるおそる側に寄ってきてくれた「ちえちゃん」は俺が飛び散らした泥はねを踏まないようにしゃがみ込みながら、両脚をドブに突っ込んだ俺をじっと見る。
「あのね、前を見て歩いた方がいいと思う」
「うん、俺も今そう思ってる……ありがとな」
　心配そうな相手に、俺は必死に笑みを返して応えながら気がついた。
　さっきの男。
　あいつは、俺にそっくりなんだ。

2.奴

　世界はいきなり全てが輝きを増した。いや、これほどまで世界が美しいとは今の今まで気づかなかったというべきか。
「おお、晴れ渡る空よ！　雲よ！」
　空中に浮かび手を広げて大声で叫びたい。
　何せ、今日は百合香とデートだ！
「金？」
　だが、俺のそんな気分とは正反対のうさん臭そうな顔で、『牛乳ビン底』眼鏡の後ろから俺をねめつけた宮田は、むっつりと唸った。
「ジーパン一本分の金を貸せ、だと？」」
「ああ！」
　上機嫌で笑いかける。矢でも鉄砲でもレイルガンでも持って来い！
「バイトして必ず返すよ！」
「返すよ？」
　宮田は眉を寄せた。
「女だな」
　どきりとする俺に、にんまりと嫌らしい笑いを浮かべ、
「やっと夜明けが来たんだね、滝くん」
「そうだ、明けない夜はない！　春が来ない冬はない！」
「一日終えりゃ日は沈むけどな」
「ほっとけ！」
　で、どうなんだ貸すのか貸さないのかと詰め寄ると、
「舞い上がってるお前を見るのは気持ち悪いから貸してやる」
「何だそれは」
「要らないのか」
「要る！」
　非生産的なやりとりのあげく、何とか宮田から金を借り、新品のジーパンを一本、格安で手に入れて意気揚々と朝倉家に戻ってくる。
「これでお茶の一杯は飲めるだろうし」
　財布に残っているはずの金額を必死に算出していて我に返る。
「あ…一応、周一郎には話を通しとかなくちゃな」
　宮田に返金するためにアルバイトを始めることになるが、つまりはここと掛け持ちになる。本来の雇い主に話をしておくのは、それこそ礼儀というものだろう。
　まっさらのジーパンを履いて足取り軽く、周一郎の部屋に向かう。
「…どうぞ」
　ノックの音に、上品で隙のない返答が戻ってきた。誰か部屋に居るらしい。よそ行きの取り澄ました周一郎の声は、最近そういえば聞いてなかった。
「…滝さん」
　入ってきたのが俺だったのが、周一郎には意外だったらしい。不思議そうな声を返してくる。だが、俺は俺で周一郎の側に立っていた男にびっくりした。初夏へと向かうこの季節に、冗談みたいな黒づくめの背広、周一郎との距離がひどく近い。まるで寄り添ってでもいるようだ。
　商談の真っ最中だったのか、苛立たしそうな気配を満たして振り返った、その瞬間。
「あ！」「あああ！」
　俺達は同時にお互いを指差して声を上げた。人懐っこい顔立ち、見慣れた動き、紛れもなく俺がこけたのに大笑いしやがった奴だ。
「知っているんですか？」
　興味深そうにサングラスの奥で目を光らせた周一郎が問いかけてくる。
「あ、ああ、まあ」「ええ、少しは、その」
　居心地悪くもぞもぞしてしまうのも同じなら、言い訳がましい曖昧な相槌の打ち方もそっくり、だが立ち直りは相手の方が早かった。
「…英です。お話はよく伺っています。どうぞよろしく」
　そつのない仕草で俺に手を差し出す。お人好しそうな笑みが顔中に広がって、まるで鏡写しの自分の複製を見ているような気持ちで握り返す。
「こちらこそ、で…」
「ところで滝さん」
　お前は誰なんだ？
　そういう問いを見事に周一郎が遮った。
「一体何の用ですか？」
　机の上の書類に目を通し始めながら尋ねる。
「大学へ行っているとばかり思っていたんですが」
　まるで保護者のような口ぶりに少々カチンとくる。
「いや、ちょっとバイトを始めようと思って」
　思わず前置きなしに口に出してしまった。びくっと無言で周一郎が顔を上げ、続いてそんな仕草を自分がしてしまったのに腹を立てたように冷ややかな視線で俺を射抜いた。
「辞める、ということですか」
「辞めてどこ行けって言うんだ？」
　ふて腐れた。
「そうじゃなくて、三千五百円で全部賄うのはちょっときつくなってきたから、小遣い稼ぎに出ようかと」
「足りないなら高野に言いましょう、幾らほど…」

「よせよ」
　側に居る英が面白そうに見ているのに気づいて遮った。
「週三千五百円で雇われてるんだ。それ以上せびる気はない。ただ、別のバイトを始めるから筋を通しておこうと思ったんだ」
　もちろん、こっちの仕事に差し障りがないようにはするぞ。
　言い切ると、周一郎が一瞬惚けた。
「そう…ですか…」
　柔らかく息をついて妙に幼い顔になったが、すぐに気を取り直して淡々とことばを継ぐ。
「わかりました。僕の方は構いません」
　問うように微かに首を傾げ優しく見やった、と思ったのはたぶん気のせいなんだろう。次の瞬間、周一郎は俺と話していることにも興味を失ったように書類を取り上げ、隣を振り仰いだ。
「英、この海部運輸の海外ルートだが…」
　サングラスに陽射しが跳ねて表情は全く読めなくなった。
「…じゃ、そういうことで」
「はい」
　俺の声に一瞥を投げ、周一郎は軽く頷いた。それが如何にも間に合わせな感じで、くるりと背中を向けた俺は思わず荒々しくドアを閉めてしまった。ばんっ、というううっとうしい音が響いて、我ながらうんざりする。
（何に苛ついてる？）
　自分に尋ねるまでもなく、英の能天気な笑みが脳裏を過る。
「…だよな…」
　周一郎の仕事に噛んできた男、俺そっくりなのに、俺以上に周一郎に役立ちそうな人間というのが苛々の原因だろう。
「…海部運輸…？」
　ふと小耳に挟んだ名前に眉を寄せる。
「何する気なんだ、あいつ…？」
　その名前に絡む不愉快で切ない記憶を思い出したとたん、もう一人の女の顔を思い出した。
『滝くん』
　にっこり笑いかけてくれる愛らしい笑顔。
（百合香）
　俺もその笑顔に応えてにっこり笑った、その視界に時計が飛び込んでくる。
「え…？」
　一時三十五分。ごぼごぼっと不気味な音がして、身体中の血がどこかに流れ落ちていった。
「やばいっ！」
　階段を駆け下り最後の数段を転げ落ち、部屋に飛び込み財布を引っ掴み部屋を飛び出し、いつものように静かに頭を下げて見送ってくれる高野の前を、埃を巻き上げて駆け抜けた。

　走れ走れ走るんだ、何のために俺に二本の脚がある、こういう時に使うためにあるんじゃないか、そうだこけるためでも躓くためでも噴水に飛び込むためでも電柱にぶつかるためでも壁に…、
「どぐわっ!!」
　通り抜けようとした改札口に上着を引っ掛け、振りほどき損ねてブザーを鳴らしながら転がる。
「あだっ、たったったっと、う、しちゃ、られないっ！」
　跳ね起きて発車寸前、閉まりつつある電車のドアに係員の制止を振り切り飛び乗る。がこっ、と恨みがましく音をたてて合わさったドアを背中にほっと一息、何だ俺でもやろうと思えばやれるんじゃないかと安堵したとたん。
「？」
　ぐい、と上着の裾を引っ張られて振り返る。
　ドア。
　きっちりと閉まったドアがあるだけ。
「？？」
　左右から交互に振り向く俺の上着を、なおもぐいぐい引っ張ってくるような奴が立つ隙間なぞない。もしや霊とゆーれいとかオカルト的なそれかとぞっとして見下ろして、もっとぞっとするものを見つけてしまった。
「…よしてくれ」
　閉まったドアが嬉しげに見えるのは被害妄想だろう。けれど、そのドアががっちりと喰い締めているのは紛れもなく俺の上着の裾、かなり深く挟まっていて、きっと外からも俺の上着が見えるはずだ。
「おいおい…」
　確かこちらのドアは開かない。終点までずっと開かない。ちなみに終点は他県に繋がっていなかったか。
「っ、っと、とお、っ、っと、とおお！！」
　人目も気にせず引っぱり暴れじたばたしたが、百合香と待ち合わせた場所の駅まではもう目の前だ。
「さ、財布はえーとこっちか。後ポケットに入ってるのは」
　慌ただしくポケットを探り，中身を抜き出す。幸いにドアの外の部分には大事なものは入っていない。
「まだそんなに着てないんだぞ？　まだきっと寒いぞうん」
　泣きそうになりながら、それでも急いでボタンを外し、一気に両袖を抜いて脱出した。目の前で開いたドアにダッシュ、こっちもかろうじて閉まるまでに境界を抜け切る。薄いTシャツ1枚とジーパンで、五月にしては寒々とした雨の気配濃厚な気候に踏み出す。
「、っはーっくしゅっ！」
　こちらの駅の改札を抜けたとたん、派手なくしゃみをやらかした。背後ではぷっっしゅうと気の抜けた音をたてたのんびり加減で、俺の上着をくわえたままの電車が気持ち良さげに遠ざかる。
「…上着代も要るのか…」
　唸りつつぐったりした。梅雨に入れば、またひやひやとした日も出てくるだろう、いくら何でもこれだけでは厳しい。
「……うーむ」
　あの上着を終点まで探しに行く金もないのに上着とか。大丈夫か俺。

溜め息をつきつつ、『ロード』まで脚を急がせた。時間はとっくに過ぎている。これで百合香もいなくなってたら、上着一枚かけた勝負に大負けだ。
『ロード』の扉をおそるおそる開けて店内を見回す。一巡、もう一巡、そしてもう一巡。
いない。
時計は一時五十三分。
「駄目か…」
そうだよな、昔なじみと言ったって付き合ってたわけでもない男を、待ち合わせ時間を越えて待たなくちゃならない理由なんかないよな。
「はああ……」
いそいそと近寄ってくる店員に首を振り、俺はのろのろと向きを変えた。
「よっぽど女に縁がないんだなあ……」
というより、一瞬できかけた縁までもぶち切るほどの間抜け加減を恨むべきか。
「とにかく、まず仕事だな」
先立つものがなければ、女も幸福な生活も手に入らないということかともう一度深く溜め息をついて歩き出そうとした矢先、
「滝くーん！」「っ！」
明るい声が呼びかけてきて弾かれたように振り返った。
「ごめんなさい！　遅れちゃった！」
駆け寄ってくる百合香、見る見る近づき、薄紅の頬にあどけないほど可愛い笑みを浮かべてみせる。
どかん。
俺の頭に何かが直撃した。ぶっ飛んだ声で応じてしまう。
「あ、俺も今来たんだ！」
「嘘、もう帰ろうとしてたんでしょ」
「違う違う違う違う」
唇を尖らせて拗ねる百合香。いやひょっとして俺のドジはこういうことを臆面もなく言うためにあったのか。
「ほんと、今来たとこ。帰ったかと思って心配して思い切り走ってきたから上着も……っくしょい！」
「…風邪？」
「違う違う違う違う」
慌てて手を振り、小首を傾げる百合香に上着を失った顛末を語る。くすくす楽しそうに笑い出した百合香に、神様ありがとう！　思わず天に感謝する。気の利いた会話はできないけれど、これだけ百合香が楽しそうなら十分だ。
「もう、ほんと、滝くんたら」
白いワンピース姿の胸元はギャザーがふんわりと膨らんでいる。その柔らかさを俺の腕にぎゅっと押しつけてくっついてきた百合香に、一瞬中身がどっかの宇宙にテレポートした。
「どど、ど、どこ、行く…っ？」
いやむしろ、お前がどっか逝ってるぞ、今。
自分でツッコミつつ、へらへら笑う俺を見上げ、百合香が甘い声で応じる。
「どこでもいい、かな」
うわあ。そんなの卑怯だろう。俺を男だと思ってないからの暴言か。
「滝くんと話せればどこでもいい」
思わず立ち止まってしまった。
「どうしたの？」
「ああ、えーとつまりその」
すみませんごめんなさい、今いろいろと終末的なことを考えて頭がノアの洪水を起こしてて言語機能がいろいろなものに溺れて麻痺しました。なのに別口の何というか生物的なものは無駄に気力を盛り返しているというか、好きとも何とも言われていないのに、その先を想像するってのは、ほんとモテない男の悲しい性だな、うん！
「ほんととってもいい天気だよな！　鯛焼きだって泳ぐよな！」
「え…？」
きょとんとした百合香の顔に、心底言わなけりゃよかったと後悔した。
「たいやきー？」
くすくす笑う百合香は、ほんともうどうしたらいいんだか、という顔だったが、全く腹が立たない。俺ってそんなにこの子のことが好きだったっけ、と密かに感動したけれど、そのくすくす笑いに合わない強さでぐっと腕を抱き締められ、熱っぽさにどきりとするより妙に不安になった。
（あれ？）
何だろう、この感覚。俺と百合香は他愛ない冗談を言い合っていちゃいちゃしてる図、のはずだよな？　なのにこの、抱き締められた腕に押し付けられた体は、あったかくて幸せそうというより、何かちょっと緊張してないか？
「…城本さん…？」
戸惑った俺の声に、百合香は一瞬眉をひそめた。それから切なそうに呟いて、俯いて俺の視線を避けた。
「…滝くん…」
「……気分でも悪いのか？」
「……あなたなら」
「え？」
消え入るような微かな声、思わず身を屈ませて聞き取ろうとする。
「何？」
「……あなたなら……良かったのに」
「…は？」
「私って…男を見る眼、ないのね！」
唐突に明るく言い放って、顔を上げた百合香がふいに俺に唇を寄せる。
「うわ！」「きゃっ」
そうだよ、こういう時に何で避けるかな俺は。急にいい匂いが間近に来て、ひんやりとした濡れたものが頬に触れて、とっさに仰け反った俺に百合香も驚いたんだろう、慌てて顔を背ける。

「…」「……」
　気まずい。お互い見る見る顔が赤くなっていくのは、照れとか往来で大胆なとかじゃなくて、きっと本当なら差し出して受け止められてのいい感じのものが、一瞬に霧散してしまったからだ。
「…行こっ」「あ、ああっ」
　立ち直ったのは百合香が先で、俺達は同時に固まってしまった周囲から逃げるように、慌ただしく脚を動かした。
「…ごめん」「ううん」
　百合香が隣で首を振る。
「…ほんと、ごめん」「……うん」
　二度目の謝罪に百合香が小さく笑った。
「ねえ、滝くん」
「うん？」
　何でしょう何々。急いで覗き込む。
「岡崎くん、覚えてる？」
「ああ、あの美容師志望の奴な。ハリウッドのヘアメイクはオレに任せろとか言ってた奴」
「彼、今、小塚町に店を持ってるのよ」
「店？　凄いな」
　俺らの年齢で店持ちなんて、何をやらかしたんだあいつ。思い込みのなせる技か、イメージトレーニングの成果か。
「それからねえ、坂田くん、サラリーマンになっちゃったよ」
「小説家志望だったよな？」
「そうそう、小説の未来はオレが背負う！とか言ってたけど」
　それから、田川くんはねえ、家を継いで酒屋さんになって、大平くんは今は地方公務員で、西ちゃんはヨーロッパで。
　百合香は指折り数えるように次々と懐かしい名前を夢見るように上げた。
　中学時代。無駄に気負ってて無駄に落ち込んでて無駄に夢ばっかり膨らませて、けど、どれもとんでもなくかけがえなく大事で、大人なんかにはわからない、周囲の誰にもわかってもらえない願いとか理想とかに必死に辿りつこうとしてて。
　きっと無駄どころじゃなかったんだ。一つ一つがあまりにたくさんのことで一杯でぱんぱんになってるから不格好になってただけで。
　それが歳をとり、大人になって、少しずつ削ぎ落とされて整理されてまとまってくる、手がつけやすい形に、何とか満たされそうな願いに。そうして皆、今は俺の知らないどこかで、あの頃の気持ちを含ませたまま、それぞれの生活を頑張ってる。
　もう会えないかもしれない、けど、一度は手を握ったり肩を叩いたり笑い合ったりするほど、近くに居た仲間が。
（出逢って、別れて…別れて、出逢って）
　ふと、その仲間達の中に紛れ込むように、周一郎の後ろ姿が浮かんだ。
　中学時代の周一郎？
（やっぱりむかつく奴だったんだろうな）
　頭が切れて妙に鋭くて冷ややかで、なのにここぞという時にがっちり女の子の視線を攫っていくような、教師からも一目置かれて何となく遠巻きに絡まれたりしちゃうような。
（いつかあいつとも別れていく）
　斜め後ろを振り返る周一郎の視線を感じたと思った矢先に、遮るように英の顔が浮かんで微妙な気持ちになった。
「…くん？　滝くん？」
「えっ」
　遠くから声が聴こえて我に返った。
「あ、ごめん、聞いてなかった！」
（しまった！）
　貴重なデート時間を何を考えて過ごしてる、と慌てて百合香を見下ろす。
「ごめん、何だっけ」
「いいなあ」
「は？」
「滝くん、幸せそう」
「しあわせ…？」
　また小さく溜め息をついた百合香を訝りながら見つめる。
「何かそれって」
　城本は幸せじゃないみたいだよな？
　そう言いかけた矢先、
「う」
「城本？」
「ごめ…」
　ふいに口元を押さえた城本が見る見る青ざめた。
「吐きそうなのか?!」
　慌てて周囲を見回す。近くに一昔前風のカフェがある。古風なガラスの嵌まった木の扉、百合香を引きずるように引っ張って飛び込み、ぎょっとするウェイトレスに叫ぶ。
「トイレどこっ！」
「あ、あちらに」
「どうも!!」
　百合香を抱えてトイレへ突進し、女性の方へ突き出すと、彼女が口を押さえつつ扉の中へ飛び込んでいった。
「えーと…」
　店中の視線が微妙に痛い。突然飛び込んできたカップルの一人が、明らかに今にも吐きそうな顔でトイレに駆

け込んだとなれば、さすがに俺でも考える。
（そうか）
「あの…」
　ウェイトレスがそっと俺を伺うのに、
「すみません、えーと、コーヒー、一つ」
「かしこまりました」
　一旦引き下がったウェイトレスと入れ替わるように、百合香が出て来て、俺に向かって弱々しく笑った。
「大丈夫、じゃなさそうだよな？」
「…うん」
「少し休んでいこう」
「……うん」
　席についた俺の前にコーヒーを置き、百合香が注文したミルクティも届けられる間に、俺はもう一度胸の中で呟いていた。
（そうか）
　瞳に映った翳りも、切なそうなことばも、さっきとは全く違った意味合いで俺の心を波立たせる。がっかりしなかったとは言わない。いやかなりがっかりしてる、してるけれど、目の前に俯いて座っている百合香が、打って変わってハンカチをきつく握りしめて黙り込むのを見ている方が辛かった。
　コーヒーを一口。続いてもう一口。また一口。
　百合香はミルクティに口をつけない。
　気分がまだ悪いのか、それとも体を大事にしているのか。
　それなら、なぜミルクティを頼んだのか、目の前に座っている俺みたいに。
「……あのさ」
　ぼそりと呟いた。
「もし、よかったらさ」
　父親が誰か聞いてもいい？
　いや、それはあんまりだろうな、やっぱり。
　どういう事情か聞いてもいい？
　いや、話せるんなら最初から話しているだろうし。
「……えーと」
「……」
　くすん、と小さく鼻を啜られて溜め息をついた。
　やめだ。どうせうまく慰められやしない。
「俺に話して気が楽になるなら」
　話していいよ、どうせ『安全圏』の男なんだろうし。
「……」
「…だよな、助けにはならないよな」
「……ふ」
　ふいに、百合香が小さく息を零した。
「どうして…」
「え？」
「どうしてそんなに優しいの、滝くん」
「？」
「昔からそうだったわよね」
　百合香はふいと目を上げた。起きたまま夢を見ているような、甘くて柔らかな、けれど目の前の俺は映していない瞳だった。
「捨て猫の側で、ずっと傘をさしかけてたこと、あったでしょ」
「あったっけ？」
　そもそも俺が自由に使えた傘なんか、あったっけ？
「そう、あったわよ」
　百合香は淡く微笑んだ。
「寒い雨の日だった……捨て猫を見つけたのは滝くんだけじゃなかった。他にも何人も…腕に抱いたり温めたり、家に連れて帰ったりして…でも、反対されたんでしょうね、結局みんな、そこに戻すしかできなかった。でも、あなただけは」
　視線が動いて、ゆっくりと俺の顔に焦点が合った。
「あなただけは、猫を抱き上げなかったけど、みんなが帰った後もずっと何時間もそこに立ってたでしょ？　夜になって九時を過ぎても、まだ立っててびっくりした。十時になってもまだじっと立ってて……十時半になって、やっとあなた帰ったけれど、傘を残して帰った…」
　百合香は一口、ミルクティを口に含んだ。
「なんて意気地なしなんだろう。そう思ったのよ、その時。あんなことしてないで、抱っこしてやればいいのに。家に連れ帰って飼ってやればいいのに。そう思ってた」
　いきなりの罵倒かよ！
　そう突っ込みたくなったのを我慢してコーヒーを飲むと、それは思わぬ形で俺の元へ戻ってきた。
「でも、最近気づいたの、抱き上げなかったのも……一つの優しさなんじゃないかって。その時だけの温もりを与えるより、もっと長い間見守ってやる方を、雨から守ってやる方をあなたは選んだだけじゃないかって……抱き上げてやれば何かした気にはなるけれど、結局戻されるんだから同じことよね。傘を残してやることは自分が濡れることと引き換えよね。ひょっとしたら、その傘は雨が上がるまで冷たい雫から守ってくれるかも知れない。体が濡れなくて凍えなくて、だから体力をなくさずに、ひょっとしたら拾ってくれる誰かと巡り逢うまで守ってくれるかもしれない…」
　ごめんね、滝くん。
　百合香は小さく謝った。
「私、あなたの強さに気づかなかった」
「そんな…いいもんじゃないよ」

うろたえて思わず反論した。
「俺は濡れてるのが冷たそうだなって思っただけだ」
連れ帰ることはできなかった、自分もまた施設に拾われたようなものだと思ってたから。抱き上げるにしても五匹全部は無理だと思った……順番に抱きかかえていくという発想はなかったのだ。
どうしよう、どうしようと迷いながら、傘を差し出したまま考えていた。考えて考えて考えて、どうしてもいい答えが見つからなくて、気がついたらとんでもない時間で慌てて帰ろうとしたら、にぃん、と小さな声で鳴かれて、そいつをもう濡らす気にはなれなくて。
「そうだよ、で、結局晩飯は抜かれたし傘をなくしたってこっぴどく叱られたし」
お前はみんなの傘を一つ、放り出してきちまったんだぞ！
怒鳴り声が頭に響いた。
そうだそうだ思い出した。自分の傘ならまだしも、あれは施設の共有の傘だった。男物の大きいのは数本しかなくて、いつも大きい兄ちゃん達が取り合っていたが、たまたまあの時は俺が使うことができたのだ。
「ああ、そうか…」
思わず呟く。滅多に使えない、大人物の大きな傘をさしていて、俺は自分が少し大人になった気がしていた。傘の広さの中に誰でも入れてやれるような気がしていた。けれど、あの時の俺には、傘に入れたり入れてもらったりするような友達は一人もいなくて、そうだ、俺も寂しかったんだ。
だから傘をさしかけた。濡れて捨てられた小猫に。俺のものではないけれど、十分相手を包める大きさの、その傘に。そうやって、自分が傘にふさわしい大人になった気がしてた。
もっとも、飯抜きになったところでやらなきゃよかったとひどく後悔し、次の日慌てて傘を探しに戻ったのだが、百合香はそれを知らない。知らないからのヒーロー伝説というわけだ。
「それより、よくそんなこと知ってたなあ」
俺は話題をすり替えた。お由宇と周一郎に一年以上付き合っていると、俺でもこれぐらいの裏技は使えてしまうのだ。
「あの捨て猫の前の家」
くすりと百合香は笑った。
「私の家なの。二階から見てたのよ」
「え、そうなのか」
「そう。ひどい話よね」
あの場所は、捨てやすいのかしらね、ほんとによく子猫や子犬が捨てられてるの。保健所に電話しても、すぐ場所がわかるぐらいなの。
「だから、私も慣れちゃってたのよ」
だめね。
掠れた声が笑った。今度は胸を引っ掻くような切なげな声だった。
「ああまただ、仕方ないななんて、命に対してそんな気持ちしかなかったから、こんなことになるのねきっと」
「え？」
「ううん……ねえ、滝くん」
百合香が不意に口調を変えた。がぶがぶとコーヒーを呑み干した俺をまっすぐに見つめ、
「また会ってくれる？」
これは何だ、どういうギャグだ。それとも素人どっきりか百合香はそこまで酷い女になったのか……そんなわけあるか。
「何で？」
それでも口を突いた問いに、百合香は小首を傾げる。
「だめ？」
「何で、俺なんか」
そのお腹の子の父親はどうしたんだ？　一体どこの誰なんだ？　そいつは今、こんなに頼りなく落ち込んでしまっている百合香を放って、どこで何をしてるんだ？
捨て猫の話をしたせいか、百合香が高級そうなシャム猫に見えてきた。ツヤツヤの毛並み、鮮やかな瞳、きっと大事に飼われていたのだとわかる安心しきった人への信頼。なのに、そいつはたった一匹、誰も振り返らない街に放り出されている。
「……滝くんがいい」
百合香はそっと応じた。
「側にいたい」
必死に訴える小さな願いを、俺は無視出来た覚えがない。
「うん、いいよ」
精一杯明るく笑ってみせた。

嫌な予感はしてたんだ、うん。
いつも通りの愚痴をぼやきながら朝倉家に戻ってきた。アルバイトの口は幸いすぐに見つかって（世の中はひどく労働力不足なんだろう）、Dr.ドナルドのハンバーガーショップ店員、時給七百八十円、夕方五時から九時ということで、明日から出ることになった。
けれど、せっかくのデートがほんわか可愛いものじゃなくて、厄介事の気配を孕んだややこしいものに発展しそうな今、アルバイトの方も十分注意した方が良いかもしれない。商品を駄目にするとかお客とトラブルになるなんかはましなほうで、砂利を一杯積んだトラックが突っ込んでくるとかスペースシャトルが落ちてくるとか、とにかく予想外の何かが起こってくるかもしれない。
もっとも、普段から俺が厄介事に注意していないわけではなくて、避けよう避けようとしているのに結果的に厄介事のど真ん中に居る羽目になってしまう、というのが常道だが。
「それを言うなら、ここも厄介事の焦点だったっけ」
呟いて、遥か向こうの朝倉家の玄関を見つめる。
特に今回は、周一郎が何やら企んでいる気配もあるし（いつもか？）、それにあの、英、とかいう奴も気になる。
（何者だ、あいつ）
周一郎と同じ世界に生きているような気がする。一筋縄ではいかないだろうとも思う。なまじ俺と似ていると

いうのがなお癪に障る。
（同じタイプの人間だけど、あっちの方が出来がいい）
　冷酷な理性がずばりと言ってのけてくれた。
「…だよな」
　俺は周一郎の『遊び相手』。
　けれど、何度か事件を潜って、周一郎と組んでうまくやっていけるのは、ひょっとして俺だけじゃないかとそんな気もしていた。それはもちろん、お由宇とかの刷り込みもあるけれど、周一郎の『相棒』として一番いい立ち位置にあるんじゃないかとも。
　今までそれほど人に頼られたこともなく、これほど長く人と近しい関係を持ったことがない俺にしても、周一郎の存在はいつの間にか『特別』になっていた。百合香の件にしても、今までなら滅多にない女の子とお付き合い、わあ嬉しい、というところで考えるところだったのを、何だろうな、百合香の置かれた場所そのものの頼りなさみたいなものが見えて心配してしまったのは、きっと周一郎との絡みがあったからだ。
　なら、俺は？
　俺は、どこの場所に居る？
　たとえば、周一郎の視界の中に、俺はいったいどんな風に立っている？
　英を見ると、そんなことが急に気になってくる。
「……あれ」
　考え事をしていたせいか、いつのまに小道を逸れてしまったのか、無意識に湖の側に来ていた。
　今日の水は良く澄んでいる。水際からするりと深くなる淵を覗き込むと、水底の石やそこを素早く過ぎる小魚が見えた。
　しゃがみ込んで手を浸す。ひんやりと沁みてくる水の冷たさに身震いして、自分がTシャツ一枚だったことを思い出す。けれど、じっと手を入れてると水の中の温かさ、みたいなものを感じる気がする……幻かもしれないが。
　脳裏に周一郎の瞳が過った。
　今，何を考えているんだろう？
「ふ…」
　ぶるっと体が震えた。
「ふぇーっくしょっ……ひわ！」
　派手なくしゃみに体勢が崩れた，次の瞬間、お約束通りに足元が滑る。
　ばしゃっ!!
「どあっ！」
　尻餅をついて危うく肩まで浸かりそうだったのを何とか堪えて、それでも飛沫でぐっしょり濡れてのろのろ立ち上がった。
「まじかよ……」
「滝さん？」
「っ」
　声に振り返ると、今一番居て欲しくない奴がそこに居た。
「どうしたんですか？」
　英が無邪気に不思議そうに尋ねてくる。
「見りゃわかるだろ」
　じゃぶじゃぶと岸へと歩いて戻る。
「水浴び、にしては早すぎる気も」
　マジか。
「落ちたんだ！」
　ざぶんと最後の一歩を勢いつけて踏み上がる。ぶしゃぶしゃと気持ち悪く靴の中で水が動いた。
「風邪を引きますよ」
　英が背広を脱いで渡してくれたが、びしょ濡れの手で掴むのが気になって戸惑う。
「いいですよ」「けど」「すぐクリーニングに出しますから」「クリーニング代」「今払えないのは知ってます」「…」
　お互いにじっと相手を見つめて、同時にふううと溜め息をついた。
　何だこの異様なタイミングの良さ。というか、まるで。
「分身みたいだね」
「あ？」
「敬語が気持ち悪い」
「…わかる。自分に敬語使ってるみたいな気分だろ」
「うん」
　英が頷くタイミングさえ俺そっくりで、受け取らない背広をやれやれと手元に引き寄せながら、
「着替えはあるのか？」
「ない」
　ふう、とまた溜め息をつきかけたとたん、派手なくしゃみを三連重ねた。
「来いよ、僕のが合うよね。ほぼ同じ体格みたいだし」
「着替え？」
「しばらくここに滞在する」
　英は一瞬俺を試すような視線を返した。
「朝倉さんとの仕事が終るまでね」
「へえ」
　中途半端に頷いて、歩き出しながらつい尋ねた。
「一体どんな仕事だ？」
「……いいだろうね、朝倉さんも君のことをアドバイザーとして扱っているし」
「…そう言ったのか、あいつが」
「いや」
　英が軽く首を振った。髪が風になびく。俺より柔らかくて手入れが行き届いている髪だった。

「それぐらいわからなくちゃ、彼とやっていけないよ」
「…さようで」
　俺よりうんとお出来になる、ってわけだ。
「僕はタジック社から朝倉財閥と手を組むために派遣されてきたから」
　タジック社。
　ふい、と唐突に脳裏を情報が掠めた。アメリカ本社の外資系の会社だ。確かお由宇が話していたことがある、ロボット産業でしのぎを削っている数社の一つだと。
「アメリカから来たのか」
「そうだよ……よく知ってるね？」
　英は少し目を見開いた。
「アメリカ資本って言うことは割と知られていないはずなんだけど」
　微笑まれてひやりとする。しまった、こいつはお由宇のマル秘情報だったのか。
「君も有力なラインを持ってるってこと？」
　有力なラインには違いない、ただし、俺の自由には全くならないラインだがな、その気になれば、月の餅つきの様子さえわかるんだぞ…たぶん。
「海部運輸って知ってるかい？」
「ああ」
「あそこの海部敏人をはじめとする中枢が、最近殺されるという事件があってね」
「…ああ」
　よぉく知ってるぞ、そいつのことなら。できたての死体と次々ご対面してきたんだからな、とこれはさすがに口に出せない。
「…彼は凄いね」
　口を噤んだ俺にわかってるよ的な微笑みを返して、英が切り出した。
「あの海部の海外ルートに目をつけた…今なら片手間で吸収できる、ってね」
　口調がひんやりと熱を失った。
「そのルートをこちらも利用できるという条件で、タジックは人材と資源の提供を申し込んだよ」
「…その人材ってのはあんたか」
「まあね」
「…やれやれ」
　俺は唸った。
　骨肉相食むということばがある。あの古城で起きた出来事はまさにその通りだったが、相食み合った後の屍体にさえ次々と新たな食み手が喰いついていく。
（あいつがいるのは……いや、あいつが生きているのは、そういう世界）
　周一郎の薄い笑みが甦る。
　二つの顔を使い分ける少年。ただの年相応のいや年齢以下の人生経験しかない子どもと、朝倉家の当主としての年齢以上の社会経験を重ねた大人の、一人二役。
（それだけじゃないのかも知れない）
　俺の知らない全く相容れない世界に生きる、何人もの周一郎が居るのかもしれない。
（俺、大丈夫か？）
　ふいにぞくりとした。全身濡れそぼっているからだけではなく、腹の底から冷えてくるような、背筋を冷たい手で撫で上げられるような、そんな寒気。
（俺はきっとまだまだあいつのことなんか知らない）
　けれど、英は？
　思わず振り向いた俺の視線の意味を、英は的確に読み取っていた。にこりと笑う、お人好しそうに、上品に柔和に。
「本当に凄い人だよ。やりがいのある仕事だし、全てにおいて支えていきたいと思ってる」
　微笑の中で両目がきらりと酷薄な色に光った。目の前で子どもが転んでも、必要とあらばその手を踏みつけられるような、ひどく冷たい、険しい光。
　だが、それに俺が気づく前に、英は再びにっこりと笑った、誠実そうに。
「じゃあ、僕の部屋へ行こうか」
　こいつは冷たい。
　感じた瞬間、自問自答する。
（なら、俺は？）

　濡れ鼠になって戻ってきた俺に、高野が素早くタオルを差し出し、体を少し拭ってから英の部屋へ向かう。さすがに下着は予備があった。
「スラックスしかないから窮屈だろうけど」
「この際何でもいい」
　いくら寛容な高野とは言え、パンツ一枚で食堂に来させるような無謀なことは考えていないだろう。
「君なら…このあたりかな」
　英は俺をちらりと眺めただけで、灰色のスラックスにブレザー、淡い青のカッターシャツを準備してくれた。ただの灰色じゃなくて織りが凝ってて動くと服のイメージが変わる。シャツの襟や手首、ボタンはフォーマルなものじゃなくて裏地を変えてあったり飾り縫いが施してあったりしている。
　かくして、俺はここにきて初めて、朝倉家らしい服装をすることになった。似合っているのかどうかというのは多少異論があるかもしれないが、仮にも英が見立てた衣服、二目と見られないという格好じゃないはずだ。
　濡れた服は高野に乾かしてもらうために片手に持ち、英と部屋を出る。
「周一郎は」
「え？」
「俺のことを何か言ってたか？」
「…いや、とくに、何も」
「ふうん」
　最後の何も、が妙に力強く感じたんだが、気のせいだろう。

「とくに、何も、か…」
　そんな程度だったのか。
　友人その１。
　英は周一郎と同じ階に寝泊まりする。対して俺は未だに一階だ。この差はどこから来るんだろう？　頭か性格かそれとも顔か？
　周一郎の部屋の前を通り抜けかけて、ドアが開いているのに気づいた。何の気なしに覗き込むと、机に突っ伏している周一郎が居る。具合が悪くなったのかとひやりとしたが、空気は柔らかく重くなく、どうやら誰もいないと思っての仮眠中、開け放った窓から風が吹き抜け、ふわりふわりと周一郎の細い髪の毛を巻き上げる。
（ちょっと冷えてる）
　風邪を引いちまうんじゃないか。
　思わず部屋に踏み込んで、体にかけてやれる毛布とかタオルケットがどこかにないかと見回した。
　そのとたん、脇から黒いブレザー姿がすいと滑り込む、ばかりか、ソファに載っていた掛け物を手に周一郎に近づき、あろうことか、優しく静かに周一郎にかけてやる。
「っ」
　俺のやろうとしていたことそのままを、俺よりももっとスマートにやってのけた英に、しかも俺が近づいてさえ時には跳ね起きる周一郎が身動き一つしないのにぎょっとした。
（周一郎が起きない？）
　棒にぶっ刺されたような気持ちで立ちすくんでいる俺の視線に気づいたのか、周一郎の側に寄り添った英が顔を上げ、にっこりと邪気なく笑って見せる。
　大丈夫だよ。
　その笑みはそう宣言している。
　君がいなくても、周一郎さんは僕が支えていけるから。君が居るより遥かに確かに、君が為すより遥かに易々と。それだけの能力がある、それだけの理解を僕は備えている。
「…」
　何だか急に、居てはいけない場所に居るような、さっさと出て行けと満面の笑みでののしられたような気がして、思わず向きを変えた。
（あいつ、目を覚まさなかった）
　階段を下りながら、一足ごとにめり込むように落ち込んでくる。
（なぜだ？）
　いくら仮眠中とは言え、人の気配には誰よりも過敏な周一郎が、あれほど間近に他人が居ても、その他人が自分の体に触れかけても、全く起きないなんてあり得ない。もし、あり得るというのなら。
　階段下で、まるで俺の足音を聞きつけていた猫のように待ち構えていた高野を、思わずまじまじと見つめてしまった。
「滝様？…お洗濯ものですか？」
「あ、ああ」
「頂きましょう。……他に何か？」
「…いや、ありがとう」
　汚れ物を高野に渡して歩き続ける。
　周一郎は他人を寄せ付けない。寄せ付けるのは、本当に心を許した相手だけ。
　いつかの、俺の肩を枕に眠り込んでいた周一郎を思い出す。
　ああいうのは『俺』にだけするんだと思っていたが、意外にそうでもないのかもしれない。周一郎が安堵したのは『俺』にじゃなくて、『俺』の中にある何か、間抜けさとか平凡さとか当たり障りのなさとか、そういうものなのかも知れない。ならば、今ここにやってきた英の中に、その『同じもの』があるなら、そちらにも反応して当然かもしれない。
　つまり、周一郎は『英』にも心を許せるのかもしれない。
（つまり）
　俺じゃなくても構わない。
「にゃあ」
「っ」
　いつの間に外に出ていたのか、突然足元で響いた鳴き声に飛び上がる。
「…よう」
「に」
　ルトがこちらを見上げている。
「……ご主人様についてなくていいのか？」
「にゃに」
　まあねと言ったように聞こえた。俺が伸ばした手に飛び込み、英のブレザーに容赦なく爪をたてて胸から肩へと駆け上がり、そこに落ち着く。
「おい」
「にゃふ」
　珍しくすりすりと耳元に頭を擦り付けられて苦笑いした。
「慰めてくれてんのか？　いい奴だな」
「なーう」
　まあいいよ、行きな。
　そんな感じで尻尾が背中を叩く。
「あいよ」
　俺は溜め息をつきながら、のたのたとお由宇の家に向かった。

「お由宇～」
「はぁい……あら、ルト」
「そっちか?!」
　言っとくけど、訪ねてきたのは俺なんだからな俺俺俺！
　ついさっきまで『俺』か『英』かなんてことを考えてたせいで、思わずわあわあ主張してしまったのを、

「わかってるわよ、お入りなさい」
　これもまたいつもと同じく動じない顔でお由宇が頷く。
　あら、ルト、もないもんだ、結局俺を無視してんじゃねえか。
　ぶつぶつ言いながら入った俺を、今度は逆にまじまじとお由宇が見つめる。
「…どうしたの、その格好」
「そこか！」
　また突っ込んでしまった。
「どうせ俺には似合わねえよ、悪かったな、ジーパンじゃなくて。悪かったな、確かにこれは俺のじゃねえよ」
「どうしたのよ、一体」
　くすくす笑いながらお由宇はいつもの場所に招いてくれる。俺が来るのを知ってたのかと言いたいほど素早く出されたコーヒーをまず一口、ルトも初めてきたはずなのに、平然とソファの上に飛び上がり上品に座ってお由宇を見た。
「それで？」
　お由宇が自分のカップを取り上げながら、そのルトに微笑みかける。
「今日は何の用？」
「だーかーら！」
　どうして俺じゃなくてルトの方を向いて話すんだっ！
「え？　だって、用があるのはあなたじゃなくてこっちでしょ？」
　白い指でルトを指す。ルトもまた、可愛らしくにゃああん、と鳴いてみせる。
「きっと急ぎの用なのよ、ねーえ」
　まるでお由宇は小さな子どもに話しかけるように小首を傾げてルトににっこり笑いかけた。
「一人で放っておけなかったぐらいだもの、ねーえ」
「一人じゃないぞ」
　思わず口を挟む。
「あいつの側にはちゃんと英がいる」
「…誰？」
「英京悟……このジャケットの持ち主だ」
　いや、もちろん、それ以外の特性はある。けれど今は言いたくない。
「あなた、ジャケットに負けたの」
　呆れ返った顔でお由宇が突っ込み、
「違うっっっ！」
　最大音量で否定してしまった。
「あらあら」
　やっぱり驚いた顔一つ見せず、お由宇が肩を竦める。
「どうしたのよほんと、いやに熱くなっちゃって」
「う」
「まあ話してみなさいって。その人は誰なの？　何をしてるの？」
　何をしたの、じゃないところが堪えた。
　ぼそぼそと英について説明をする。周一郎の仕事相手で、微妙に俺と被る感じのキャラクターで、周一郎もいつもとは違って懐いてるみたいで。
「しかもだな、あいつが無防備に寝てるところへ近づいたのに、周一郎は全く起きなかったんだぞ！」
　どうだ、と決めてみたつもりだったが、お由宇は馬鹿馬鹿しいと小さく呟いた。
「ばかばかしい？」
「気に入らないなら、面白いわね？　ってところ」
「何が面白いんだ」
　俺か。俺がしょげててみっともないところが面白いのか、けど待て、そんなのいつものことだから今更面白いも何もないだろう、そんなことを面白がってるなんて、お前もよっぽど暇なんだな、どうだ！
　と言ってやりたかったが、どうせ口では勝てるわけがないので黙ってコーヒーを飲んだ。
「面白いわよ、とっても。よくもまあそこまで信じる気になったわ、ねーえ」
　とこれまた、お由宇はルトに話しかける。
「だから！　話してるのは俺！　だから！」
「わかってるわよ。けれど、一つはっきりさせときましょ、何がそんなに腹が立つのよ？」
「え…」
　何がって。
　思わず口ごもる。
「周一郎が他の人間に心を開いていくのが嫌なの？」
「そういうわけじゃ……ある、のかな……？」
　俺の前でだけ仮面を外す意地っ張り。俺が特別。ドジで厄介事吸引器の俺が、あいつにとっては特別な奴。
　そういうのがちょっと、いやかなり嬉しかった、のかも知れない。
　そういうのをなくしてしまったのがちょっと、いやかなりがっかりして淋しかったのかも知れない。
「うーん…そうか…」
　ここは一つじっくり考えてみるか。
「けど…その方があいつによっては楽、なのか」
「……」
「俺だって、いつあいつから離れなくちゃならなくなるか、わかんないもんな。考えてみりゃ、俺以外にもいろいろ話せたり愚痴言えたり昼寝できたりした方がいいよな」
　お由宇がこっくん、と妙にゆっくりコーヒーを呑み込む。
「…だよなあ」
　俺は頷いた。
　そうだ。独りで傷ついて全てに心を閉ざしていくよりずっといい。
　そもそも俺があいつの側に居ようとしたのは、優しいくせに強がって、緊張し続けて暗いところばかり見ているのが辛そうで痛そうで、誰かが居ることで少しでも気が緩むならと、それだけのことだったのだ。

「……ちょっと考え違いしてるけど」
　お由宇が微妙な笑みを浮かべた。
「相変わらずとことん前向きね」
「考え違い？」
「そう。英さん？の部屋が二階になぜあるのか」
「え？」
「なぜ周一郎が目を覚まさなかったのか」
「？　周一郎が英も信用してるからだろ？」
「あのね、」
「な～～あ～～～う～～」
「うぉっ」
　溜め息まじりにいつものように解説してくれようとしたお由宇が、オカルト映画も真っ青のおどろおどろしい鳴き声に口を噤む。真隣に居た俺は全身にたった鳥肌に思わず身構えてしまったぐらいだ。
「な、なんだよ、ルト、お前一体」
「……ああ、そういうわけなの」
　くすり、とふいにお由宇が笑った。
「だから付いてきたのね」
　全くほんと過保護よ、あなた、ねーえ？
　きらりと光ったお由宇の瞳を、ルトは平然と無視したばかりか、今何か聞こえましたっけ、的な顔でぺろぺろと前足を舐めて身繕いを始める。
「え？　何？　何だよ、おい」
　俺はルトとお由宇を交互に見た。
「二人だけで何かやりとりしてるだろ、今」
「私は猫語しゃべれないけど？」「にゃあぅぐるぅ」
「いや、ほら絶対何かやりとりしてるぞ、お前ら！」
　同じようなタイミングで振り向いて返事した相手に唸った。
「何だよ、英が二階に居たり、周一郎が起きないってことに、他に何があるんだよ」
「志郎はわからなくっていいってこと」「にゃぐ」
「声合わせるな！」
「それより、英京悟のことだけど」
　とっておきの情報欲しくない？
「う」
　お由宇は今の話をなしにする気だ。それはさすがに俺でもわかったが、かと言って『とっておきの情報』をお由宇から話してくれるのを聞き逃すわけには行かない。何せ、俺には『ルト』はいないのだ。
「タジック社と言ったわね？」
「ああ」
「一ヶ月ほど前、タジック社の産業ロボットが工場で作業中に暴走、結果的に人間二人を殺してる」
「ロボットが人間を？」
「悪意がないだけましなものね。プログラム・ミスかとも言われているけど、ある特殊な状況下で作業回避が適切に行われなかったの。人がイレギュラーなことをしちゃったから、作業を止めずにそのまま動き続けたってことね」
「？？？」
「…つまりね、ベルトコンベアの上にふざけた阿呆が寝そべって一か八かのスリルを味わおうとしたの」
「……ロボットの作業って」
「簡単に言えば、ベルトコンベア上の物体のプレス、ね」
「……」
「仲間を助けようとしたもう一人も巻き込まれた。二人が詰まって、機械が止まった」
「…そんなことってよくあることなのか？」
「ないわよ」
　お由宇はあっさりと言い放った。
「指示以外の物体が流れてきたら、感知してストップするようにプログラミングされているし、もしそれが駄目でも次の手、って感じで何重にもストッパーが設けられているはずだから」
「……だから、プログラミング・ミス…」
「タジックは認めていないわ。『通常では起こりえない何かの干渉があったと考える』なんてことを言ってるけど、過失致死は免れないから、損害賠償もろもろでかなりの痛手を負ったし、今はトップから転がり落ちるのも時間の問題とまで言われてる」
「……なる、ほど」
　そこまで言われてようやく見えてきた。
「だから、今度は何とか海外市場でも確保できないかってことで、海部運輸を狙ったのか」
「かしら？」
「かしら？」
　お由宇が小首を傾げるのに吊られて、俺も一緒に首を傾げてしまった。
「新しい市場を獲得したところで、この事件の影響力は大きいわ。日本はまだまだ温いけど、諸外国では安全性を確約出来ない企業は生き延びられない。この安全性は顧客に対してもそうだし、株主に対しても安全であることが必須、という意味ね」
　お由宇はわかるでしょ、とウィンクしてくれたが、もちろん俺にはわからない。
「えーと、つまり？」
「つまり、今のタジックが数本海外ルートを確保したところで、トップ争いから零れ落ちるのは食い止められない、ということ」
「え？」
　じゃあ、英は何のために周一郎と手を組もうとしているんだ？
「英京悟について、何を知ってるの？」

「知る訳ないだろ」
「ケンブリッジ首席卒業に始まって、まあ大層な履歴よ。もっとも、あんな顔をしてて意外に遣り口はダーティだけどね。手がけたものでウィンウィンで気持ちよく合併したケースは少ないんじゃないかしら。ほとんどが吸収、それも小が大を呑む、あり得ない魔術的な吸収」
「……もうちょっとわかりやすく言ってくれると非常に有難い」
「表より裏で知られた顔なのよ」
「はあ」
　全然わかりやすくなかった。
「その英が周一郎と手を組んだ」
「……あー、その、つまり『ダーティな展開』ということか？」
「海部運輸乗っ取りで済めば『きれいなもの』ね」
　生かさず殺さず、報酬は無限に絞れるように動くのがプロ。
　さらりと付け加えてコーヒーを呑むお由宇こそが、プロ中のプロに見えて落ち着かなくなった。

3.猫

　周一郎は見る見る英と一緒にいることが多くなった。一日中部屋にこもり机に座り、英相手に仕事を進める。時には英とともに外出した。どこへ行くとも告げていかない、それを高野も岩渕も容認している、それが俺とは絶対違うところだ。
「…どうせ俺にはこういうところが関の山だよ」
　微妙にいじけながらハンバーガーを包み続ける。
「コーク、ワン！」「ありがとうございます！」
　間髪入れずに怒鳴り返すのはようやく覚えた。飲み物を紙コップに注ぎ入れ、カウンターに手渡そうとして気づき、慌ててトレーに戻し損ねて近くの女の子にぶっちゃける。
「きゃあっ」「滝っ！」「はいっ、引いといて下さいっ！」
　同じやりとりを何度してんだよ、てめえは。客に聞こえないようにぼそりと主任が唸った。既にがっちり名前を覚えられているあたりが情けない。まだ三日目だがぶっちゃけたコップの中身が十五、放り投げたり落としてしまったりしたハンバーガー七、いつこいつを放り出してやろうかという気配が日ごとに強くなる。俺だって大学を出てからの就職先には、決してこういう場所は選ぶまいと決心してる。
「くそドジの癖になんだよ、あれは」
　主任の唸り声はまだ続く。
　無理もない。
　毎日夕方六時には百合香が軽いものを作って持ってきてくれていた。可愛らしく笑顔を振りまきながらやってくる彼女、事情を知らない奴らが滝なんかいいじゃん、俺とどう、と声をかけると、百合香はにっこり笑ってこう応える。
「滝くんがいいの」
　きっぱりはっきり、あんたは無用だと言い放たれて凹まない男はまずいない。その度ごとに俺は冷ややかな視線の槍を受け、注文を繋いでもそれとなく無視されるという有難くない事態に陥りつつあったが、もちろん、百合香は気づかない。
　そして今日もそろそろ六時がやってくる。
「滝」「はい」「浮かれるなよ〜〜」「浮かれてません」
　気のせいかこの数日でやつれが目立つ主任は、なおもことばを重ねる。
「いや、絶対お前は浮かれてる、ただでさえくそドジが浮かれてると最悪ドジになるんだ、そこんところ自覚しろいいな、おい」
　くそドジもかなりな日本語だが、最悪ドジとなるとますますわけがわからなくなる、そう思いながら道路の向こう側からやってくる、百合香の淡いピンクのワンピースを見やった。片手に小さなバスケット風のかごを下げている。また何か美味しいものを作ってきてくれたに違いない。この間の抹茶シフォンと人参シフォンは意外にさっぱり旨かった。今日は一体何だろう。
「あ、来やがったむかつくなほんと…」
「うへへ……へ…へ…？」
　無意識に勝利者の嗤いを零していた俺は、ふと笑うのを止めた。
　百合香の背後から黒っぽいスーツの男が近づいて来る。どこかで見覚えがある気がする。横断歩道を渡って来ようとした百合香、その腕をふいに掴み二言三言話しかける。百合香が不愉快そうに手を振り払う。男が再び掴み直す。
「あ」
　きらっと一瞬胸に光ったバッジのようなもの、急ぎ足になった百合香はほとんどこちらに渡り切りつつあったから、そのバッジが同心円に横一本の直線を組み合わせているのが見えた。
　思い出した、あれはタジック社の社章だ。今度はあっさりと百合香に振りほどかれない。不安が募ったのだろう、百合香は激しく身を揉み、あげくに手にしていたバスケットを男に叩きつける。かっとしたように男が百合香の頬を張る。
「城本！」
　カウンターを跳ね上げて飛び出す。がっしゃん、ぐわらっ、どしんっという派手な音がして、後ろで誰かひっくり返ったようだが、俺は気にしていなかった。百合香が高い悲鳴を上げるのに、男はさすがにまずいと思ったのだろう、身を翻して一気に駆け去っていく。
「滝くん！」
「大丈夫かっ？」
　飛びついてきた百合香は涙で頬を濡らしている。放り出したバスケットも振り返ることができず、小刻みに体を震わせしがみついてくる。
「滝…くん…っ」
「城本…」
　か弱くて儚げで慌ててその体に腕を回し抱き締めようとした矢先、
「た〜〜き〜〜」
「へ？」
　振り返ると、シェイクとコークとばらばらになったハンバーガーに塗れた主任が、殺気立った笑みを向けておいでおいでをしていた。

「…ごめんね、滝くん」
　ハンバーガーショップから離れていく俺の隣をとぼとぼと歩きながら、百合香が項垂れた。
「いいよ、仕方がない。いつか馘になる運命だったんだ」
　アルバイトは終った。二度と来なくてイイから、て言うか、二度と顔を見せてくれるな金輪際できたら客としても。主任はほとんど俺を見ないままに言い放ち、さすがにちょっと傷ついた。
　それとなく察しているのだろう、百合香はしょんぼりと沈んでしまっているばかりか、俺を独りにしておけないとか、私のせいだものとか、つまりは帰りたくないと言い続けていて、ちょっと持て余す。

「さて、どうするかな」
「どうしても……いい」
「ひ」
　ぽつりと百合香が応じて、たぶん内蔵の幾つかが外宇宙にテレポートした。
（こ、怖えええ）
　泣きたくなる。女の怖いところはこういうところだ。いきなり過激なことを口走るくせに、きっと自分が何を約束しようとしているのか全然考えてないんだ。もし、こっちが真に受けて本気で狸になったらどうする気だ。月夜でもないのにぽんぽこぽんぽこと踊り狂ってだなあ……あれ？違うな？月夜に踊るのは狼だっけか？
「……とにかく、家まで送るよ」
「家は嫌。独りになりたくない」
　いやいやと百合香は小さく頭を振った。可愛らしくて頼りない仕草、絶対独りで置いとけない、けれど、俺だって絶対二人っきりで居たくない、第一自制が保たないに決まってる。ぽんぽこ月夜に踊ってるぐらいならまだしも、指先に触れて、柔らかい腕に抱えられて、潤んだ瞳に見上げられて、熱っぽく吐息をつかれたら、俺の自制は蜘蛛の糸だガラスの花だ割れる寸前のゴム風船だ、彼女いない歴二十数年を甘く見るなよ。
「…滝くん」
　ふいに百合香が立ち止まった。
「え」
「私」
　隣でじっと俺を見上げて、ゆっくりと睫毛を伏せていく。
（ひえええええ）
　慌てるうろたえる息を呑む。こういう時には応じた方が傷つかないんだろうか、応じない方が傷つかないんだろうか。誰か恋愛手引書を完成させてくれ、俺は絶対買う。
「滝くん……私が嫌い？」
　切なく囁く。絶句している俺を、薄く開いた目で射抜く。捕まる、ような、気が、する。
「あの…その、子の、お父さん…」
　思わず口走った。びくりと百合香は震え，見る見る瞳に涙を溢れさせた。
「……酷い…」「ご、ごめんっ！」
　はっとして必死に謝る。
「ごめん、ほんとっごめんっ」
「私…私……っ」
　涙を零れさせながら、今にも崩れそうに百合香は俺の腕の中へ身を投げてくる。
「わたし…っ」「ごめんっ」
　悪気はないんだ、そう言いかけて口を噤んだ。
（違う）
　本当は引っ掛かった。悪気じゃないにせよ、百合香に罪はないにせよ、引っ掛かった。今俺の腕の中に何のためらいもなく身を任せてくる百合香に、浮かれている想いが一瞬ぎゅっと縮こまった。
（きっと前にも）
　君はこうやって誰かの腕に身を任せていたんだろう？
（じゃあ、今のこの俺は）
　一体百合香にとって『何』なんだろう。
　脳裏を掠めたのは周一郎の側に寄り添う英の姿。
（俺じゃなくてもいいんだよな？　周一郎も、きっと百合香も）
　突き放せばいいんだろう、俺のことはどう考えてるのか、と。はっきり尋ねればいいんだろう、今こうやって甘えてくるのは、この先も許してくれるってことなのかと。
　百合香は俯いたまま俺の顔を見ない。それが全ての答えのような気がした。ゆっくり唾を呑み込み、そっと百合香の肩を抱き直す。軽く震えた百合香がどこか観念したような表情で顔を上げる。こんな顔を見たいわけじゃないって、百合香はいつかわかるんだろうか。
（大事な奴には笑ってて欲しいよな）
　周一郎の冷めた表情がまた脳裏を過って苦笑した。
「…そういうことだ」
「…え……っ」
　百合香が眉を寄せて次の瞬間固まる。俺はそっと静かに、百合香の滑らかな頬に唇を当てた。小さな赤ん坊にするように。
「…ごめんな」
　もう一度謝る。
「俺にできるのは、こんな程度だ」
「…」
　震えた百合香が静かに目を開ける。潤んでいても明らかにそれとわかる微笑を浮かべ、百合香はそっと指先で頬を押えた。
「城本？」
「……捨て猫ね、私」
　低く呟かれてどきりとする。
「それも『優しさ』でしょ、滝くん」
　くすり、と笑った声が妙に細く響いた。
「女に示すには残酷」「え」「いいの、もう」
　百合香は指先で目元を拭った。俯き、ぎゅ、と俺の手を抱え、大きく一歩足を踏み出す。
「散歩、しましょ」
「…うん」
　保護を求めるように腕を抱く力の強さ、それと裏腹にことばは軽く。
　散歩なんてしていない。百合香はどこへも帰れない。どこへも帰れない者は散歩なんてできない。当てもなく、倒れるまで彷徨うだけだ。
　その心細さを、俺は知っている。

（どうする…？）
　一晩中歩いていることは、妊娠中の百合香にいいわけがない。かといって、俺が戻る場所は人の家だ。
（けど）
　周一郎もまた、わかってくれるんじゃないだろうか、どこにも行き場がない辛さを。一部屋一晩ぐらいなら、貸してくれる気になるかもしれない。
「…城本」
「…何？」
「俺の下宿先に来るか？」
「……うん」
　ためらった声は甘く濡れた。

　朝倉家のレンガ塀まで戻って来た時、百合香はかなり疲れた顔になっていた。夜気はやっぱり堪えるんだろう、一刻も早く休ませてやらなくちゃいけないなと考えていた俺を、ふいに背後から眩しい光が照らす。
「ん？」
「……滝さん」
　後ろから追いついてきた車の窓がするすると降りた。
「こんなところで何をしてるんですか？　…その方は？」
「周一郎」
　顔を見せた周一郎が訝しそうに首を傾げる。隣には英も居るようだ。
「ああ、彼女は城本百合香さん。俺の中学時代のクラスメイトで…」
　は、と背後で奇妙な音が響いた。振り向くと百合香は息を呑んだ顔で、車中を凝視している。いや、ひょっとすると、周一郎を？
「城本？」
　いつもみたいに周一郎の方が美形だから、そういう楽しげなものじゃないのは青ざめた顔が語っていた。
「…私、帰るね」
　唐突に口走って身を翻す。
「え、おい」「またね滝くん！」
　引き止めるどころか、次のことばも聞かないままに、遠い闇から声が返った。街の喧噪に紛れてうねる、か細く怯えた微かな声。呆気にとられて立ちすくんだ俺の足元を、慣れた感触でさっと掠めて走り去っていくのはルト、どうやら百合香を追うらしい……けれど、なぜ？
「…滝さん。乗っていきませんか？」
「あ…うん」
　助手席に滑り込んでもう一度、背後の闇を周一郎と英の肩越しに見やった。走り出したのがわからないほどの滑らかさで、車は百合香から遠ざかっていく。
（一体どうしたんだ？）
　百合香は何を見つけたんだ？　なぜルトが追いかけるんだ？
（第一、どこへ帰る気なんだよ？）
　居場所がなかったから俺の所へ来るつもりじゃなかったのか、そう考えて微妙に落ち込んだ。
（そうか）
　居場所を思いついたら、俺の所に来なくていいよな。
（また余計なお節介、か）
　ただ今回はお節介だけじゃなくて、俺も百合香に来て欲しかった、と思ってる、たぶん。
　溜め息をついて、ぷる、と首を振ってルームミラー越しにこちらを見つめる目に気づいた。気持ちを切り替えて尋ねる。
「仕事はどうだ？」
「予定通りです」
　周一郎はさくっと応えた。
「今のところ不手際はないと思います」
　控えめな言い方だが、自信があるのだろう、表情は落ち着いていた。
「疲れてないか？」「ええ大丈夫です」
　ちょっと早すぎるほどの反応で相手は頷いた。本当かよ、そう突っ込みかけたのを、
「少し休まれてはいかがです？」
　如才なく英が声をかけたのに遮られる。珍しく周一郎が微かに笑った。
「もう着く。眠っている暇はなかったようだ」
　優秀で配慮のきく部下への口調。確実に十歳は跳ね上がった年齢の男の台詞。
「お休みになれる時間を調整します」
「頼む」
（おいおい）
　「頼む」とか。
　企業トップとその秘書的なやりとりにぽかんとしつつ、周一郎が絶対口にしないだろうことばにも驚く。
（つまりはいいコンビだってことなんだろうな）
　百合香に置き去られたのと似た溜め息を漏らしてしまった。
　車はいつの間にか朝倉家の門扉を通ったらしい。いつも通りに高野に迎えられ、周一郎と英が話しつつ奥へ向かうのをよそに、階段をのろのろ上がって自室に戻る。
「…」
　何だか一気に老け込んだ気がした。こういう時はこうだよな、と思いっきりベッドに飛び乗り、大の字になってごろりと転がる。ふかふかと沈むマットレス、気持ちのいい温かな薫り、疲れをやんわり受け止めてくれる安定感。
　気持ちが緩むと同時に、再び百合香の顔を思い出した。
　あの横断歩道で彼女を引き止め殴ったのは、タジック社の男だった。百合香は車中の誰かを見て，急に態度を変えた。となると、百合香は車の中に居た英に気づいたと考える方が自然だ。
　英は裏の世界のプロだと言う。周一郎もそんなことはとっくに知っているだろう。いやむしろ、それだからこ

そ手を組んだ可能性が高い。この先やろうとしていることが『汚い』ことなのか、それとも海部運輸だけではない何かの狙いがあるのか。
「……」
　英と百合香は知り合いだろうか。百合香は単に懐かしい昔なじみとしてではなく、周一郎の家に居る俺に、何かの意図を持って近づいてきたんだろうか。
「……」
　もし、そうならば、なぜ逃げたんだろう。俺はのこのこ彼女を朝倉家に連れ込もうとしたわけだし、何かを英が企んでいて、百合香がそれに噛んでいるなら、絶好のチャンスだったはずだ。
「……うーん……」
　コンコン。
「どうぞ」
「滝さん？」
　入ってきた人間に目をぱちくりさせた。
「周一郎…」
　相手はためらうように、部屋に一歩入った所で立ち止まっている。
「何か用か？」
「少しここに居ても構いませんか」
　ことばは疑問形だが、口調は周一郎にしては珍しくぶっきらぼうで、嫌と言わせない気配がある。
「そりゃ構わんが……と待てよ」
　部屋の中を振り返る。単位取得のレポートのための資料や本やノート、コピーにルーズリーフにメモが所狭しと散らばっていて、空いている所と言えば俺が腰掛けているベッドぐらいだった。
「じゃ、ここへ来い。俺はレポート書くから」
　手元のものを集めてベッドから立ち上がる。
　ぱたり、と妙に静かに戸を閉めた周一郎は、部屋の中に散らばったルーズリーフを海に浮かんだ島を避ける小舟のように優雅に避けて近寄ってきた。サングラスをかけた横顔は表情が消えていて、淡々としている。俺と入れ代わりにベッドに腰を降ろし、同時にほ、と小さく溜め息をついた。
　ざらざらと資料を落としたのを拾いながら、気になって声をかける。
「周一郎？」
「はい」
「やっぱり疲れてるんじゃないか？　あんまり顔色良くないぞ」
「そうですか」
　ぱちりとスイッチが入った人形のように周一郎は姿勢を起こして返答した。そのまま、じっと中空を見つめている。その焦点が、どうやら部屋のどこにも止まっていないらしいのに気づいて、俺は無言でレポートに取りかかった。
　どうしてかは知らないが、今周一郎はルトに追わせた百合香の後を、ルトとともに追いかけているのだろう。
　けれど、どうしてわざわざ俺の部屋に来るんだ？　まさか部屋を英に占領されたわけでもないだろうに？
　資料から目を上げ、ちらりと周一郎を見る。いつの間にか両脚ともベッドに引き上げ、壁に身をもたせかけている。まるで体から受け取る刺激を全て封じて、覗き込む視界の中にだけ居ようとしているようだ。
　それは世界に関わることを拒んでいるようで。
　俺とも関わりたくないようで。
「…」
　溜め息をついて、再びレポートに取りかかった。
　とにかく、どこがどう納屋教授に気に入らないのかよくわからない。やり直しの三回目、論旨とか構成じゃなくて、何が気に入らないのかと考えている時点で、本質を見失っているような気もする。
　あれやこれやと考えを広げていると、否応なく疲れて集中力が落ちてくる。ぼんやりしてくる頭の中に浮かんでくるのは、やっぱり百合香とタジック社と英と周一郎という、繋がっているようで繋がっていない、結びついていそうで結びついていない組み合わせだ。
（百合香はタジック社から逃げてる。英はタジック社からやってきている。周一郎はタジック社と組むつもりだ。だから、共通項はタジック社、これは間違いないはずだ）
　じゃあタジック社は何をやろうとしている？　周一郎は英と組んで何をしようとしている？　周一郎はなぜ百合香を追おうとしている？　百合香は……百合香は…。
「！」
　違う違う違う！　そういうことじゃなくて今はレポートをだなあ！
　頭の中で大きく首を振って始めからやり直し、いつの間にかまた同じように百合香のことや英のことや周一郎のことを考えてしまい……そういう無駄な努力を半時間ほど続けた後、ついにレポートを書くのを諦めた。
　こうなったら、先に周一郎になぞなぞの答を聞いた方が賢そうだ。
「…なあ、周一ろ…」
　振り向きながら声をかけて途中で呑み込む。
「……何なんだ、本当に」
　壁にもたれたまま寝入ってしまったのだろう、周一郎はそのまま壁をずり落ちて、ベッドの上ですやすやと安らかな寝息を立てている。
「あーあ、サングラスしたままで…」
　ぼやきながら手を伸ばし、そっとサングラスを引っ張ると、周一郎は小さく呻いて顔を背けた…が、目覚める気配もない。
（疲れてるみたいだな、やっぱり）
　緊張が解けたせいか、幼い顔になっている周一郎を覗き込んでいると、ことことと小さな音がした。振り向くと、ルトがガラスに爪をたてている。
「よーし、ほら」
　窓を開けると、ルトは軽い足音をたてて走り込んで来て、その勢いのままベッドに飛び乗った。そのまま、ご主人の側にいるのは当然とばかりに体を丸め、気持ち良さそうに寝息をたてている周一郎の腕の中に潜り込む。
「…おい？　じゃ何か、俺は別の所で寝ろってか」
「なん」

　やっぱりこれも当然のようにルトが鳴いた。
「主人に似ていい根性してるよな、ほんと」
　呆れ返りながら窓を閉め、溜め息まじりの部屋の中を見回す。なるほど、ソファの側近くが比較的片付けやすそうだ。
「はいはいそうすりゃいいんだろ、そうすりゃ」
　ベッドの上に残っているルーズリーフを片付け、周一郎の体に上掛けを引っ張り上げる。
　明日になったらどうして起こさなかったと怒るだろうが、一度自分の寝顔を見るといい。普段の周一郎を知る誰が見ても、この眠りを妨げたくないと思うはずだ、ほっとしたような、悲しみに疲れ果てて気を失ったような、そんな妙に頼りない表情だから。
　明かりを消し、俺は床にごろりと横になった。目を閉じようとすると、ふ、と吐息がかかってびっくりする。
「な…んだ、お前か」
　周一郎の側に居たはずのルトが、いつの間にか間近に降りてきている。
「なう」
「ご主人は放っといていいのか？」
「な」
　すり寄ってくるルトは喉をごろごろと鳴らしている。顔に頭を擦りつけ、そのまますると右懐に潜り込んできた。
「勝手な奴」
　苦笑した。
「お前も周一郎もな。気に入った時しか、こっちには来ないしな」
「にゃ…」
　珍しくしゅんとしたような声でルトが応じる。
「…まあ、それでもいいけど」
　呟きながら、自分の甘さに呆れる。なのに、そのすぐ内側で考えていた。
　追い詰められた時ぐらいは俺のことを思い出してくれよ。いつだって、お前に対する友情？　みたいなものには変わりがないんだ。お前は十分しんどい思いをしてきた、きっと俺が想像もつかない深さと冷たさの中で。もういい加減、楽になって報われて、ちょっとはこの世界も捨てたもんじゃないと思っていい頃だろ？　自分はここで生きていて良かったと、これからもっと楽しいことがあるかもしれないと、そんな風に感じていいはずだよな？
　ちらりとベッドの上を盗み見た、つもりだった。
　けれど何が見えたかを意識する前に、俺はルトがくれた柔らかくて温かい眠りに落ちていった。

「ん……」
　眩い。
　無意識に手を上げ、光を遮りながら、俺は瞬きした。薄ぼんやりとした視界に入る時計を確認する。六時過ぎ。朝だよなきっと。けど、どうしてこんな時間に、顔に光が当たるんだっけ？
「えーと…ああ……そうか…」
　ことばにならない自問自答を繋いで独り頷く。
　そうだ俺はレポートやってて、そこへ周一郎がやってきて、ベッドに座ってるうちに眠り込んでしまったから俺もまあ寝るかって考えて。
　思い出しながら体を起こし、ベッドから見つめる相手に気づく。
「あ……」
「…」
「あーははは…」
　沈黙に中途半端な笑いを返して、既にしっかり起きていたらしい周一郎を見返した。
「滝さん」「はい」
　凛と響いた声に思わず身を竦めて正座した。
　周一郎はベッドで膝を抱えるようにして座っていた、こじんまりと、まるで小さな子どものように。
　凝視する俺にふいに自分の格好の幼さに気づいたように腕を解き膝を伸ばし、するりとベッドの端に腰掛け何か言いかけたが、きゅ、と口を結んでそのまま立ち上がる。
「周一郎？」
「ぼく…」
「ん？」
「…昨夜ここで寝てたんですか」
　まるで自分が何をしていたのか覚えていなかったような口調に、思わずぎょっとした。
「おい？」
「…ここ二、三日よく眠れなくて…」
　尋ねられて、別のことを考えていたからつい答えてしまった、そんな口調で呟く。それもまた意識しての動作じゃないような気配で、周一郎は背中を向けてごそごそとベッドの乱れを直しながら、
「大抵は目が覚めたら起きていたのに、昨夜はぐっすり眠った気がしたから…」
「…おい」
　周一郎に近寄った。
「起きてたって…まさか徹夜じゃないだろうな」
「まさか」
　周一郎は苦笑した。
「三十分ぐらいは寝て……わっ」「っしょっと」
　数字を聞くと同時に、俺は周一郎をベッドに突き倒した。思いもしていなかったのだろう、抵抗する暇もなく周一郎がぼすりと頭から突っ込み、慌てて起き上がりながら振り向く。
「滝さん！一体何を」
「何をじゃねえ！」
　一日三十分？　いや、こいつのことだから、二、三日で三十分とか恐ろしいことを言うに違いない。自分があれほどはっきり部屋にやってきたことも、ベッドに這い上がったことも、ついでに眠るつもりさえないのに眠っ

てしまうなんていう、朝倉周一郎にあるまじき無防備な振舞いさえも覚えていないぐらいに疲れ切っているのに、まだ自覚していない。
「体壊したらどうにもならんだろうが！」
「でも」
「でもじゃねえ、ここでは眠れるならここで寝てろっ」
「仕事が」
「英がいるだろが」
「…」
　周一郎がぐ、と詰まった顔になる。
「八時間眠ったら部屋に帰してやる」
　じろりとねめつける。
　確かに脳みその出来は圧倒的に足りないが、体格差だけの力はある。正面切ってもみ合えば、絶対俺の方が強い、周一郎が悪辣な手を使って俺をだまくらかさなければ。
「…ふ」
　仁王立ちで腕組みをした俺を、周一郎はしばらくとんでもないところに立っている珍妙な看板みたいに眺めていたが、小さく溜め息をついてネクタイを緩めた。カッターシャツのボタンを一つ外し、気障な仕草で肩を竦める。整えたベッドカバーを剥がし、大人しく横になって俺を見上げた。射してくる朝日に目を細める、気づいて窓のカーテンをしっかりと閉じてやる。
　薄く翳った部屋の中で、猫が瞳孔を開くように、周一郎が目を開く。そのまま、なおも俺を見つめ続ける。
「？　どうした？」
「……あなたは医者に向いてるかも知れませんね」
　物憂げで皮肉な声が零れた。
「よせよ、頭がついてくわけがないだろ」
「だって、きっと誰だって、あなたがそんなふうに言い切ったら…」
　睫毛を伏せていくのと声がふわふわと蕩けていくのが同じ速さだ。
「…そんなふうに……心配…して…くれてる……のを感じ…た……ら……」
　ふっつりと途切れた後はすうすうと軽くて気持ち良さげな寝息に変わる。
「そらみろ、結局疲れてたんじゃないか」
　ったく、どうしてこいつは、いつもこう素直じゃないんだろうな。今更俺の前で気を張ってても仕方がないだろうに、
　くたりとベッドに転がっている周一郎は覗き込んでも指先一つ動かさない。だが、朝倉周一郎はそんなにヤワじゃないはずだ。なのに、これほどくたくたになるってことは。
（あの野郎）
　二人分の朝食を取りに行くついでに、一言言ってやろうと部屋を出ると、ちょうど廊下の向こうから急ぎ足にやってくる英を見つけた。
「滝君！」
　俺を見つけてほっとしたように声をかけてくる。
「朝倉さんを知らないか？　もう部屋にいなくて」
「寝てる」
「は？」
「俺の部屋で寝てる」
「…」
「お前に言ってやろうと思ってんだがな」
　何とも複雑な顔で黙り込んだ相手に唸った。
「仮にもコンビを組んだんなら、あいつの体調ぐらいは把握しろ。人一倍精神的にはタフな奴だし、仕事が詰まっても根を上げる奴じゃないが、ガキの体力には限界ってもんがあるだろ」
「……すまない」
　非常に苦い何かを噛み砕くように英は謝った。
「気をつけてはいたんだが…」
「……そうだろうな。あいつの方が役者が上なんだろ、きっと」
「…」
　昨夜のルトと同じく、しょんぼりしてしまった英に逆に苛立った。
　何だ結構いい奴じゃないか。周一郎への取り入り方はむかつくが、仕事は出来る奴みたいだし、周一郎のことも心配してるし、もうしばらく一緒に居てコツさえ呑み込めば、それほどあいつがへたり切ることもないだろう。
（俺よりも）
「……あいつが起きるまで放っとけよ」
　掠めかけたことばをさっさとぶった切った。
「仕事の方はお前ができるところをやっておいてやれよ。とにかく起こすな。今日はあいつは戦線離脱、休養日だ。何か文句があったら俺に言えって言っとけ。最低でも八時間は寝かせろ、部屋から出すな」
「わかった。食事もその後でいいかな」
「ああ、いつもより少なめにしてやれ。少なくしたから全部食べろって言ってやれ」
　どうせすぐ仕事に戻るとだだをこねるだろう。いつもの量を準備すると、焦って半分も食べずに動き出すに違いない。
「わかった。しっかり休んでもらって、しっかり栄養を摂ってもらって……後は？」
　忠実な番犬のように尻尾を振りそうな顔で俺を見つめる英に溜め息をつく。
　ほんと、何やってんだろうな、俺は。
「任せる」
「君は？」
「俺は…」
　一瞬息を詰め、で、凄く長くて重い溜め息を吐き出した。
　そうだよな、こっちばかりに構ってられなかったんだよな。バイトを探して、百合香のことも何とかしなくち

ゃならない。
「今日はと一っても忙しい」
　だからあいつを頼んだぞ、と続けると、英は妙な顔になった。
「それでいいのか？」
「何が」
「君はいいのか？」
「だから何が」
「朝倉さんは君に」
「周一郎は俺に？」
「……何でもない」
　ふいに英は口を噤んだ。それからぼそぼそと聞こえるか聞こえないかの独り言を続ける。
「君みたいな人が、よく朝倉さんの側に居たものだ」
「…どういう意味だ」
「別に」
　聞き返すとしゃらっと明るい口調で流された。
「じゃあ行ってきてくれ、幸運を祈る」
　お人好しな笑みにちくりとする棘を含ませて、英は俺の部屋へ入っていった。

　人生は出会いと別れの繰り返しだ。
　そう言ったのは誰だったっけか。
　翌日、俺は極めて哲学的なことを考えていた。
　別れというものが確実に存在している以上、俺と周一郎もいつかは別の道を歩き出すことになるのだろう。たとえば結婚して、たとえば子どもと平凡な家庭を持って。
　周一郎の相手ならどんな娘がふさわしいだろう。俺には高嶺の花なのは間違いないが、そこからが想像つかない。結婚はするかもしれない。朝倉家を存続させるために。けれども、家庭を持つことはない気がする。
　いつまでも、レンガ塀に囲まれた広大な屋敷の一角を訪ねれば、サングラスの奥から涼やかな深く澄んだ瞳で、歳を重ねた気配もなく笑いかけてくるような気がする、滝さん、また何か厄介事に引っ掛かったんですか、と。少し照れくさそうな笑みで。どうでもいいような口調で。そのくせ、答えるまでもなく、俺が落ち込んだ苦境のあれやこれやの意味を一つ一つ解説してくれたり。
「…ふう」
　溜め息をついて、陽射しを一杯に受けた芝生に寝転がる。
「…何を、今更」
　朝倉家の広々とした庭でごろごろしている。バイト探しに行かなきゃならないのはわかっていたが、何だかぐったり疲れてしまった。
「……ちぇ」
　何やかやとぼやきながら、わかっていた。
　結構ショックだったのだ、周一郎が俺以外に相棒を選んだ、ということが。
　あいつが抱え込んだ傷の深さをわかってやれるのは俺だけらしいと思い始めた矢先、俺以上にあいつの傷を知り、それを埋めてやれそうな奴が出て来た。加えて、そいつに周一郎が応えようとしている、そこが堪えている。
　俺にはずっと意地を張ったままなのに。
　たったそんな程度で良かったのかよ。
「…潮時、か」
　ぼんやり呟いた。
　良い頃合いなのかもしれない。
　俺はこれをきっかけに周一郎から離れていく。
　そもそもが、俺の役割というのは、周一郎の側に居て傷みを庇ってやることじゃなくて、その役割をする奴との橋渡し、そういうことだったのかも知れない。その仕事が終ったから、さっさと消える、そういう時期だと言うだけなのかもしれない。
（そうとも、何も厄介事の巣に居座るこたあないんだよな）
　それでなくとも、こちとら厄介事吸引器なぞという特異体質の持ち主なのだ。いや、それを認めてるわけじゃなくて、あくまで噂にすぎないと思っている、思いたいところだ。だから、それを証明しそうな場所に居ない方がいいのは自明の理だ。
　けれど。
（本当に、大丈夫なのか、英で）
　何が大丈夫じゃないのかと言われると困るが。
　けれど、周一郎には奇妙な癖があることを気づいているだろうか。物事がよくない方向に転がり始めた時、常人ならば一歩控えるか後じさりする、あるいは一旦立ち止まる。けれど、周一郎という奴はよほど自分を過信しているのか、とにかく能力を頼みに自分で追い込まれていってしまうようなところがある。京都の清のことだって、ドイツの一件だって、そもそも俺が巻き込まれた一番初めの事件だって、何もあいつが撃たれる必要なんか全くなかったのに、俺を庇って飛び込んできちまっている。
　もちろん相手が俺でも周一郎は飛び込んできてくれたが、何せ俺は単なる平凡な一般人だ、巻き込まれる事件も人並み以下だろう。けれど英は周一郎が属している世界の住人だ。巻き込まれる事件も俺の比じゃないし、俺に巻き込まれるより英に巻き込まれる方が、命がけのものになる可能性が高いはずだ。
「…、くそっ」
　思わず舌打ちして自分を呪った。
　どうして俺はこんなふうに際限なく周一郎のことを心配してやってしまうのか。アルバイト探しもせず、大学にも行かず、頭の中に大量のスライムをのたくらせたような状態で考え続けても、碌な結論には辿りつかないというのに。第一、周一郎は俺の何だ？　血も繋がってないし長年の親友でもない、雇用主と従業員、店長とバイト、ひょっとするとたまたま降りた駅の駅員と旅行者ぐらい、薄くて軽い関係じゃないのか？
「だよな！」
　そうだそうだ、あいつがどうなろうと、それは天空のどこかでサイコロ遊びをしている運命の神様の決めるこ

とで、俺があみだくじを引いてるわけじゃない！
「にゃ」「っっ」
　ふいに、同意するように猫の声が響いて思わず振り向いた。
　いつの間にか真後ろに、青灰色の毛並みに光の粒子を輝かせて、よくできた陶器の細工物のように上品に座っているルトを見つける。
「…お前まで決まってるのかよ」
　俺のことばを理解したように、ルトは口の両端を吊り上げた。にゃーおと鳴く口の形、けれど今の俺には一人怒ったり唸ったりしているこちらを嘲笑っているようにも見える。口の両端に覗く牙、煌めく大きな瞳が細められる。
　まあまあ、そういじけなさんなって。
　そう話しかけられた気がして、口を尖らせた。
「何だよ、何か用か」
「なぅ」
　当たり前だろ、用がなけりゃお前の所なんか来るかよ。
　そんな感じで、ひょいと首を振って腰を上げ、ルトはちらりと何か言いたげな瞳で見遣って走り出す。
「え？　おい、どこ行くんだ？」
　習慣というものは恐ろしい。つい、いつもの通り、ルトを追ってしまった。
　青灰色の小さな姿は、光を跳ね、緑したたる庭の中を軽々と駆けて行く。後を追う俺の速度なんか、もちろん構っちゃいない。
　樹々の間を抜け、木の根と整えられた小道を横断するように走るルトを追う。何度か脚を挫きかけ、まだこれが続くなら、キャタピラーがついた車に乗るか、脚をキャタピラーに改造した方がいい気がすると思い出したあたりで、ようやくルトは速度を落とし、木陰でぴたりと立ち止まった。
「ルト、お前どこへ…」
　喘ぎながら吐き出しかけたことばは消えた。木立の向こう、少し離れた場所に見覚えのあるワンピース姿が見える。
「へ…？」
　百合香だ。
「何でここに…？」
「…というわけよ」
　俺のことばを遮るように冷ややかな声が響いた。
「滝くんと会ったのも……つまりそういうことなの」
「滝さんはあなたのことを知っているんですか？」
「っ」
　息を呑んだ。この声を俺が聞き間違うはずがない。
「…どういうこと？」
　百合香が警戒心を満たして尋ね、続いたことばにぎょっとした。
「妊娠の『事情』を、です」
　百合香がここから見てもわかるほどに動揺し、青ざめた。
「あなたは……知っているの…？」
「ええ、まあ」
　淡々とした声がさらりと応じて二重にぎょっとする。魚塗れだ。
「どうして、あなたが」
「それを僕が話す必要はないでしょう」
　百合香の狼狽に動じた様子もない相手の姿は、木の陰になっていて俺の所からは見えない。
「…言わないで」
　低く唸った百合香が、一瞬唇を噛んだ後、より必死な声で繰り返した。
「滝くんには、言わないで」
「…」
「私とあなたのことは関係ないでしょ！」
（私とあなたのこと？）
　魚が三匹揃ったぞ。ぎょぎょぎょ。いや、もうへたりこみたいぐらいショッキングなんだが。
（まさか、腹の子の父親って）
　あいつがそういうことができたのか？　いや、あいつだって男だし、できないはずはないんだが、あれだけ忙しい仕事の合間にいつどうやってそんなことを？　しかも百合香だと年上だろうが？　それともおばん好みだったのか？
　疑問符のラインダンスにくらくらしている脳裏に、百合香が急いで帰った夜のことが通り過ぎた。彼女はうろたえ慌てて逃げた、たぶん、車の中の『ある人間』の顔を見て。車中に居たのは同じタジック社の英と……周一郎、だ。
「話さないで！」
「…なぜ？」
「なぜ？　なぜってそんなの」
「…嫌われたくない、とでも？」
　必死さを募らせる百合香の声に、応じる声はなおも冷たい、既に冷酷な響きさえ宿している。
「だって……だって、彼」
　百合香の声が滲んだ。
「中学のままだったのよ、優しくて、お人好しで……私…滝くんには嫌われたくない…っ」
　声は消え入るように微かになった。こちらの胸を締め付けるような切ない声音、けれど相手には効果がなかった。
「わかりました」
　ばさりと切り捨てるような返答が響く。
「話さないことにしましょう、僕からはね。ただし、交換条件があります」
「…交換条件…？」

「僕に協力して頂きます。必要とする情報を提供して下さい…それがあなたにとっての機密事項でも。いかがですか？」
「……呑むわ」
　吐き捨てるように百合香が応じた。
「あなたって利用できるものは何でも利用するのね、仕事のためには手段を選ばない人間なのね」
「不思議なことを」
　くすり、と冷えた声が嗤った。
「知っているはずでしょう、タジック社特殊機構の一員なら」
　予期していたことばが続く。
「僕が『氷の貴公子』と呼ばれていることぐらい」
　うわあ、自分で自分のことを貴公子と名乗って、しかも浮ついた感じも違和感もない台詞なんて初めて聞いたぞ、しかも当然みたいな気がしてくるなんて、半端ねえな。
　ふざけた脳内コメントは、突然撃ち降ろされたハンマーに砕かれた衝撃を逃がすためだとわかっている。
（タジック社、特殊機構？　……百合香がタジック社の人間？）
　可愛い百合香のワンピース姿が、床に落としたクリスマスケーキ並みにぐっしゃりとしたわけのわからない塊に変わる。百合香を捕まえた男の胸のバッジ、英の柔らかい得体の知れない笑みがそれに重なる。
（つまり？）
　百合香は何か意図があって、俺に近づいたってことか？
「知ってるわ、あなたがどれほど非人間かってことも、よくわかった！」
　捨て台詞を残して、百合香は身を翻して駆け出した。白いワンピースが、俺でさえ迷う庭の中を、勝手知ったる通り道のように走り抜けて遠ざかるのに、また軽い目眩を味わう。
（ルトに案内されなくても、百合香は朝倉家を自由に動ける…）
　どんだけの情報量やねん！
　思わず自分で突っ込んでしまった。
　度重なる衝撃に心身ぼろぼろで座り込みたくなった俺の前、木陰に居た人物が姿を現す。だが珍しく俺には気づいていない。
　サングラスを外し、妙にぼんやりした表情で百合香の駆け去った方向を見つめながら、これまたひどく珍しい、夢を見ているような声で周一郎が呟いた。
「嫌われたく…ない、か」
　外したサングラスに視線を落とす。小柄な体がなお竦んだように見える。
「…僕だって…」
　沈黙。そして唐突に顔を振り上げながら、サングラスをかける。ことさら伸ばした背筋が無闇に背伸びする子どものように頼りない。
（ど、どうする）
　俺は出るに出られなくなっておたおたした。もし百合香の腹の子どもの父親が周一郎なら責任逃れなぞさせてやらない、そう思いつつも、周一郎がそんなみっともないことをするわけがないとも思う。
（だよな、きっと何か理由があるはずだ）
　経済的な問題じゃなくて、たぶん、朝倉家に関わる何かのせいだ、きっと。あいつが狡いんじゃなくて、何かどうしようもない事情があってそれで。
（うんそうだ、そうに違いない）
　自分に言い聞かせて、そっとその場を離れようとした矢先、
「なおんっ！」「！」「っ」
　いきなりルトがはっきり声を上げて周一郎の方へ駆け寄り、振り返った周一郎の視線に射抜かれた状態で、俺は及び腰のまま立ち止まった。
「滝さん…」
「や…やあ」
　呆然とした周一郎に引きつりながら笑いかける。
「い、いい天気だな、あはは、ははは」
「……今のを」
　ふ、と周一郎は小さく息をついた。
「聞いていたんですか？」
　僅かに相手の頬が紅潮した気がした。ルトを抱き上げる、いつもなら流れるような動作がややぎごちない。
「う、ん」
　ぴくりとルトを撫でる手が止まった。瞳を伏せたまま、
「それで？」
「…それでって」
「……」
「…」
　空気が重い。口が開きにくい。
　どう応えろというのか。おめでとうございましたとか言えばいいのか。俺より早く父親かよとからかうのか。或いは城本は俺の好きだった相手だが知っていたかとでも尋ねるのか。
「…つまり…その……本当…なのか…？」
　所詮，突っ込むしか能がないのだ。
「…何が？」
　周一郎も意地が悪い。
「その、さ」
　ことばが引っ掛かる、生焼けの魚の背骨なみに、しなって動いて傷みばかり強くなってしかも抜けてくれない。
「その、城本、の」
　百合香と言えないあたりがもう駄目なんだろうなあ。
　溜め息まじりに一気に吐き出した。
「子どもの父親って、ほんとにお前なのか？」

　ふいに、ひどく奇妙な表情で周一郎は俺を見た。今にも笑い出しそうな、おかしくてたまらないと言った顔、なのに嘲りではなくて、なんてこと考えるんですかあなたは、みたいな。その表情を薄い笑みに凝縮させて、軽く目を伏せ、ルトを撫で始める。
　ノーコメント。
「いや、その、さ！」
　俺の方がうろたえた。
「別にお前を責めてるんじゃない。そりゃ、そういうことは双方の合意の結果であって、他人がどうこういう問題じゃないよな、だから俺が知りたいのはそういうことじゃなくて、要は父親というものが居るなら母親が居るのは当然なんだが、そのきっかけというか出逢いというか、いや城本の相手がお前じゃまずいってことじゃなくて、」
　くすくすくす…。
　耐え切れなくなったと言いたげに周一郎は上品に笑った。
「…何だよ」
「あなたって人は本当にユニークですよね」
　鼻白む俺にからかい口調で続ける。
「真面目に答えろ」
　むっとした。
「笑い事じゃないだろ？　赤ん坊ができてるんだろ？　なのに、何だよ」
　周一郎と百合香のやりとりが脳裏を過る。
「話を聞いてりゃ、情報だの、協力だのって…一体何の話をしてんだよ」
「僕は彼女の協力が欲しい。彼女は僕に黙っていて欲しい」
　淡々と周一郎はまとめた。
「簡単な交換条件ですよ」
「…交換条件って……俺、もう知ってるんだけど、お前との関係…」
「…そうですね」
　一瞬また妙な表情が周一郎の片頬を掠めてすぐ消えた。
「じゃあ、城本の条件は意味ねえじゃねえか」
　百合香の泣き顔を脳裏に浮かべながら唸る。
「無理に協力なんてさせんなよ。城本の事情はわかんないけど、悪い奴じゃないんだよ」
「そうはいかないんです」
　さっくり切り捨てて、周一郎は皮肉な笑みを押し上げた。
「今回の仕事の鍵を握っているのは彼女ですから」
「…仕事って、海部運輸のか」
「…まあ、ね」
　肩を竦めてみせる仕草が白々しい。瞳の色がひどく冷たい。きっと他にも何か考えてるし、他にも何かを狙っている。突き放すような気配、それに覚えがあってひやりとする。
「また危ないことをやってるんじゃないだろうな」
　俺に危険が及ぶと感じると、こいつはすぐに姿を消そうとする。
「お由宇さんからでも聞いたんですか？」
　仕方ないですね、と小さくぼやいた。
「僕みたいな人間には、そんなに危険な仕事じゃありませんよ。それに」
　一瞬の沈黙の後、低く呟く。
「個人的な恨みも入っていますから、そうあっさりと引くわけにも行かないし」
「個人的な恨み？」
　問い返すと、はっとしたように瞬いた。体を引きながら、不愉快そうに続ける。
「とにかく、あなたが心配するようなことはありません。城本さんのことにしても、僕にできる限りの配慮はしているつもりですから」
　言い捨ててさっさと離れて行こうとする、その腕をとっさに掴んだ。
「ちょっと待てよ」「っ」
　こういう唐突な動きに、周一郎は意外にいつまでたっても慣れない。強張った顔で振り返るのに尋ねる。
「何だよ、個人的な恨みって」
　周一郎が『恨み』なんて持つのが不思議だ。仕事のことでも人間関係でも、どこか醒めてて距離を置き、不利な状況も分析して流すだけの奴なのに。
　一瞬、射るような目で俺を睨んだ、とたんに顔を背けながら、
「……あなたです」
「…は？　…あぎゃ！」
　呆気にとられた俺は、次の瞬間、ルトに嫌というほど爪を立てられて飛び上がった。手放した腕を軽く振り、周一郎は身を翻して離れていく。
「俺…？」
　俺って、つまり、俺、滝志郎、のことだよな？
「え？　俺？　俺が個人的な恨み？　え？」
　何をやった？　百合香と付き合おうとしたから？　周一郎はそれを不愉快とか思ってたとか？　いやでもそれと仕事と何の関係が？
「……おーい…」
　新たな謎を放り出されて、俺はぐるぐる考えたまま立ちすくんだ。

4.狙

　つまりはどういうことなんだ？
　バイト帰りの疲れた体でぐでぐで歩きながら考える。
　頼み込んでもう一度雇ってもらったDr.ドナルド、時給は表向きは八百四十円だが、弁償代とか差し引くと実質三百円ぐらいじゃないだろうか。あの主任にだけは会いたくないと思っていたし、相手だって俺にだけは来て欲しくないと願っていただろうに、再び同じ場所に勤務することになって、主任にしみじみ同情した。もちろん、俺だって悪気があってドジをしているわけじゃない……まあ、あえて言えば天性という奴だ、たぶん。
（で、つまりはどういうことなんだ？）
　自己完結したあたりで、もう一度考え始める。
　一つ。英は周一郎の相棒になっている。
　一つ。周一郎は百合香の腹の赤ん坊の父親らしい。
　一つ。百合香はタジック社と関わりがあるらしい。
「う～～ん」
　どれを取っても唸るしかない、頭が痛くなるような状況だ。しかも、周一郎は、今度の仕事が『個人的な恨み＝俺』を含んでいる、と言う。
　ただ俺に関して言えば、今回は俺は珍しく何の被害も被ってない。バイトの馘とか、百合香と周一郎の一件とかを別にすれば、世の中は平穏無事で、英と周一郎はうまくやってるし、俺と会う時の百合香は相変わらず可愛いしで、何の文句もない。
（…英かあ）
　確かに世の中にはいろんな人間がいて、中にはそっくりな奴も居て当然だろう。ただ、タイプ的に俺と凄く似通っていても、仕事の能力がここまで違うというのは、なかなか複雑なものがある。
　英もよくドアにぶつかっているし、椅子に躓いたり絨毯に引っ掛かったりする。周一郎でさえ苦笑まじりに「滝さんより少しましな程度だな」と呟くぐらいにはドジを頻発する。けれども、いざ仕事となると別人のような切れもの振りで、一分の隙なく周一郎の補佐を務め、朝倉財閥の内部でもじりじりと評価が上がっていると聞く。将来的にも、今後成長するにつれて活躍の場が広がる周一郎のサポート役にぴったりじゃないかというところらしい。
「…」
　落ち込みかけた片足を慌てて気分の泥沼から引っ張り出した。ついでに、頭の上から降ってきた百トンばかりの劣等感と数ミクロンのプライドを払い落とす。
（どうにもならんよな）
　基礎的な能力が違う。重ねて来た経験が違う。俺はしがない大学生だが、英は曲がりなりにも第一線で鍛えられた企業戦士、どちらが頼りになるかと言えば『朝倉周一郎』にとっては、片腕として有能な方に決まっている。
「…くそっ」
　転がっている石を思い切り蹴った。
　カン！　ビシッ！　「てっ！」
　ガキっぽいヒステリーにはお仕置きだと言うわけでもないだろうが、あくまで運命の神様というのは、人を地の底まで引きずり落とすことが生き甲斐らしい。蹴った石は道路工事中の看板に当たって跳ね返り、もろに額を強襲した。
「っ…ってえなああ！」
　ぶち切れた。
　いろいろもう、行き場のないもやもやがどうにもこうにも溜まってしまったところだったし、夜道に吠えたところで誰に迷惑かけるというものでもないだろう、そんな気持ちが拍車をかける。
「ったく！　誰だ、こんなとこに工事中の看板なんか置きやがって！」
　いや全く、ほんと工事中の看板にも作業中の皆さんにも罪はない。むしろ看板がなければ、そのまま突っ込んで大変なことになるはずで、そう思いつつ、きょとんとした。
「…だ、よな？　うん、この看板って、確かあっちにあった奴じゃ…」
　額を摩りつつ涙目を凝らして看板の向こうを覗く。それだけで足らず、看板を越えていって、闇を見透かす。やっぱりそうだ。工事中どころか、向こう側も普通の道路が続いているだけ、もしや数十m先とかそういうオチかと遠くを眺めてみても、何もない。
「うーん…？」
　立ち止まって首を捻った。
　誰かの悪戯にしては道の真ん中に置き過ぎてる、って言うか、このままじゃ車が通れないだろう。第一、この看板、おふざけにしてはまともだし、どう見ても本物の道路工事中の看板だ。
「あっちは…」
　もう一本の道を思い出す。確か水道工事中とかで、道路を横切るように穴が掘られていて、重機もあったし、コーンも並んでいたはずだ。看板だけこちらへ運んでどうする気だったのか。明日か明後日、こちらで工事をする予告とか？　まさかな。
「……一旦戻すか」
　看板に近寄り手をかけて、もう一度道を見やって、朝倉家のレンガ塀を見つけた。ああ、あちらの道路からも行けたよな、と思った次の瞬間、
「っっ！」
　ぱっと光って流れたヘッドライトと同時に、頭の中にも閃きが走った。通り過ぎた車、この辺りであんなサイズの車が通るのは朝倉家のものだけだ。走り過ぎた先の道路に何があるかを思った瞬間、血の気が引く。同時に、急ブレーキ音が響き渡った。
「周一郎っ!!」
　ぞっとした寒気を振り捨てるように俺は駆け出した。

　右手首に白い包帯を巻きつけながら、周一郎は凄みのある笑い方をした。
「馬鹿なことに引っ掛かりましたね」
「馬鹿なこと、じゃねえ」
　応じた自分の声の冷たさにぎょっとした。俺でもこんな声が出せるのか。
　しかも続いて言い捨ててしまった。
「一歩間違えりゃ，確実に死んでたんだぞ」
「…」
　周一郎は無言でちらりと英を見やった。視線の意味を知り尽くしたように、英が周一郎に歩み寄って包帯を巻くのを見ながら、ついさっきのことを思い出していた。

「周一郎!!」
　喚いて角を曲がった瞬間、見覚えのある黒の外車が鋭くタイヤを鳴らしながら、水道工事の穴へ突っ込んでいくところだった。
　立ちすくんで見守ることしかできない俺の目に、車の後部ドアが弾けるように開くのが映る。飛び出した塊が吹っ飛び転がって、近くの塀に叩きつけられる。もう一つ、黒い影が運転席から飛び出して道路の上にひっくり返る。車が突っ込む、凄まじい音を立てて吹き上がる煙。
「、大丈夫か！」
　我に返って必死に駆け寄ると、始めに吹っ飛んだ塊がもぞりと動いた。
「…滝さん」
　青ざめた、けれども平然とした表情を崩していない周一郎が立ち上がるのに、ほっとして体を支えた。
「僕は大丈夫です…英は…？」「う」
　周一郎をかばって叩きつけられたのか、転がっている英の額に赤いものが一筋流れ落ちてくる。
「滝さん」「わかってる！」
　俺はすぐに朝倉家へ走った。燃え上がる車の破片で傷ついたのか、水道管から水が吹き上がって周囲を水浸しにしていた…。

「…大丈夫か，英」「はい、それより、申し訳ありません」
　気がつくと、英が周一郎に深々と頭を下げていた。
「私がもう少し注意深くしていれば」
「いや、十分だ」
「いえ、一歩間違えば、あなたが死ぬかもしれなかった」
　悔しげに唇を噛む英に、良い奴だなと思う。払い落としたはずの劣等感が、ずるずると背中辺りに戻ってくるのを感じる。
「滝さん？」
　周一郎がふいに気づいたように目を向けてきた。
「その額、どうしたんですか？」「っ」
　慌てて片手で石が当たって赤くなったところを隠す。
「何でもない」
「何でもないって……まさかさっきの」「違うっ」
　顔を強張らせた周一郎に気恥ずかしく、思わず言い返した。
　周一郎を庇って名誉の傷を負った英の前で、石を蹴ったら跳ね返って来て当たったんだなどと格好の悪いことが言えるか。おまけに、周一郎に何の役にも立ってないし！
「けれど」
「何でもないって言ってるだろ！　俺、もう寝るからな」
　椅子を鳴らして席を立った。これ以上、この二人の側にいると、劣等感が服を着て座っている状態になりそうだ。
「寝るって…夕食は…」
「今日は食わんっ！」
　心配そうな周一郎の声に逆にむっとした。ことばを最後まで聞かず、さっさと部屋を出る。足音荒く階段を降りかけ、ふと気づいて英の部屋を見た。二階。つまりはこういうことなんだろう、役に立つか立たないか。
　べえええっ、と英の部屋に向けて舌を出す。ああそうだよ悪かったな、歳不相応に幼くて！　たいしたこともできないのに相棒ぶって、そりゃ失礼しましたよ、だ！
　と、間の悪い時には悪いもので、突然開いた戸口から、当の英が顔を出す。
「？」「あ、いや、その…」
　舌がな、何だかおかしくてだな、空気にふれさせてみたらどうにかなるかもとかだな、とごにょごにょ口の中でぼやきつつ、数歩後じさりしたとたん、すかっと踵が空を踏んだ。
「え」「滝君！」
　言うまでもなく悲鳴を上げつつ、俺は下まで階段を転がり落ちる。
「だっ！　どっ！　わっ！　げっ！　どわわわわーっ！！」
「滝様」
　転がり落ちた階段の下には臆せず動ぜずの高野が待ち受けていて、慇懃に尋ねてきた。
「お夕食は如何いたしましょう？」

「どーせオレはドジだよ！」
　喚いて思わず引き攣った。びい…ん、と爪先から頭の天辺まで傷みが駆け上がる。
「っててて」
　ベッドの上で、大の男がそこら中にカットバンを貼り付けてひっくり返ってるんて、ほんと様にならない。
「英、かあ…」
　ずしりとまたもや頭上に降ってきた劣等感。ただし、今度は千トンぐらいあるんだろう、払いのける気力が

なかった。
　そりゃあ、今まで俺が周一郎の役に立ったとは言えない。どちらかと言うと、あいつの生活を引っ掻き回しているだけに違いない。
　けれど、一般人には一般人なりに、微妙な問題を見ないふりして突っ込めるという特技もあるもんだし、あれこれ考え悩んで，つい身動き取れなくなってしまうあいつのどこかに風穴を開けていた気がしたのだが。
　ただ、英みたいに、能力もある配慮もある、ついでにほどほどの抜け加減でおせっかい心もあるとなると、俺が周一郎にしてやれるほんの少しのことさえなくなってしまう。
（今の俺に、あいつに何がしてやれる？）
　何もない。
　いやそもそも、何かしてやれることなんて、初めからなかったのかも知れない。
　コンコン。
　軽いノックの音。何となく高野じゃないと気づく。
　それでも俺は動かなかった。
「滝さん」
　控えめな声が届く。
「……」
　沈黙は返答を待っているとわかっている。けれど応えない。一応これでもまともに落ち込んでる。落ち込んでる最中に、その元凶に会いたがるほどマゾじゃない。
「…寝たんですか、滝さん…？」「！」
　声に重なって聞こえたかちゃかちゃという音に俺は跳ね起きた。傷みを忘れてドアに突進する。扉を開くと予想通り、銀の盆に夕食を載せたのを掲げた周一郎が立っている。両手で支えるのも限界なのだろう、震える手が食器を鳴らしている。
「この…ばか！」
　思わず怒鳴りつけた。慌てて盆を奪い取ると、巻いた包帯を緩ませた細い腕が現れる。盆は俺の手にさえずしりと重い。
「怪我してんのに、こんなの持ってくる奴があるか！」
　部屋のテーブルに盆を置きながら、声を張り上げる。
「高野は何をしてんだ！」
「…ぼくが」
　ふ、と妙にたどたどしい声が応じて振り返る。
「…ぼくが持ってきたかったから…」
「…え？」
　右手首を押えて俯いた周一郎の表情がよく見えない。
「痛むのか？」
「……大丈夫です」
　少し黙った後、周一郎は顔を上げた。弱々しい笑みを張りつけている相手の側へ近寄り、顎をしゃくる。部屋に入れと促した。
「ほら来い、でさっさと手を出せ」
　包帯は俺が盆を取る時に引っ掛けたのか、端が外れていた。
「巻き直すくらい自分で出来ます」
「人がやってやろうってんだ、たまには大人しく受けろ」
「……」
　口を噤んで椅子に腰を降ろす周一郎の手の包帯を少しだけ解く。全体が緩んでいたんじゃないことにほっとして固めに巻き付けていく。びくりと体を震わせる相手を覗き込む。
「本当に大丈夫なんだろうな」
「はい」
「ちゃんと寝てるんだろうな」
「はい」
　間髪入れずにそっけなく答えを返す周一郎が、一瞬嬉しそうな子どもっぽい笑みを浮かべる。が、本当にそれは一瞬で、すぐに醒めた表情に戻って包帯を見つめた。
「心当たりはないのか？」
「僕を狙った犯人ですか？」
　周一郎相手なら、俺はほとんどしゃべらなくて済みそうだ。
「あり過ぎてわかりませんね」
「呑気に構えてる場合じゃないだろう」
　明らかに狙われている、余計なお膳立てまでして。
「慣れてますから…こういう騒ぎには」
　周一郎は淡々と応える。
「殺されかけるのも初めてじゃないし」
　声が虚ろに響いて思わず顔を上げた。目を逸らした相手は今の今まで俺を見ていた気がした。
　包帯を巻き直す手を止めて、まじまじと動かない横顔を見る。
　側に居ても何もできない。心配しても届かない。手を伸ばしても拒まれ、声をかけても無視される。
　けれどやっぱり側に居てやった方がいいんだと思う。
　こいつの中にある見えない傷が、普段はしっかりガードされて隠されているのに、こういう時には剥き出しにされて陽の光に晒され灼かれている気がする。優しい部分を切り捨てようとして捨てきれなくて、そういう自分の甘さにうんざりしてて、見つめてしまった人の闇に身動きできずに立ち竦んでいる、そんな風に見えてくる。
「……仕事はどうだ？」
　話題を切り替えた。
「…まあまあですね」
　不自然な間合いに周一郎は乗った。こいつもまた、そこの部分には触れてほしくないんだろう。
（英は？）
　ああ、英は違うのかもしれない。こいつの隠している部分に近づけ、何かしてやれるのかもしれない。けれど

、俺は英じゃない、望んでもそうはなれない。だからと言って、何もできないなどと愚痴ばかりも言いたくない。
「海部運輸のルートは八十パーセント組み込めましたし、後は…」
　周一郎の唇が吊り上がる。魔王を思わせる昏い微笑だ。
「どこまで手を伸ばすか…っつ」
「悪い、きつかったか」
　止めかけたテープを外し、少し緩める。
「けどな、周一郎」
「はい？」
「お前独りで背負い込むなよ？」
「っ」
　思わぬタイミングで相手が体を強張らせて驚いた。慌てて周一郎を見ると、今度は問いかけるような視線に捕まった。
「どういうことですか」
「は？」
「今のことばの意味」
「いや、お前いつも独りで何でもやっちまうだろ？　今回は…英も居るし、な」
「…そうですね」
　周一郎は曖昧に目を細めた。
「彼はそれなりに優秀です」
　ほう、それなりに。
　あれでも、周一郎にとっては『それなり』なのか。
　何となく溜め息をつきながら、テープを止め直した。
「ほらよ」
「すみません」
　他人行儀に殊勝らしく礼を言った周一郎に、もう一度溜め息を重ねた。
（こいつは永久にそこから近づいてくる気はないんだろうな）
　結局、俺を頼ってくるのは朝倉周一郎としての意識がないときばっかりだ。
　背負った荷物の重さに耐えかねて俺を振り返りはするくせに、手を伸ばさないまま無言でぶっ倒れるなんつー、人の心臓の強さを試すようなことばかりする。いつも気づいてやれるならいい、ときどき全く気づかない俺が、倒れたこいつを見てどれだけたまらない気持ちになるかなんてことは、わかってないんだろう。
「滝さん？」
　動かない俺に訝しげな声をかけてくるのに、溜め息を追加した。溜め息バーゲン大安売りだ。
「何でもない」
「…そうですか」
　何かを尋ねようとした、けれど尋ねるのを諦めた。
　そんな間合いで周一郎は答えを返す。立ち上がり、
「では……お休みなさい」
「ああ、お休み」
　無難な笑みを返してきて、周一郎は部屋を出て行く。ぱたりと閉まった扉に、身体中の打ち身の痛みがぶり返し、引き攣りながらベッドにひっくり返った。
「……」
　視線を投げたのは部屋の隅。脳裏に浮かんだのは、たった一つの荷物、ボストンバッグのことだった。

「、くん、滝くん」
「あっ、はいっ！」
　ふいに呼ばれて勢いよく立ち上がった。拍子に机の上の本やノート、一切合切がどさどさと落ちる。
「うん？」
　教壇でマイク片手に、「文学における人間と感情の理論的分析」について滔々と語りに語っていた納屋教授は、不審そうに俺を振り返った。
「何だね滝くん、質問なら後で…」
「いえっ、そのっ何でもありませんっはいっ！」
　これ以上単位を削られたくない。必死に誠意を見せようとする。
「どうぞ続けて下さい、はい！」
「ああ、うん」
　納屋教授はなおも訝しそうに首を傾げたが、気を取り直したのだろう、なかなか渋い笑みを浮かべて、
「君には期待しているからね」
　ぶはっ、と周囲に居た人間が軒並み吹いた。
　なんでえなんでえ、俺に納屋教授が期待しちゃ悪いのかよ、といささかやさぐれながら席に着く。落ちた本やノートを拾いながら、それにしてもさっきの声は誰だったんだろう、どっか聞き覚えがある、まさかな、そう考えた瞬間、もう一本白い手が差し出されてノートを拾ってくれた。
「あ、どう……っ」
　この手は間違いなく女子だよな、俺だってほら見ろ満更じゃないぞ。
　満面の笑みを浮かべながらお礼を言いかけ、思わず叫ぶ。
「城本！」「しっ」
「何だね、滝君」
　百合香の制止はかなり遅く、今度はさすがに冷ややかに投げつけられた納屋教授の声に慌てて振り向き、歯を剥き出して笑う。
「何でもありません、はいっ」
「それなら始めてもいいかね？」
「はいっどうぞっ！」
　くすくす笑いが広がっていく。あからさまに馬鹿だ馬鹿だと言う声も響く。何してんだよあいつは。ほんとお

めでたいよな。こそこそ囁き交わされることばに、穴を掘って地下に埋まりたい気分になる。
　こんなことで目立つから、いつまでたっても女が寄ってこないんだよな、たぶん。俺が女でもちょっと困る。
「……ごめんね、滝くん」
　いつの間にか隣に腰を降ろしていた百合香が、首を縮めながらそっと謝った。
　一体どうやって紛れ込んだのか、なんてのは無粋な話だ。大学なんて、ああ確かにこの大学の学生だよな、なんてわかる輩は半分もいないだろう。納屋教授の講義だって、戸口は基本解放されているし、時間が過ぎてもこっそりと入り込んでくる奴は常時居る。教授連中もそこのところは人気稼業とでも心得てるのか、目くじらたてて激怒する教師はあんまりいない。
　むしろ、この場合、大事なのは「どうやってここに来たのか」じゃなくて、「なぜここに来たのか」だろう。
「…いいけど……どうしてこんな所に居るんだ？」
　そっと囁き返すと甘い花の薫りがしてどきどきする。
「うふっ」
　百合香はいたずらっぽい瞳で笑った。ふんわりしたワンピースは、それだけでも聴講に来ている周囲から浮いてる気がするが、零れた微笑はそんな不快感をあっさり散らしてしまう。
「滝くんに会いたかったの」
　蕩けるような声で蕩けるような内容を呟いた。
「それに……話したい……相談したいこともあるし…」
「俺がここにいるって、よくわかったな」
　納屋教授の講義自体が結構突発的に場所を変えるから、聴講するのにもコツがいる。
「ちょっと知り合い、が居て」
「知り合い…」
　脳裏に過った怜悧な微笑、ああ確かに周一郎なら俺の居場所を推測することなんて朝飯前だろう。そう考えたとたん、一気に南米あたりまで落ち込んだ。
「…それで話って」
　慌てて降ってきた落ち込みをさっき掘った穴に埋める。
「うん…ちょっと」
　百合香は指先でちょいちょいと俺を招いた。耳に唇が近づく。近い。柔らかい匂い。優しい吐息が触れる。小さな声がことばを紡ぐ。昇天しそうな気分は、次の瞬間天国を通り過ぎてしまった。
「結婚してくれだあっ?!」
「滝君っ!!」
「はいっ、出ていきますっ!!」
　俺は本もノートもそのままで、百合香の手を掴んで飛び出した。

「ふやあ」
「大丈夫？　滝くん」
「ああ…まあ……なんとか…」
　芝生の上にひっくり返って百合香にハンカチで煽いでもらっている。必死に逃げたせいで、心臓は潰れそうだわ、肺は灰になるわ、ついでに足はこんにゃくになるわで、もう一歩も動きたくない。
「ごめんね、滝くん。私が変なこと言ったから」
「それだ！」
　俺はがばりと身を起こした。びっくりしたように百合香が体を引く。
「どうして俺と、けっけっけっ」
「何かおかしい？」
「ちがーうっ！」
　全力で喚く。言い慣れないことばだけに素直に出て来ない。
「ど、どうして、俺なんかと結婚、って」
「だって」
　百合香はふいにひどく寂しそうな顔になった。目を伏せ、そろりと細い指を並べて自分の腹を撫でる。
「この子を……殺したくないの」
　翳る瞳が痛々しくて、思わず口を噤んでしまう。
「この子の父親は……認めないって言ってるし…」
　ただ産めばいいのかもしれない、けどね。
「私は…この子に幸せになって欲しい…」
　ためらいがちに紡がれたことばは切な過ぎた。ゆっくりと視線を上げて俺を見上げ、なのに、再び芝生に目を落として躍る陽光に目を細める。
「……帰れる場所が欲しいの…」
　子どもの、だけじゃないんだろうなと思った。子どもの帰れる場所ではなくて、子どもを抱えた百合香自身の帰れる場所を望んでいる。
「殺したく…ない……私もう……独りは…嫌なの…」
　低くなっていく声を励まし励まし訴える。
「…」
　反論することばは残されていなかった。肩を震わせる百合香の目元から、きらきら光る雫が明るい芝生に吸い込まれていく。地面にはときどき雨が降る、温かくて塩気の多い、悲しい雨が。
　頭の中で、周一郎と百合香、周一郎と英が交錯し、互いを掠めて離れていく。
　そんなに難しいものかよ、産まれた命を認めることが。
「俺、さ」
　そっと百合香に声をかけた。躯の線を固くして震えた相手を見ないようにして、芝生に寝転がる。
「一応，孤児で……今まで家族らしいものを持ったことがなくってさ、まあ、周一郎が家族と言えば家族なんだけど」
「……」
　周一郎の名前にいよいよ躯を固くする百合香に、やっぱりそうなのかと溜め息をつく。
　周一郎には英がついている。だが、百合香は今一人きりだ。子どもを抱えて行き場のなくなった母親なんて何

人も見た。迎えにくるからねと必死に笑って走り去った背中を眺めてた新入りが、暗い瞳で頷いていたのも何度も見た。
　何とかならないのかと思わなかったはずもない。けれど実際，何とかできそうな立場になると、怯むもんだとわかった。それでも。
「親を知らない。親のやり方がわからない……だから、あんまりうまくやれないかもしれないけど」
　体を起こす。
　莫迦じゃねえの、と声がする。好きな女が居て、けれどその好きな女は別の男の子どもを抱えて、子どもの父親は友達だけど子どものことなんか見向きもしない、だから女は体よく俺を利用しようとしている。
　けど。
「それだけのことだよな」
「…え？」
「なあ城本、結婚しようか」
「……え…？」
　自分が振ったくせに、百合香はぽかんとした顔でまっすぐ俺を見つめた。今まで苛められていた小猫が不意に抱き上げられ温められて愛しまれ、わけがわからず戸惑うしかない、そんな呆気にとられた無防備な顔。
　それに周一郎の表情が重なって、口の奥が苦くなる。
　認めてやってもいいじゃねえか、なあ、周一郎？
「だって……滝くん…」
　ようよう百合香は口を動かした。大きく目を見開いたまま、緩やかに首を振ってことばを続ける。
「だって……私と？」
「今そう言ったんだろ？」
「でも私……初めてじゃないわ、子どもがいるの……よ？」
「うん」
「誰の子どもか、知らないのに…？」
　それは知ってるんだと言いかけて、あやうく口を噤んだ。じっと百合香を覗き込む。少しずつ崩れて泣き笑いのような表情になった百合香は、囁くように続けた。
「滝くん…本気で…？」
「あ、そのかわり」
　慌てて口を挟む。
「俺、何もできないぞ。金ないし、家ないし」
　周一郎に頼んだら、家賃一ヶ月分ぐらいは前借りさせてくれるだろうか…？
　百合香が失望する前にと、ことばを重ねる。
「根性ないし、頭ないし……ああ、えーと結婚式？もあげられるかどうか」
「……ばかみたい…」
「へっ」
　ぼそりと聞こえた声に瞬きした。
　俯いていた百合香が黙り込み、やがて小さく呟く。
「……あなたって……ばかみたいね」
「わかってる」
　思わず唸った。
「わかってるから、言わないでくれ。それでなくても最近めり込んでいるんだ：
　くす、と百合香は笑った。ゆっくり顔を上げる。その目にひどく切ない色がたたえられていてどきりとする。
「…だけど……優しい…」
　淡くぼんやりした声音で呟き、いきなりふわりと俺の腕に身を投げてきた。
「え、わ…っ」
　慌てて受け止め、勢いに堪え切れずに後ろにひっくり返る俺の胸を枕に、百合香は低い声で呟く。
「いつもそうして受け止めてくれるのね……いつも……いつも」
「そんなことしたらお腹の子ども、いや、頭打つんじゃないかと思ってさ」
　知らないだろうが、あれは痛いんだぞ、ほんと。
　続けた俺のしどろもどろの弁解に、ふ、と妙に大人びた溜め息を漏らす。
「周一郎が…心を許すはずね」
「…え？」
「前代未聞よ、『氷の貴公子』が自分を委ねるに等しい距離に、誰か人を置くなんて…」
「城本？」
　声の調子が変わった。嫌な予感にそっと相手を呼ぶ。むくりと体を起こした百合香の表情も変わっている。瞳が鋭い、心の奥を突き刺すように。
「だから狙われているのよ、滝くん」
　優しい声音が静かに言い放った。
「え？」
「あなたが、優しいから」
　にっこりと笑う綺麗な目。子どもっぽい顔立ちが今まで見たことのない大人びた表情に染まっている。
「城本、一体何を」
「お芝居なの」
「へ？」
「みんな、お芝居なのよ」
　とん、と軽く胸を突かれた。芝生にもう一度沈む俺、勢いで立ち上がったかのような百合香はそのまま後じさりし、数歩離れた木陰に身を引く。
「妊娠なんて嘘」
　響いた声に慌てて起き上がった。
「あなたを捕まえておくための嘘」
「え…ええ？」
　わけがわからなくなって瞬きする。陰に潜んだ百合香の頬はもう濡れていなかった。冷ややかな顔，片頬に笑

みを浮かべてそろりと半身背中を向ける。
「全部全部うそ。嘘だらけ」
　嘲るように言いながら、背中を向けかけた肩越しに俺を振り向く。
「城…」
「あなたが周一郎の弱点だから近づいたの」
「…」
「あなたを崩せば周一郎に近づきやすいでしょ、英が」
「っっ」
　唐突に落ち込みの中心人物の名前がでてきてぎょっとした。
「気づいてなかったのね、やっぱり」
　くすくす、と百合香は笑った。
「英って……あの、英京悟？」
「そう。彼も私も、タジック社の特殊機構員……簡単に言えば、企業スパイ」
「す、ぱい？」
　って食べられましたっけ、それ。
　ふふふ。
　百合香は小さく笑った。
「じゃ、じゃあ、ぜんぶ、計算ずく？」
「うん」
　片方見えている顔が笑みほころぶ、嫣然と、蕩けるように。けれど、さっきまで澄んでいたように見えた瞳には、木陰のせいか光がなかった。
「口、閉めたら、滝くん？」
「あ、うん」
　ぱくん、と口を閉じる。いつの間にか大口開いて話を聞いていたらしい。
　英を周一郎に近づけるため。いつもくっついている俺を引き離すため。ひょっとすると、俺を引きつけておくために、寝ることも計算のうちで。
　怖え。どこが無邪気な子どもだ。どこが行き場をなくして可哀想な女だ。研ぎすました爪を隠した雌ヒョウじゃないか。
　ひやりとしつつ、それでも腑に落ちなくて尋ねる。
「でも…」
「ん」
「どうして…俺に話しちまう？」
「……」
　百合香はゆっくりと瞬きをした。まるで、夢を見ていたみたいに。目の前の俺が幻だと、消え去るのを確認するかのように。唇を開く。
「あなたが、あんまりばかだから」
「ばか…」
　ここでそれ？
「……中学のままね、滝くん。何年たったと思ってるの、人なんてどんどん変わるんだから……いつまでたっても、あの頃のままの顔で、あたしを信じちゃうなんて」
　せ、成長しないという罵倒か。
　小首を傾げた百合香がなおも繰り出すことばにびくびくしながら固まっていると、動かなかった表情が少し解けた。
「私には無理」
　ぽつりと続いたことばが、ひどく淋しそうに聞こえた。
「どうしようもない」
「城本」
「あなたはあたしを信じるのに」
　肩を竦めて目を細める。
「そういうあなたを信じ切れない」
「！」
　何かが掠めた。立ち上がる。木陰に消えようとする百合香を追いたくなる。
「城本、お前」
　本当は、今話していることの方が嘘なんじゃないか。本当は、本気で結婚を言い出したんじゃないのか。本当は。
「だめよ」
　百合香は首を振って、より奥へ後じさりする。顔が薄暗がりに見えにくくなる。
「私は人を信じられるほど甘くはなれない」
「けど、俺に話した！」
　思わず叫ぶ。
「ほんとは、お前」
「あなたに話したのは…」
　僅かに俯く。沈黙が続く。けれど結局、百合香は静かに言い切った。
「なぜなのかな、私にも、わからない」
「城本」
「でも、これっきりよ」
　すっと上げた顔が、今度は暗がりなのにはっきりと見えた。昔の夢ばかりしゃべる可愛い女の子じゃなくて、再会したときの戸惑いとはにかみを浮かべた甘い笑顔ではなくて、きっと惨くて辛い人生だったんだろう、そんな何もかもを呑み込んだタフでしたたかな一人の女の顔。
「あなたに示せる、これが最後の優しさよ」
　告げられたのは宣戦布告。
「気をつけてね、滝くん」

「城本！」
　すっと背後の薄闇に消える、眩い陽射し降り注ぐ俺の場所からは無限の広がりが続くように見える影の中へ。
「っ……どわあっ！」
　唇を噛んで引き止めようと走り出した瞬間、足元をがつりと止められ前へのめる。容赦なく叩きつけられ泥に突っ込む。
「ぶあ！」
　跳ね起きて顔を擦り振り返ると、芝草の根か木の根か、そういうものが俺の爪先をしっかりと押さえ込んでいた。もう一度木陰を振り向くが、もちろん、百合香の姿はとっくにない。
「お……お前…なあ…っ」
　どこへぶつけていいかわからない怒りはどうすればいいのかわかっている。天を仰いで吠える。
「一回ぐらい決めさせてくれたっていいだろがああっっ！」
　上空でのんびり眺めていた神様が鼻歌まじりに遠ざかっていくのが見えた気がした。

　落ち込んでた。めり込んでた。埋まってた。
「やっぱりなぁ…」
　もてるはずがなかったんだ。ましてや、少々爪が尖ってよーが百合香のように可愛い女の子が『結婚してくれ』なぞと言い出すわけはなかったのだ。
　落ち込んでるせいか、朝倉家の玄関が、実際より遥かに遠く数千キロ彼方に見える。ずるずる歩く俺の目に、落ち込み原因の片割れが、湖の方の小道から近づいてくるのが映った。
　英を従えた周一郎。何やら込み入った話らしく、いじけて道の端を歩いている俺に気づかない。
「…なのか？」
「はい、海部運輸のルートは95％まで吸収し終わっています」
「残りは」
「プラン終了とともに吸収が済むよう手配済みです」
　当然だと言わんばかりに表情を変えない周一郎、英がふいにちらりと悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「朝倉さん？」
「何だ」
「いつまで芝居を続けるんですか？」
　ぴくりと肩を震わせた周一郎が立ち止まり、その影のように合わせて英も立ち止まる。
（芝居？）
　戸惑う俺の目の前で、周一郎は緩やかに英を見やった。
「一体何のことだ？」
「僕と滝君はかなり似てると思うけど、根本的な所が違っているようですね。その証拠にあなたは僕には気を許さない」
「せっかく滝さんそっくりに振舞えるように訓練したのに」
　続けた周一郎は唇を笑ませた。
「残念だろう、英？」
　英がぎょっとした顔で息を呑む。信じ難いと言う表情で見つめ返す英に、くすっ…と柔らかな声で周一郎が嗤った。
「僕が気づかないとでも？」
　からかうような声音で続ける。
「英京悟が有名なのは、遣り口と正反対の性格……作り上げた人なつっこさとお人好しな雰囲気を崩さないからなのに？」
　作り上げた？
　今度は俺の方がぎょっとする。
　あの良い奴っぽい雰囲気は作ったものだっていうのか？
「…ま…いったな」
　英がふいににやりと唇の片端を上げた。
「ひょっとして始めから見抜いてた？　…僕が特別な意図を持っているのを？」
　不敵な口調、聞きようによっては小馬鹿にしているような嘲りを響かせる。
「城本百合香と組んでいたことぐらいはね」
　周一郎は怯んだ様子もなかった。
「滝さんのことをよく調べたと思ってるよ」
「そこまで見抜かれてたからどうにもならなかったわけだ」
　英はひょいと肩を上げた。ふてぶてしい口調で、
「タジックの狙いは正面から潰されたな」
「そうでもない」
　周一郎は笑みを深める。鋭い刃物のような冷たい笑みだ。
「その裏の狙いはまだ死んでないだろう、英？」
「っ」
　今度こそ英の顔が惚けた。瞬きする。無表情の仮面を貼り付けた顔が見る見る白くなる。
「ちょっと待った…」
　応じた声が微かに震えていた。
「まさか、そっちも知ってて」
「僕が誰だか忘れていたのか？　朝倉周一郎を相手に芝居を打つ気で来ていたんだろう？」
　長年の友人を迎えるような親しげな口調、けれど冷たい笑みは消えない。
「そりゃ…そう、ですが…」
　英はしばらく口ごもり、やがて重い溜め息をついた。
「……終了、ですかね」
　一旦目を閉じ、再び開いた瞳にはもう親しみも優しさも浮かんでいなかった。どこかに崩せる隙はないかと狙うような険しい視線だ。
「それで？　僕をどうする気なんです？」

「ここで騒ぎを起こす気はない」
　周一郎は笑みを消した。不思議なことに、微笑まなかった顔の方がまだ話し合いの余地がある気がした。
「君は優秀な人間だし、ここで失う気はないよ。それに、僕は君の計画については反対じゃないんだ」
「朝倉さん…」
　英は何を言いかけ、止めた。しばらく瞳を光らせて周一郎を凝視していたが、またふっとお人好しな笑顔を取り戻した。
「ああ怖かった。思い知りました、冷や汗をかいてる」
「そんなに場慣れしていない人間じゃないだろう？」
　周一郎が珍しくからかう。英は軽く頷いて、
「まあ確かに。それでも、今のはひやりとしました」
　俺もここで終るのかと本気で思った。
　小さく続いた呟きに周一郎は薄く嗤って向きを変える。促すように、
「行こうか」「はい…わっ！」
　歩き出した英がいきなりつんのめってひっくり返り、まるで自分を見ているような気がして、思わず目をつぶった。
「たいしたものだね、英、滝さんそっくりだよ、そんなところ」
　周一郎の声に眼を開けると、こけた英がむっつりとして起き上がるのが見えた。
「今のはマジです」
　ふ、と周一郎が微笑する。ずん、と高度一万㎞ぐらいから何かが降ってきて頭にぶつかり、俺は地面にめり込む。
（何だ、あの笑い方！）
　俺がこけた時は冷ややかに一言、「何してるんですか、滝さん」のくせして、なんで英がこけたら優しげににっこりなんだ？　ガキっぽい無邪気な笑い方……俺には決して見せたことのない笑い方。
「にゃあん」
　我に返ると英と周一郎の姿は既に邸の中に消えていた。足元にはルトがちょこんと座って俺を見上げている。
「ああ…お前か」
「にゃん」
「何？　時計がどうしたって？」
　手首を見つめるルトの目に時刻を読む。
「…五時四十分…っ、バイトーっ!!」
　主任の機嫌が良くなっていますように！　他にいいことが起こっているとか客が次々詰めかけているとか！
　必死に願いをかけながら、俺は走った。

5.罠

「はいはいわかった」
　フライドポテトを小さな袋に放り込みながらぼやく。
「おかしな期待を膨らませた俺が馬鹿だった」
　暮れ出した街には楽しげなカップルが寄り添いながら溢れ出し、カフェに点った灯に幾つも重なり合うシルエットが浮かんでいる。
「……はあ…」
　数日前は俺もあの中の一人だったんだよなあ、と溜め息をついた。
　人並み以上に可愛い百合香が六時になればやってきて、帰り二人でいそいそ帰るなんてことも少なくなかった。
　ところがどっこい、百合香は実は周一郎攻略のために派遣された工作員の一人で、俺はまんまと演技に騙されて結婚まで申し込んだお人好しで。結局何をやっているかというと、Dr.ドナルドのカウンターの中で細々アルバイトを続けてる。
　店を照らし出す白々とした灯が、外の柔らかいほの暗さに比べて白けた感じで、こういう時にはなぜか客もほとんど入らない、この店はこれから大丈夫なのかと自分のことを棚に上げて悩めるぐらいだ。
「なーにが、そんなことは無理よって、お由宇の奴。俺だってやろうと思えば、そのくらいの決心はつくんだ」
「何の決心がつくって？」
　ふいに声が聴こえ、ギクリとした。慌てて振り向くと、いつの間にか真後ろに立っていた主任が唇の端をひくひく引き攣らせながら笑っている。
「え、いや」
「ここを辞めようとかそういう決心かね」
「は？」
　きょとんとした俺に、主任は顎をしゃくる。
「げ」
　床の上にフライドポテトが散らばっていた。乱暴に掬い上げていたのが零れ落ちていたらしい。問題はそれが何度も重なっていたということで…もう一人居てくれれば注意もしてくれただろうが、生憎人のいない時間帯でカウンターに出てるのは俺だけ。
「……やっぱり戯ですか」
「まさか」
「まさか？」
　打てば響くように返ってきた返事は俺の理解を超えていた。
「そうとも、君の様な『逸材』を誰が戯にするもんか」
「……は？」
　主任はくすくすと小さく嗤った。
「永久に雇わせてもらうさ、時給二百円で」
「ちょっ」
　それは労働なんたら法に違反してるんじゃないか、そもそもそんな時給で雇ったりして会社的にはどうなのか。
　うろたえた俺に主任は満面に笑みを広げ、
「もし断りでもしたら、本社から手を回して業界のブラックリストにお前の名前を載せてやる！」
　言い捨てるとくるりと背中を向けて歩み去る。落ちたポテトを始末しておけとも言われないあたりが、常軌を逸していると証明しているようでかなり怖い。
「つまり…俺は永久にここでフライドポテトを詰めていろ、と…？」
　船底で延々とオールを手に漕ぎ続ける男達の姿を思い出し、慌てて振った頭にはお由宇の微笑が甦った。

「一体俺が何をしたって言うんだ？」
「じっとしてなさい」
「てっ」
　パチン、とカットバンの上から腕を叩かれた。
「どうやったら、こんなところを擦り剥けるわけ？」
　いやそこは可能性を語るところじゃないだろう。
　呆れ顔のお由宇に反論できるわけもなく、胸の中で溜め息をつく。
　周一郎が妙に無邪気に英にまとわりついていた。俺にだってしやしない人なつこさで、ついつい気を取られて眺めていたら足元がお留守になるのはいつもの展開、数段階段を転げ落ちるのもお約束。おまけに気づいて近寄って来た周一郎は、いつものことながらうんざりした顔で「またですか、滝さん」。
　なんでだ？　なんで英がこけて優しく笑ってみせて，俺がこけるとうんざりげっそりモードでまたですか、なんだ？
「…ほんとに仕方のない人ねえ」
　お由宇は赤ん坊をあやす口ぶりで言い捨てながら、救急箱を片付けに立ち上がった。
「過小評価にもほどがあるわ」
「…？　俺のことか？」
「他に誰がいるの」
「？？？　過小評価？？？？」
「言ったでしょ、周一郎はあなた以外信頼しないって」
　コーヒー飲むわよね、と確認されて頷く。
「あなたそっくりな人間が出て来たからって、同じ中身とは限らないし？」
　カップを出しながらくすりと笑う。
「一々信頼してて、あんな世界で生き抜けるもんですか」

「でも、なあ」
　英はいい奴に見える、周一郎への忠誠も本物に見える。確かにこの間芝居とか何とか言ってたけど、英が周一郎を騙せるはずもないだろう。じゃあ、誰の、誰に対する芝居なんだか。第一どこでそんなものやってるんだか。
「芝居…かあ」
　どすんと上から降ってきたのは百合香を笑顔を詰め込んだずだ袋で、頭の天辺からプライドを叩きのめしてくれる。
「…出ようかなあ」
「え？」
　お由宇が振り返った。コーヒーの香りが気持ち良く漂ってくる。
「いやさ、あの家を出ようかなって」
　何の役にも立たないし。落ち込むばっかりだし。惨めになる一方だし。
「俺、何にもわかってねえしなあ……」
　ぼやいた口調は半分は本気、半分はお由宇に慰めてもらえるかと思ったからだったが、もちろんお由宇はそんな生易しい女ではなかった。
「無理よ」
「へ？」
「あなたにできるもんですか」
　くすくすと笑う、楽しげに嬉しげに。
「…できるさ」
「できない」
　コーヒーカップを目の前に置き、くふん、とお由宇は鼻を鳴らして目を細めた。
「一生賭けてもいいわ」

　俺だって、小学生じゃあるまいし、そんなことぐらい自分で決められる。何も周一郎の側でなくちゃ生活できないというわけじゃない。あいつに会うまで俺だって一人で暮らしてきたんだし、幾つかバイトを掛け持ちすれば何とか生きていけるだろう。
　決意と不安を繰り返しつつ、気がつくと客が少なくなってきていた。
「おい、交代」「あ、すまん」
　閉店までの一時間と後片付けの勤務者と入れ替わってカウンターを抜け出す。更衣室で制服を着替えて出て行こうとすると、主任が満面の笑みを浮かべて手を振って送ってくれて、ぞくぞくしながら頭を下げた。
「は…はは」
　怖い。そのうち何かとんでもないことをされそうな怖さだ。
　けれどもし朝倉家を出て行くとなったら、ここも貴重なバイト、ましてや機嫌を損ねてブラックリストに名前を載せられでもしたら、目も当てられない。
（朝倉、周一郎、か）
「ねえこっちがいいなあ」「え～どっちがいいのお」
　ウィンドウの前で楽しげにいちゃいちゃするカップルの後ろを通り抜け、二人が眺めている煌めくアクセサリーを見やり、溜め息をつく。
　周一郎が買おうとするなら、こんな店、店ごと買うことができるんだろう。
「こっち来てよ」「久美ちゃんこそこっち」
　前から来るカップルも腕を絡めたり腰を抱いたりと忙しくしながら、通りのフレンチレストランに入っていく。表に出ているメニューには値段がない。
「怖え」
　こんな所に入るのに、幾らぐらい準備しておくもんだろう。周一郎ならもちろん、メニューさえ見ずに好きなものをオーダーして作らせてしまうことができるんだろうが。
　周一郎なら。
　周一郎なら。
「はあ…」
　何で関わり合ったんだろう。どう見たって、俺とは全く住む世界が違うのに、どうしてわかってやれるとか思ったんだろう。
　ぶつかってくるカップルが神様のいやがらせのような気がして、裏路地に入る。
　人気の少ない、切れかけた電灯がちかちか瞬くような看板が置かれている、ラーメン三百五十円と書かれた紙に目を惹かれる、そんな通りだが、朝倉家には続いている。
　けれど、続いている、だけなのだ。
　元々の俺の世界はこんなものだったのだ。
「…だよなあ」
　苦笑いして歩き出すと、すぐ先の角を曲がってこちらへやってくる男が居た。サラリーマン風の、仕事帰りなのか書類かばんを下げている。瞬く電灯に中途半端に照らされた横顔が見えにくく一瞬不安になったが、相手はためらった様子もなく、携帯を耳にあてながら歩き続ける。
　単なる通りすがり、そう思ってほっとしつつ、それでも足を速めて通り過ぎようとした矢先、隣で男がふいに振り向いた。
（え？）
　まさか、男を襲う痴漢ってやつ、と抜けたことを考えたのが最後の記憶、次の瞬間目も眩む強い一撃を後頭部に喰らって足が崩れる。
「な、ん…っ」
　視界が一気に真っ暗になり、どこか遠くで猫の鳴き声がして、俺はそのまま意識を飛ばした。

「……きさん…」
　遠い闇からさざ波に似た囁きが届く。俺はなぜか浜辺にひっくり返っていて、黒い空の下に体を投げ出している。

「たきさん…」
　不安そうな誰かの声だ。心配でたまらないと言いたげに俺を繰り返し呼び続ける。
　誰の声だろう？　どこか優しい聞き覚えがある。
　気づいたとたん、ぼうっとあたりが明るくなった。
　今の今まで覗き込んでいたらしい人影がほっとしたような溜め息を漏らして慌て気味に視界から離れ、入れ代わりにひょいと顔を突き出した人間が、にっこりとお人好しそうな笑みを浮かべる。
「大丈夫かい、滝くん？」
「、あつっ！」
　跳ね起きかけて後頭部に走った痛みに眉をしかめる。一瞬、あの主任がついに俺のドジに頭にきて、もちろん今でも七割ぐらいは煮えているだろうが、俺を襲ったのかと考えた。
　おそるおそる頭に手をやり、かなりでかい瘤ができているのを知る。そっと撫でながら体を起こし、辺りを見回す。
　どうにも現実感がない。頭のどこかに穴が空いていて、どんどん中身が抜け落ちてしまっているような感覚だ。
「滝さん？」
　窓の近く、外の光に淡いシルエットになっていた人間が不審そうな声をかけてきて振り向いた。首を傾げるが、どうにも見覚えがあるようなないような。ぽかんとしていると不安を掻き立てられたのか、急ぎ足に近寄ってくる。
「滝さん？　…わからないんですか？」
　その声に気づく。さっき俺を呼び続けていたのは、大丈夫かと尋ねた男じゃない、こいつだ。子どもっぽさの抜け切らない顔立ちに不似合いな大人びた表情、けれど俺が相変わらず状況を把握できていないと知ると、その表情が薄い仮面のように剥がれ落ちた。冷や汗を滲ませるほどのあからさまな心配を浮かべて、俺を覗き込む。
「滝さん？」
「え…っと」
　あまりにも真剣だから、何か少しでも思い出してやらねばと焦っていると、一匹の子猫が部屋を横切ってきた。蒼灰色の不思議な色の毛並みに光を弾き、上品に歩いてきたかと思うと、体重が消えたようにふわりとベッドの上に飛び上がってくる。
「お…？」
　可愛いなこいつ、と微笑みかけた俺を見上げ、子猫は金色の目を細めた。にんまりと笑ったように口を開く。まるでほくそ笑むようだ、そう感じて伸ばした手を引きかけた次の瞬間、ためらいもなく子猫は俺の指を銜えた。
　がぶ。
「ぎゃ！」「ルト！」
　周一郎が叫ぶ。
「ルトぉっっ?!」
　噛んだ時と同じく唐突に開かれた口から、慌てて指を取り戻す。
「何だっ、何があったっ、俺が何をしたっ?!　俺を喰ってもうまくないぞ、メザシの方がよっぽどうまいぞ！」
「にゃあん？」
　メザシってなあに？
　そんな『口調』でルトは応じ、軽く跳ねてベッドから飛び降りる。
「え、あ、そうか、メザシなんて喰ったことないか……って、俺には猫語はわからんっ、人間語を使えっ、お前ならできるぞ絶対できる！」
「なぁんっ」
　聞いた様子もなく、ルトは駆け寄った周一郎の腕に飛び込み気持ち良さそうに抱き上げられる。
「…滝さん」
「お、周一郎、いいとこにいた、今の見ただろ、俺は何にもしてないのにいきなりこいつがかぷっと……って、あれ？　え？」
　溜め息まじりに呼んできた周一郎に訴えかけ、ふと我に返った。
「あれ？　俺？　あれ？　周一郎？　あれ？」
　周囲をきょろきょろ見回そうとすると、ずくっ、と痛んだ後頭部に思わず動きを止めた。
「った？　あれ？　俺…確か…？…」
「やっとまともに戻ったようですね」
　相変わらずひんやりした声の周一郎に情けない気分で顔を向ける、と、すぐ側に立っていた英がなぜか小さく笑った。とたんに周一郎が薄赤くなり、じろりと英を見やる。
「？」
「とにかく」
　二人を見比べた俺に周一郎は冷ややかな声で話しかけてきた。
「なぜあんな所で転がってたんですか？　躓けそうな石もぶつかりそうな看板もありませんでしたが」
「あのな」
　人をなんだと思ってるんだ、その物言いは。
「勝手に転がったんじゃねえよ」
　そろそろと瘤に触れてみる。痛い。やっぱり夢でも何でもなかったらしい。
　そこでようやく自分の状況に気がついた。
「…なんで、俺はここにいるんだ？」
「……帰りが遅いから」
　小さく息を吐いて、周一郎が話してくれる。
「ルトを探しに行かせました。いつものルートにいなかったから、あちこち出かけさせて…そうしたらあなたが裏路地に倒れていた」
　一瞬、周一郎は唇を引き攣らせた。大悟のことでも思い出したのか、何気ないふうを装ってサングラスをかける。
「…少し、驚きました…三輪車にでも轢かれたんですか」
「あのなあ…」

　どこの世界にいい歳をした男が三輪車に轢かれて気を失う？　そんなことをする奴は世界中探しても……ちょっと待ってくれ、今急に自信がなくなったぞ。
「…そうじゃない。誰かに後ろから殴られて」
「殴られた？」
　周一郎がオウム返しに呟く。
「前から来たサラリーマンに」
「石でも蹴り飛ばして当てたんですか」
「そんなことしてない、それに今まで見たこともない……ん？」
　何かが引っ掛かって首を傾げた。いや、違うな。あいつ、どこかで俺は見てるぞ？　どこで？　それにいつ？
　そんなに前じゃない、うん、確かにどこかで会ってる。けれど。
「…どこだった、かな……？」
「…半日、眠ってたんだよ」
　英は立ち続ける周一郎に椅子を勧め、自分も腰を降ろした。
「声をかけても全然起きないし」
「半日？」
「そう。君を運び込んだのは昨夜の十時半。今は朝の九時過ぎだ」
「そうかぁ…バイト上がりが遅かったもんなあ」
　呟いたとたん、思考の焦点が結んだ。
「そうだあいつ！　城本を殴った奴だ！」
　頭の中で場面が再現される。横断歩道を渡ってくる百合香、手を引き止める男、もがく百合香。クローズアップされる、男の胸のタジック社のマーク。
　ゆっくりと英に目を向ける。
「ああ、タジック社のマークを付けてた」
　英がにやりと凄みのある笑みを浮かべた。目を輝かせて周一郎を振り返る。視線を受けた周一郎が、視線で人を殺しそうなほどきつい表情になって、俺を見る。
「え？」
　何だ，俺がまた何かしたのか。
　ぎょっとして思わず固まると、周一郎は緩やかに目を伏せた。
「高野に朝食を持って来させます」
　そのまま俺と目を合わさず、流れるような動きでドアへ向かう。凝視しているのは気づいていたのだろう、肩越しに視線を投げて付け加える。
「今日一日は大人しくしていることですね。このうえ転倒されたら厄介ごとが増えますから」
「おい…」
　面倒そうでうっとうしそうな口調に思わず鼻白んだ。
「一応怪我人なんだぞ？　多少はいたわってくれてもバチは当たらんだろーが？」
　もちろん、周一郎は振り返ることなく部屋を出て行ってしまったが。
「…ったく、ほんとにあいつは、こういう時とことん冷たいよなあ…」
　ぶつぶつぼやいていると、英が奇妙な表情で俺を見ているのに気がついた。
「どうした？」
「…いや。不思議な繋がりだなあと思ってさ」
　苦笑する。嘲笑でもない、失笑でもない、本当に苦いものを噛み殺したような渋い笑い方で、俺と同じ性格だと言われるのに、俺には絶対決められないところを決めてくるのが、つくづくむかつく。
「何が」
「君と朝倉さん」
「俺と周一郎？」
　俺は眉を寄せた。
　頭のいい奴ってのは、どうしてこう、しゃべることには頭が悪いんだかな。持って回って、どうにでも取れる言い方をして、ほんとのところ、何を話してるのかすぐにわかったことがない。
「俺と周一郎が繋がってるって？」
　まさかなと思いつつ確認した。
　まあそりゃ、俺が一方的にあいつの首ねっこを掴まえていることが『繋がり』に入るならそうだろうが、あいつにしてみれば、どちらかというと『捕獲された』とか『引っ掛かった』とかいう感覚じゃなかろうか。特に英が来てからは、使い終わった古びたおもちゃが、箱の底に居座ってじっとこっちを見上げてる的なうんざり感が強い気がする。
「そう。それもとびっきりの、強くて優しい繋がりだよ」
　英は微妙な笑みを浮かべながら頷いた。それから、ふうう、とやたらと深い溜め息をついたかと思うと、独り言のように続けた。
「君に目をつけなくて良かった。そこは僕に先見の明があったな。手を出してたら、今頃どんな目に合わされてたやら」
　怖い怖い、さて、どれぐらい生き残るのかな。
　英はまた苦い笑みを天井へ投げ上げ、ぶるっと顔を振って立ち上がった。
「君はもう大丈夫だね？　じゃあ、朝倉さんの様子を見に行ってくるよ」
「周一郎？」
「昨日の夜から一睡もしてないしね…おっと」
　俺が顔をしかめたのに、肩を竦める。
「今度は僕のせいじゃない。君の側についてたんだから…ずっと」
「俺の？」
「心配だったんだろう。さっきだって……あっと、これは言っちゃまずいか」
　悪戯っぽい笑みを返してくる。
「僕は今あの人の部下だしね、プライドを傷つけるようなことは言えないから」
「プライド…？？」
　周一郎が俺の容態を心配してくれた。だから、側についていてくれた。

　そのどこが、周一郎のプライドに関係するんだろう。
　窓のカーテンを開け放ちに行く英を、わけがわからないまま見ていると、くるりと相手は振り返った。
「もうすぐ朝食が来る。朝倉さんが言ったことが現実化しないことはないからね」
「…朝飯に大袈裟だな」
「……そうだね、でも」
　英は大真面目に繰り返した。
「彼が言ったことが現実化しないことはないんだ」

「お〜、いて」
　頭に巻いた包帯の上から瘤の部分を摩りながら、とぼとぼとトイレから戻ってくる。ついさっき、ベッドから起きようとして再び頭をぶつけ、さすがにちょっと切れたらしく新たな手当を受ける羽目になった。ほんと、自分から進んで怪我してちゃ世話はない。
（けど）
「なんで、俺が？」
　立ち止まって、窓の外の柔らかな暗がりを見つめながら考える。窓ガラスに映った茫洋とした平凡な男が戸惑った顔で見返してくる。
　周一郎ならわかる。あいつを痛めつけたり傷つけたりするのは、朝倉家にとって、あるいは朝倉財閥にとって、脅しとなり圧力となるかもしれない。
　けれど、俺は一般苦学生だ。ぶん殴って何が得られる？
「……だよな…」
　しかも相手はただぶん殴っただけ。俺を気絶させただけ。それ以上は何もしないで放置されている。えらく中途半端じゃないか？
「…いて」
　考えを進めようとすると、ずきりと後頭部から稲妻が走って眉を寄せた。
「はいはい、スペック以上のことはしませんて」
　ぼやきながら歩き出そうとする、と部屋の前に周一郎が立っているのを見つけた。
「周…」
　声をかけかけて止める。
　様子がおかしい。
　俺が寝ているはずの部屋のドアを凝視している。片手を軽く握って上げる。当然ノックするのだろうと思えば、空中で拳を浮かせたまま動かなくなり、やがてのろのろと手を降ろす。子どもっぽい泣きそうな顔で唇を噛み、再び握った片手を上げる。が、また空中で動きを止めてぼんやりしてしまう。
　そういうことを延々と繰り返している。
「何してるんだ、あいつ…」
　そもそも俺がこっちで突っ立っているのに気づかないあたりも妙だ。
　そうこうしているうちに、ようやく決心がついたらしい。目を伏せ、コンコン、と小さくノックする。だが返答はない。じっと大人しく待っていたが、しばらくためらった後、低く優しい声で呼んだ。
「滝さん？」
「はい」
「っっ！」
　一瞬にしてドアから身を引き距離をとった周一郎は、迷いもせずに俺の方を振り返った。とたん、表情を一変させてむっつりと無愛想な声で尋ねてくる。
「いつからそこに居たんですか」
「いやついさっき」
　何となくずっと見てたと言いづらくてごまかした。
「トイレ行ってたんだ」
「そうですか」
　そっけなくて冷たい応答、けれどさっきの仕草は不安そうで頼りなげ、何かにためらっているようだったと思い出し、急ぎ足に近寄っていく。
「何か用か？」
「ええ」
「まあ入れよ」
　ドアを開けると、相手はちらりと俺の頭の包帯に目をやった。それを悟られるのを嫌がるように、すぐにサングラスを押し上げ、俺の前を擦り抜けて部屋に入る。
「…この前よりはましですね」
「レポートが少しは片付いたからな」
　そこだと決めていたように、周一郎はまっすぐソファに向かった。腰を降ろし指を組み、無言で額に押し当てる、まるで何かに祈るように。
「おい」
　不安になって声をかけた。
「気分が悪いのか？　また眠れなかったのか？」
「違います」
　即座に応じて小さく息を吐き出しながら、周一郎は後ろにもたれた。違うと言うが気分がいいようにはとても見えない。思わず近寄った勢いのまま、周一郎の額に手を載せる。びくんと相手が体を竦ませ、サングラスの向こうから妙に澄んだ瞳で俺を見つめた。
「いや、その、さ」
　いきなり触れたことを無神経だと指摘された気がして、慌てて手を離し、ぴらぴらと振りながらひきつり笑いをする。
「やっぱり気分が悪そうだから、熱でもあるのかと思ってさ」
「…」
　え。
　一瞬、驚くほど優しい笑みを返してきた、のは気のせいだったのか。

　むくりと体を起こした周一郎は、正面に腰を降ろした俺に言い渡した。
「滝さん、あなたを解雇します」
「へ？」
　カイコ？　カイコって…いや、これは前にもやった。
「どういう意味だよ」
「馘ということです」
　涼やかな瞳は揺らがない。
「んなこたわかってる！」
　つい声を荒げた。
「理由は?!」
　当家の家風などと言い出したら，今度こそ首ねっこ掴まえて揺さぶってやる。
「足手まといです」
　あっさり言い放たれて意気込みが挫けた。
「…足手まとい…」
「僕が英と組んでやっていることはわかっていますか？」
「あ、ああ」
　サングラスの向こうの表情を読み取ろうと苦労したが、完全無表情、俺を認識している気配さえない。
「英、くん、から聞いたところじゃ、海部運輸ルートの乗っ取りをやってるってことだろ」
「そうです。こういう仕事は『きれいごと』では済まない」
　淡々と周一郎は続ける。
「だからタジック社の協力、つまり英京悟の力を借りることにしたんです。彼は予想以上に優秀でしたし、『吸収』は九十五％近くまで終っています」
「うん」
　ここまでは俺も立ち聞きして知っている。
「残り五％は今週中に終える予定ですが、ここでタジック社から条件が出されました。最後の詰めに至るまで、アドバイザーとはいえ部外者が内情を知っているのは好ましくない、もしあなたを関わらせ続けるのなら、タジック社は協力を控えたい、と」
　周一郎は僅かに肩を竦めて見せた。
「僕はここまで詰めた仕事を台無しにするつもりはありません」
「…だから、俺に出て行け、って？」
　周一郎は黙ったままだ。
「俺をぶん殴った奴は？　城本のことは？　城本は、英をお前に近づけるためにタジック社から派遣されてたって言ってたぞ」
　ぴくっと周一郎の指先が動いた。その指先を奇妙な生物のように眺めながら、周一郎は微かに唇の片端を上げた。
「僕と英をうまく組ませるためでしょう。それ以上は滝さんが知る必要はありません」
　味もそっけもない言い方、思わずことばが詰まる。
　言われてみりゃ、確かにそうだ。周一郎の仕事がうまくいこーがいこまいが、城本がそれに一枚噛んでよーがいよまいが、今の俺には何の関係もない……俺のこだわりは別として。
「あなたが殴られたのは、朝倉家とタジック社の提携を望んでいない少数分子の嫌がらせでしょう。僕にとってはたいして意味がないことですが」
　意味がない。ほう、そうか、意味がないのか。
「城本は妊娠してないと言ってたぞ」
　未練がましく食い下がる。
「じゃあ、お前と城本の関係って何だよ」
「城本百合香は、そんな風に話したんですか、あなたに」
　あなたは一体どこまで人の心に入ってくるんだろう。
「へ？」
「いえ」
　思わず零れたことばを俺が聞きとがめるより早く、周一郎はさらりと首を振った。
「彼女はきっとあなたを騙していることを知られたくなかったんでしょう。……僕は、あなたに黙っていることを条件に協力を得ましたから」
「おい、待てよ、つーと何か、城本の気持ちを」
　悲しげな百合香の目が過って胸が痛んだ。
「利用したのか？」
「……きれいごとじゃない、と言ったでしょう」
「けど！」
　百合香はあれほど悲しそうだった。芝居だ、みんな嘘だと告白した百合香の切ない顔を思い出す。
「どうしてそんなことをする必要があった？　お前はタジック社と協力関係にあるんだろう？　コンビをうまくいかせるためとはいえ、ちょっと大袈裟すぎるだろ」
「まるっきり抜けてるわけじゃないんですね、あいかわらず」
　ぼそりと周一郎は呟いた。
「…仕方ないな。…僕の狙いは海部運輸にあるんじゃない」
「え？」
「僕が狙っているのはタジック社と英京悟です」
　俺は口を開いた。何か言おうとしたのだが、何を言えばいいのかわからなくなる。
「海部運輸攻略はタジック社を釣る餌です。協力を持ち出してからこっち、タジック社にできる隙、それを僕は狙っている」
「…おい…」
「あちらも同じですよ」
　周一郎は冷笑した。
「たぶん英も、朝倉財閥の一欠片ぐらい呑み込むつもりで来ています」

　閃光のようにいろいろなことが繋がった。あれほど執拗に百合香まで使って英と周一郎を組ませようとしたのは、単に朝倉財閥との関係を保つためではなくて、タジック社がその一部を喰いちぎろうとしていたからだ。
「ええ、そのとおりです」
　俺の顔を見て、周一郎は頷いた。
「あの事故も英と僕を結び合わせるためだろうし、城本さんを使ってあなたを引き離したのも、英と僕の距離を縮めておくためでしょう」
「そこまでわかっているのに、どうして英を使う？」
　危険で安心できない相棒、隙あらば喉笛を噛み切ろうとする相手をどうして命を左右できるような場所に置いておくのか。
「言ったでしょう？　海部運輸攻略には実に有能でしたし、僕個人としても、英がこれからどう動いてくるのか、興味がある」
　くすりと嗤った声をすぐに翻して、周一郎は静かに吐いた。
「僕は、こういう人間なんです」
　サングラスの向こうから挑戦するように射抜いてきた視線が、ふっと和らぎ弱まった。脆くて優しい何かが一瞬顔を掠める。が、すぐにそれは消え去って，元の通り淡々とした口調で周一郎は言い放った。
「…こういう状態では、あなたが足手まといだというのは判って頂けますね？」
　俺は周一郎を見返し、悟った。
　こいつはこれ以上しゃべらない。
　何を尋ねても、どれだけ懇願しても、この線までしか話さない。
　くっきり引かれたラインのあちら側に居るのは、俺ではなくて英だ。
「…わかった」
　溜め息と一緒に吐き出した。
　英とこいつは同じ世界で生きている。周一郎に何かあっても、支え方を俺は知らない。役に立たない俺はお呼びじゃない。
　もちろん、腹は立ってる。人を床の間の置物よろしく鎮座させて眺めるだけ、自分の不安も心配も明かしてこない預けてこない。そんなこんなで助けられるわけも関われるわけもなかろうに。
　けれど、むかつきを吐き出すには、英に対する敗北感が強過ぎたし、がっかりした思いの方が大きかった。
（俺は、結局こいつを守り切れないんだな）
　周一郎が素直じゃないのも当然、安心できない相手に心を許すはずもない。
「今度ばかりはお由宇の見当違いだったな」
　ぼやきながら立ち上がる。驚いた顔で周一郎が目で追ってくるのに、苦笑いしながら答えた。
「今夜出てくよ」
「滝さん！」
「そこまで言われたら、あんまり長く居るのもな」
　未練がましいし不格好だし。
「でも、だって、怪我…」
　不安そうに周一郎が呟いて、さすがにかちんとした。
「あのなあ！　俺にだってプライドはあるんだ……金ピカじゃないけど」
　第一、出て行けっつったのはお前だろうが。
　続けたくなった恨み言を呑み込んで、ボストンバッグを引っ張り出す。数枚の服を放り込み、コートを持ち、教科書他の細々したものを紙袋に入れると、荷物がすっかりまとまった。
「でも、滝さん、今夜は」
「お由宇の所にでも転がり込む」
　もう忘れものはないな、と部屋の中を見回す。
　いつもこんな感じだよな。落ち着いたと思ったら、出て行く羽目になる。
　ただ、今回はそうじゃないと思ってたんだが。
　溜め息を噛み殺して、荷物を持ったまま、ドアの所で振り返る。
　周一郎は立ち上がったまま凍りついていた。急な展開に気持ちもことばもついていかない、そんな表情だったが、単にうまく行き過ぎてほっとしていただけかもしれない。それさえもう読み取れなくて、無視して背中を向けた。
「じゃな。仕事がうまく行くよう祈ってる」
　ちらりと振り向いた目に、サングラスを透かして周一郎の瞳が見えた。黒く深く感情の読めない虚ろな瞳。
　その目に安心を浮かべてやりたかった。
　けれど俺にはできなかった。
　ただそれだけのことだ。
「…」
　無言の相手に軽く手を振り、部屋を出る。周一郎が追いかけてくることもないまま、数十分後には朝倉家の巨大な門扉を抜けていた。
「…なぁん」
「お、ルト」
　門の内側にルトが座っていた。小首を傾げ、口を開く。
「にゃう？」
　行くのか？
　そう聞こえた。
「行くよ、悪いな。見送ってくれるのか」
　瞳を見返すと、その後ろから周一郎が見つめ返した気がした。
「世話になったな、周一郎」
　呼びかけた。
「じゃ、な」
　閉まる扉の向こうで、にぃん、とルトがか細く鳴いた。

「…志郎？」

「んー？」
「わかってるとは思うけど」
　お由宇がのんびりと続けた。
「それ、お醤油よ？」「げ」
　ぎょっとして我に返り、醤油塗れで黒くなったベーコンエッグにうろたえる。
「わっわっ」
「自分でやったんだから、自分で食べてね」
「はい……すまん、飯もう少しくれ」
「はい」
　追加された白飯を醤油漬けのベーコンエッグに入れ、ぐちゃぐちゃかき混ぜつつ溜め息をつく。
　お由宇がくすりと笑った。
「？」
「そんなに気になるんなら、飛び出してこなきゃよかったのに」
　思わず固まった。
「わかるわよ、あからさまだもの」
　お由宇が食後のコーヒーを楽しみながら目を細める。
「昨日が洗濯機に靴も一緒に入れて回したでしょ。一昨日はカレーにドレッシングかけてたし、その前は本棚を倒して、片付けてくれたけど全部逆さまに入れたわよね」
「…はい、その通りですごめんなさい」
　小さくなって謝った。
　自分でもここ数日間のドジはひどい有様で、まずいとは思いつつもどうにも『改善』に気が回らない。
「様子を見てきたいんでしょ？」
「お、俺はっ」
　反論しかけて、心得顔に笑っているお由宇に覇気がしぼむ。
「…行けるわけねえだろ」
　唸った。
「せっかくカッコよく出てきたんだぞ？　おまけにあいつは俺が邪魔だって言うんだぞ？　恩も忘れて」
　言い放ってしまってから、そりゃ恩なんて言うほど大層なものじゃなかったけれど、ドイツであいつを助けたのは確かに俺だし、それ以外でも多少は役に立ったこともあるはずで、と付け加える。
　もうちょっと言い方ってものがあるだろうに。たとえば、今いろいろややこしくなってきたから、ちょっと距離を置きたいとか。ごたごたしてるから、できれば数日家を空けてほしいとか……倦怠期の恋人か。
「ううう」
　どう考えても俺の方がこだわりすぎだとわかっている。
　周一郎だって小さな子どもじゃあるまいし、ましてや朝倉財閥を統轄しているのは事実上あいつだし、俺の人生経験値より遥かに遥かにあいつの方が上だし。
　朝倉家を出てから、既に四日。
　その後、周一郎からのアクションは一切ない。
「……けど…ちょっと、何か変だったんだよなあ…」
　かき混ぜたベーコン卵入り醤油ご飯をもぐもぐしながら、考え込む。
「妙に印象がちぐはぐで……」
　周一郎の顔を思い返す。英をパートナーとして選び、俺を放置するというか遠ざける動きをしながら、繰り返し繰り返し俺に近づいてくる。猫の目のようにくるくる雰囲気が入れ替わる、嘲り、突っ張り、冷淡、ためらい、不安、優しさ、はねつけ、寂しさ、虚ろさ……そして、硬直。
「…何だろうなあ……」
　ぶん殴られて倒れていた間に聞こえた不安そうな頼りなげな声。滝さん、滝さん。繰り返し呼ぶ声に行かないでくれと聞いたのは、俺の独りよがりだったのか。俺の部屋では眠れたと話した不思議そうな顔、ノックをしかけてためらっていた部屋の前のしょんぼりした背中、それらまで芝居とはどうしても思えない俺は、やっぱりどこまでいっても甘いだけなのか。
　けれど。
　けれど、なあ。
「ええいくそ！」
　醤油浸しトマトのびちゃびちゃの最後の一滴まで口に放り込み、茶を呑み下してごちそうさまと手を合わせ、ソファの上にひっくり返った、そのとたん、
　リリンッ、リリリリリンッ！
「うわっ…ひえっ！」
　跳ね起きて、ソファから転げ落ちる。
「はい、佐野でございます……ああ」
　受話器を取ったお由宇の目が光った。
「そう、動いたの。わかったわ、二十分後にそっちへ行く」
「何だ？」
　のそのそと床から体を起こすと、お由宇が微笑んで尋ねてきた。
「網にかかったらしいけど、一緒に行く？」

「網って何だ？」
「あなたの話を聞いて引っ掛かるところがあったから、知り合いに調べてもらったのよ」
「引っ掛かるところ？」
「もっとも、あなたと違って、周一郎の態度じゃなくて仕事の方だけど」
「仕事？」
　ますますわからなくなって、お由宇の後ろを追いかけながら首を傾げる。
「英の件の種明かしはしただろ？」
「さあね」
「さあね？」

　謎めいた笑みになぞなぞのような返答を添えて、お由宇は先に立ってカフェに入っていった。ざわめく店内、片隅の奥まった席に人目を惹く男が一人座っていて、陽気な顔で手を振ってくる。
「二十分ぴったりだね」
　にこりと笑ってお由宇が頷き、そいつの前に腰を降ろす。慌てて隣に腰を降ろすと、男は訝しげな顔で俺を見つめ、親指を立ててくいと俺を示しながら尋ねた。
「誰、この人」
「滝志郎君。知ってるでしょ？」
「へえ…この人がねえ」
「…どうも」
　ぺこりと頭を下げた俺に、男は無遠慮な口調で続けた。
「どこにそれほどの価値があるんだい？」
「付き合ってみればわかるわよ」
　あっさり流して、お由宇は微笑を返した。
「誰でも彼に巡り逢いたがるんだろうとわかるわ。たとえ、ただの芝居であっても」
「城本百合香か」
　突然知り合いの名前が出て来て、思わず相手を見直した。どうやらいつの間にか本題に入ってしまっていたらしい。
「彼女はどちら？」
「タジックB。つまり、英反発派だな」
　ふてぶてしい表情で言い放った男は、煙草をくわえる。
「英との関連は？」
「タジックAとBはタジック内での均衡勢力だ。ま、少なくとも今まではそうだった」
　お由宇の質問に、男は眠そうに答えた。わかりきったことを聞くなよ。そういう視線を向けてくる。
「ところが、今回はタジック全体の意向で、英を尖兵として送り込んだ。これにはAもBも協力していたし、Bも城本にその意向に沿って動くように指示している。だから、表向きには、タジックは英の手腕による『吸収』を狙っている図式だ」
「裏の方は？」
「おっと、相手を考えてくれよ」
　男は気障なポーズで肩を竦めた。
「ここまで探るのも、並の奴には大変だと思うけど？」
「わかってるわ」
　お由宇はくすりと笑ったが、男の愚痴には取り合わなかった。
「だから、あなたに頼んだんでしょ？」
「…そういうことだな、ま」
　男は軽く溜め息をついた。
「だが、正直言って、オレにも裏までは掴み切れてなくてね。ただ、『貴公子』が動いた」
「え？」
「それもタジック吸収の方に、だ。おかしなことに英が阻止しようとしない」
　男はきらりと冷たい光を瞳に走らせた。
「単に『貴公子』の逆襲と見てもいいわけだが」
「じゃ、ないわね」
　お由宇は意味ありげに俺に視線を向け、付け加えた。
「たぶん」
　ゆっくりと立ち上がる。
「お由宇？」
「行きましょ、志郎。話は終わりよ」
「またね、『お嬢さん』」
　とぼけた口調で応じて、男は朗らかに手を振った。思わず俺が手を振り返すと、男は吹き出し腹を抱えてげらげら笑い出した。
「すっげえ、天然っ！」
「おい」「はいはい、行きましょ、志郎」
　カフェを出るまで続いている馬鹿笑いに顔をしかめる。
「ちぇっ」
「むくれないむくれない。いいこと聞けたじゃない」
「何なんだ、あいつ？」
「古くからの知り合い。言い方を変えればトップ屋、パパラッチ、ゴシップ売り」
　横目で俺を見ながら微笑む。
「この世界の人間にしては純情な人よ」
「あれで？」
「そう、あれで」
「……いいことって何だよ」
　納得できないまま、質問を変えた。自慢じゃないが、さっきの会話は俺には宇宙人のテレパシー通信並みに意味が不明だ。
「周一郎は罠を仕掛けたらしいわ。たぶん、英も組む気ね」
「へ？」
「タジック社は、今内部で二つに分かれてるの。英のやり方に反発していたのが城本さんのいたタジックB。でも、今回の朝倉財閥への協力を表向きの理由に、実は朝倉財閥を狙うため、二つの派閥が手を組んだ。周一郎には英が近づき、あなたには城本さんが近づく、そういうことになったみたいね」
　整然と語られて、ようやく納得した。そうとも、こういう風に話してくれりゃ、俺の頭がポップコーンでもわかるぞ。
「で、その裏にもう一つ裏があったという話」
「へ…うわっ」

　思わず前につんのめり、転がりかけて電柱にしがみつく。
「また、うらあ？」
「これぐらいで騒がないで。周一郎の考えていることは，裏の意図のもう一つ裏になるはずだから」
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
　電柱を押し出しながら何とか立ち直る。
「頭に引き出しを作る時間をくれ」
「後で整理して」
　お由宇は無慈悲に却下した。
「つまり、タジック社が朝倉財閥を狙った裏には、英の別の意図があったはず」
「別の意図？」
「英の性格と経歴から考えて、朝倉周一郎に対する作戦の甘さに納得するとは思えないし、以前からタジック社の掌握を狙っていた気配もあるから、真の意図はおそらく、タジック社乗っ取り」
「のっ?!」
　おいおいおい。
　つまり何だ？　タジック社は周一郎に協力を申し出るふりをして、朝倉財閥を乗っ取るつもりで、そのために派遣された英は、会社の命に従ったふりをして、その実タジック社を乗っ取っちまうつもりだったって？？
　脳裏にいつぞやの英と周一郎の会話が甦った。訳がわからないまま固まっていたのが、片隅から溶け出してじんわりと浮かび上がってくる。
『その裏の狙いはまだ健在だと思うが？』
「でも、お由宇…周一郎はそれも知ってたみたいだぞ」
「でしょうね」
　驚きもせずにお由宇は続ける。
「でなきゃ、わざわざ英をパートナーに仕立て上げてタジック社の朝倉財閥乗っ取りがうまく行きそうに見せないわ。周一郎は英の意図を知っていて、それを逆に利用してタジック社を狙おうというのじゃないかしら」
「は…あ…さいですか…」
　どうやったらそこまで頭が回るんだ？　そんなことを思いつく周一郎も周一郎だし、それを幾つかの情報と俺の散文的報告で推理してみせるお由宇もお由宇だ。
「あ、それでか！」
　ようやく俺にも閃きの神様が落ちて来てくれたらしい。
「俺を放り出したのも、俺が残ってると英があいつのパートナーになったとタジック社に思わせられないってわけか！」
「そうね」
　お由宇は一瞬妙な表情になった。
「周一郎の、タジック社に対する罠の一つとも言えるけど…」
「けど？　なんだ？」
　ふ、とお由宇は笑った。
　いつの間にか、もう彼女の家の前に来ていた。中へ入りながら、お由宇は不思議に甘い笑みを見せて、優しい声で尋ねた。
「周一郎がタジック社を狙おうと考えたのはどうしてだと思う？」
「どうしてって……狙われたからだろ？　目に目を、牙には牙をって」
「歯には歯でしょ」
　溜め息さえもどこか柔らかい。
「周一郎は一か八かの勝負をするほど無謀な人間じゃないわ…『あること』について以外にはね」
「『あること』？」
　首を傾げる。
　慎重な周一郎がただ一つ、無茶を承知で動くことがある？　一体何だろう？　女、じゃないだろうし、仕事、も違うだろうな。俺には全く想像できない。
「一体何だよ」
「たまには自分で考えなさい、志郎」
　小学生を諭すように頷いたお由宇は、そのまま台所の方へ消えていった。

6.綾

　たとえば、この世の中なんていうものは、結局は産まれてから死ぬまでのほんの一瞬を、誰かの手に操られながらもがくしかない一つの舞台で、そこにいる俺達は台本通りのさえない演技しかやれない役者なのかも知れない。映画のスクリーンに映っている人間がその通りに人生を生きることがないように、そして、その物語が、言ってみれば全て虚像ででっちあげの一種でしかないように、この世の中なんてのも、どこまでいっても虚ろさしか返ってこないのかも知れない。
「志郎」
　ぼんやりソファで考え込んでいた俺に、お由宇が夕刊を放ってよこした。
「？」
「第一面よ」
　表向けると、そこにでかでかと『タジック社、内部分裂？』の白ヌキ見出しがあった。ぎくりとして小見出しを見ると『新社長は英京悟氏』とある。
　中身を読み進むと、タジック社の現状から始まって、ここに至ったきっかけのロボットによる殺人事件と前社長の処理のまずさ杜撰さが明らかに語られ、それどころか、事件をもみ消そうとした会社側の裏工作までほのめかされ、対して英がどれほど正当な手法で社会責任を果たそうとしたか、朝倉財閥が英にどれほど協力を惜しまなかったかまで、俺にさえわかる明瞭さで描かれていた。
　終わりに、英率いる新日本タジック社は、かつての本社が果たすべきだったコンプライアンスにも心を砕き、諸外国との貿易に関しても充実した対応を保持し、日本を代表する企業として発展していく所存であると、高らかに謳われている。
　公器であるはずの新聞が、新日本タジック社の提灯持ちさながらの記事を並べるのは十分不審だが、それでも論点には穴がない。
　正義という名の下、堂々白日の中の『乗っ取り』、それはかつて朝倉財閥が周一郎に引き継がれた構造に、恐ろしいほど似ている。
「朝倉財閥は、英京悟の新日本タジック社を全面的にバックアップすると表明したわ。事実上、新日本タジック社を朝倉財閥の傘下に入れる意図があると業界は見ているけれど、私はそうは思わない」
　お由宇は俺の前に腰を降ろした。セミロングの髪を掻きあげる。
「今回の周一郎の狙いはかなり個人的なものよ。だからこそ、これだけ派手なやり方でタジック本社を叩いたんだから」
　鬱憤ばらし、いいえ八つ当たりと言ってもいいかもね、と呟く。
「それだ！」
　きょとんとした顔で見返すお由宇に続けた。
「あいつも個人的な恨みがどうとか言ってたぞ！」
「それで？」
「何のことかって尋ねたら『あなたです』って言われた」
　俺が何かへましたのか、と気になっていたところだった。
「…そう」
　お由宇はふんわりと甘く笑った。
「周一郎にしては一大進歩ね」
「は？」
「本音を言ったわけでしょ？　あなたに」
「いや、今までもあったぞ、そういうツッコミは」
　思わず鼻白む。
「俺が事件を大きくしてるとか来なくて良い時に来るとかしなくていいことをしてややこしくするとか」
「…そうじゃなくて」
「そうじゃなくて？」
「つまりね、今回の展開は……」
　言いかけたお由宇が妙な顔でことばを切る。
「今回の展開は？」
「……解説するのも癪ね」
「しゃく？」
　いや、だからな、俺が知りたいのはだな。
　質問を重ねようとする俺に、お由宇が今度はあからさまに視線を逸らせた。
「話してもいいけど、現在五時五分二十三秒、二十四、二十五、二十六…」
「っ、行ってくるっ！」
　バイトの時間を忘れ切っていた。慌てて立ち上がり、お由宇の家を飛び出す。
　これ以上時給が減らされたら、もろにおまんまの食い上げになっちまう。今だって、お由宇に食費を払い込むのに精一杯で、宮田に借りた金も返せなきゃ、下宿を探す暇さえありゃしない。
　愚痴を聞いていたかのように、薄曇りになっていた空がみるみる重さを増して、ついにはポツ、ポツと音をたてて雨粒が落ちてくる。
「おいおいっ」
　思わず舌打ちして走り出す。
　きっと神様という奴は俺に何か恨みがあるに違いない。いたいけな人間をいじめる神様なんてあるはずがないから、天上に居た頃から俺は問題児だったんだろう。
「…滝くん…」
「へ…うわっ！」
　走り過ぎかけた路地からふいに呼びかけられ、体を捻った。誰かが居ると気づいて振り向こうとした矢先、道に放ってあったのだろう、コンビニのナイロン袋を踏みつけて滑り、ひっくり返って尻餅をつく。
「っ、てええっ！」
　雨はすぐに激しさを増した。さっさと起き上がって屋根のある所へ駆け込まないと、再びトレパン生活だ。に

しても、一体誰が、と路地を透かすと、
「城本？」
　壁に寄り添い縋るように頼りなく、百合香がひっそりと立っていた。既にぐっしょり濡れていて、肩で息をしている。空気が急に冷えたせいか、路地が暗過ぎたのか、荒い息が薄白く見えた。
「よかった…間に合って…」
「…どうしたんだよ！」
　出来る限り急いで跳ね起き、走り寄った。叱りつけられたみたいに身を竦める相手に、慌てて声を和らげる。
「あ、あ、怒ってるんじゃないんだ、一体どうしてこんなところに」
「どうしても……滝くんに言っておきたいことがあったの…」
　弱々しく笑った唇が震える。俺に手を伸ばして何か言いかけたが、突然顔を歪め、下腹を押えて崩れた。
「城本！」
「お腹…赤ちゃん…が…っ」
「赤ん坊?!」
　一瞬、また芝居かと思ったが、百合香の様子はただ事じゃなかった。蒼白になった顔に消えそうな笑みを浮かべ、涙ぐみながら俺を見上げる。
「滝…くん…」
「待ってろっ、今救急車呼ぶから！」
　少し離れた電話ボックスを見つけ、俺は走り出した。

「滝くん…」
「苦しいか？」
　救急車が揺れるたびに、百合香は眉をしかめて俺を見上げた。救急隊員が難しい顔でモニターを見つめている。腹を抱えるように当てた彼女の薄い掌は、微かに震えながら必死にその拍動を確かめているようだ。
「本当に妊娠してたのか」
　力なく百合香は頷いた。
「……上司だったの……高校を出て……初めて…好きになって…」
　消え入りそうな声だった。
「赤ちゃんができて……それを利用しろって言われたとき…捨てられるなってわかった……でも……嫌いに…なりきれなくて……だって」
　瞬きする瞳から涙が溢れ落ちる。
「父親なんだもの……この子の……たった一人の…」
　救急隊員がちらりと何か言いたげに俺を見やり、またモニターを眺める。脈拍は乱れて間隔が伸びたり縮んだりしていた。安定しない母親の体が、未熟な赤ん坊にどんな影響を与えるか、いくら抜けてる俺にだってわかる。
「…どうして……嘘だなんて」
「滝くん…」
　百合香は痛々しい笑みを浮かべた。
「…本当に…結婚してくれる気だった……でしょ……それが……なんか……たまらなく…なって…変ね……おかしいわよね……そんなこと……計算ずくで……近づいたのに…」
「ちょっと器械をつけますよ」
　穏やかな声で割って入って、救急隊員が百合香のもう片方の手にモニターを着け直す。同時に酸素マスクの準備を始めて、容態が安定していないことがわかった。
「……おまえを殴った奴がいた」
「……あれも……お芝居よ…」
　百合香は微かに笑った。
「あなたの……気を惹くためのお芝居……いつか……朝倉家の前で……周一郎に…顔を見られたから…てっきりばれたと……思ってた……やっぱり……ばれちゃった……っ」
　ふいに百合香はことばをとぎらせて息を呑んだ。苦しそうに手を握りしめる。涙が零れ落ちる。堪えるように動かなかったが、やがて震わせながら何かを探す手に、俺はそっと手を差し出した。掴んだ俺の手を、小さな子どもが親に縋るように必死に握りしめ、百合香は薄く目を開ける。
「……あなたなら……良かったのに……好きな人が……あなただったら…よかったのに……っ」
　声の切なさが苦しくて、胸が詰まって、俺はようよう声を返した。
「城本…っ」
「…あなたの優しさが……ほしくて……でも……それがたまらなかった……自分が変わってしまったのが……かなしくて……あの中学の頃に……戻れたらって……気がついたら思ってるのが……たまらなくて……」
　脳裏に中学の時の百合香が甦る。
　弾けるような笑顔の、優しい声の、クラスで飛び切りの可愛い百合香と、ドジで冴えなくて、彼女に声をかけることさえうまくできなかった俺。
　百合香は幸せになっていたはずだった、かっこいいできた男と結ばれて、明るい家庭を作っていて、まだ独り身の俺に苦笑する、そんなお定まりの再会場面になるはずだった。
　どこでどうして、何が食い違って、俺と百合香はこんな出逢い方をしなくちゃならなかったんだろう。
「…お芝居だと……言い聞かせてたの…」
　白くなってくる唇で、百合香は喘ぎながら囁いた。
「あなたと…付き合うのは……いつものようにお芝居なんだって……今までも…そうだったから……これも…一つのお芝居なんだって……」
「マスクをつけるよ？」
　救急隊員が酸素を流し始める。モニターを見やり、数値を書き込み、運転席に居た隊員と慌ただしくやり取りする。受け入れがどうとか担当医師がとかことばが飛び交う。
　緊迫感を増す車の中で、百合香は夢見るように話し続ける。
「でも……ほんの少し……あなたに…本気になってみようって……思って……思って……」
「あまりしゃべらないで、少し静かに寝ていようか」
　じろりと俺を睨みながら、隊員は百合香は話しかける。

「でも…だめだわ…」
　百合香は聞いていなかった。マスクの中で籠る声に嘲りが加わった。
「ずっと……お芝居……みんなお芝居……私は…お芝居の中でしか……生きられない……仮面を…つけて……嘘だけ……話して……でも……みんなそう……みんな……人間なんて……騙し合って……生きてる……」
　氷のように冷ややかな声で言い放った。
「……誰も……彼も……にこやかに……人を…傷つけてく…」
　必死に腹を庇っていた手からふいに力が抜けた。同時にブレーキ音が響き、
「降りて！」
「わ、はいっ」
　後部が開いた車から飛び降りた俺を押しのけて、百合香を乗せた担架が降ろされ、一気に病院へ運び込まれる。飛び出してきた看護師と医師が駆け寄りながら素早く話し合い、救急隊員から状況を聞き取っている。
「滝くん…」
「ここにいる！」
　慌ててストレッチャーに追いつきながら応じると、あっという間に処置室へ運び込まれながら、百合香が小さく呟いた。
「たて…さき……さんが…」
「え？」
「そちらでお待ち下さい、よろしいですね？」
「あ、あの俺は…」
　ばたん。
　俺の声は閉められたドアに虚しく跳ね返ってきただけだった。

「おはよ…」
「おはよう、志郎」
　台所からお由宇の柔らかな声が響いた。俺が起きてくるのを見越していたのか、テーブルの上に湯気をたてるコーヒーが用意されていた。
「けど、もう夕方に近いわよ」
「ん…」
　頷きながら昨日のことを思い出す。
　百合香の子どもは結局だめだった。医師は過激な運動と精神的なストレスが原因だろうと話していた。
　昏々と眠り続けていた百合香の青白い顔が妙に幼く、傷みを伴って甦ってくる。あまりにも印象が強烈だったせいか、夢で百合香の囁きが闇の中から繰り返し聞こえていた。
『ずっと……お芝居……みんなお芝居……私は…お芝居の中でしか……生きられない……仮面を…つけて……嘘だけ……話して……でも……みんなそう……みんな……人間なんて……騙し合って……生きてる……』
　でも、城本、と考えながらコーヒーに手を伸ばす。芳香が立ちのぼり、心の微かな傷みを慰める。
　でも、城本。
　俺にはその後が続けられなかった。心の奥にもやもやした塊があって、言いたいことはわかっているのに、うまく言い表せなかった。
　だけど俺は、何か城本に応えてやれることばを持っているはずだった。
　みんな芝居だと言ったよな、城本。結局騙し合って生きてるんだと。でも、城本。
　でも、城本。
　リリリリンッ。
　ベルの音が二度目を鳴らす前に、淡い色のサマーセーターのお由宇が受話器を取る。
「は…高野さん？」
「…高野？」
　ごろりと嫌な感覚が腹のあたりで動いた。空腹のせいだったかもしれないが、続いたお由宇のことばが予感を裏付けた。
「あなたに用らしいわ」
「俺？」
　じわじわと広がる不愉快な波。
「はい、滝です」
『滝様』
　緊張した高野が焦りを含んで響いた。
『坊っちゃまをご存知ないでしょうか』
「何？」
『坊ちゃまが昨日からお戻りになっておられません。もしや、あなたの所においでででは…』
「来てないぞ、ってか、どうしてあいつがいないと俺の所に居ることになってる？」
『他に行かれる所が思いつきませんので』
　なぜそんなことを尋ねるのかと不審がる声に、不謹慎ながらにやりとした。が、すぐにお人好しそうな笑顔を思い出す。
「英は？」
『お仕事を済ませられたとのことで、二日前、お帰りになられました』
「帰ったぁ?!」
　思わず素っ頓狂な叫びを上げてしまった。コーヒーを飲みながら面白そうに俺を見つめているお由宇を見返す。
「どうしてだよ、あいつは周一郎とずっとコンビを組むことになってるんだろ？」
『私は伺っておりませんが』
　訝しげな声が返ってきて、首を傾げた。
　どういうことだ？　なら、周一郎はどういうつもりで俺を放り出したんだ？
『そんなことより、坊っちゃまがそちらにいらっしゃらないのなら、行き先をご存知ではないでしょうか』
「知らんよ。大体いつ、どうして、あいつは家を出たんだ？」
　一人で動く人間ではないだろう、運転手も居て、使っている人間も居る。あの屋敷から玄関を黙って通り抜け

ることもあり得ない。
『いえそれが……昨日坊っちゃまにお電話がありまして。呼び出されたからとおっしゃって出て行かれたので、てっきり滝様だとほっとしてお見送りしまして』
　一瞬は安堵を滲ませた高野の声が不安を帯びる。
「俺は電話なんかかけてない」
　それどころじゃない、昨日から百合香のことでてんやわんやで…。
「！」
　ぎくりとした。百合香のことばが甦る。
『たて…さき……さんが…』
　立崎さんが。
　そういう意味だよな？
　立崎さんが、どうしたんだろう。あんな苦しい状態で、それでも百合香が俺に会いにやってきたのは、自分は馬鹿だったとか全てはお芝居だったとか、そういう告白のためだろうか。それとも、彼女の知っている『立崎』が、何かをしようとしていると警告するためだろうか。
　それを百合香は俺に伝えなくてはならなかった、どうしても。
　背筋を冷たいものが滑り落ちる感覚があった。
『滝様？　滝様、あの』
「お由宇！　英の連絡先を教えろ！」
　呼び続ける受話器を放り出して、お由宇を振り向く。
「どうしたの？」
「周一郎がやられた！　くそっ、タジック社の奴！」
「ちょっと待って」
　お由宇が立ち上がって隣室へ姿を消すのに受話器を拾い上げる。
『滝様！　どうなさったんですか、滝さ…』
「聞こえてるよ」
　苛々しながら唸る。
「周一郎は一人で出てったのか」
『はい、ですからてっきり、あなただとばかり…』
「俺じゃない。第一、俺が呼び出してどうして周一郎が応じなくちゃならない？」
『あなたは坊っちゃまの無二の友人でいらっしゃいますから』
「…は？」
　呆気にとられて瞬きする。
　むにの友人。
　ムニエルの友人…ちがうちがう。
「俺が、無二、の友人？？」
『私は坊っちゃまが屋敷に来られたときより存じて上げておりますが、あなたほど坊っちゃまが気にかけられた方はおられませんでした』
　今そんなことを話している場合じゃないだろう。
　そういうツッコミが頭の奥を流れていくが、口は勝手に疑問を連ねた。
「周一郎が俺を気にかけている？？？」
　怜悧な視線、凍り付いた表情、ひんやりした態度に突き放した物言い。
　最初からもちろんそんな奴ではあったけど、英が関わってきてからは距離が開くばかりじゃなかったのか。
『今回、滝様を解雇されるとき、最初の頃よりもなおお悩みでした。佐野様がいらっしゃるので心配はしないと話されつつ、本当に大丈夫だろうかと私にまで零されておりました』
　あいつが？　高野にまでそんなことを吐き出した？？
「志郎！」
　お由宇の声に振り返る。
「連絡先。直通だからすぐに繋がるはずよ」
「わかった！」
　ひったくるように差し出されたメモを取る。
「高野、俺も当たってみるから、そっちも引き続き探しててくれ！」
『わかりました。よろしくお願いいたします』
　受話器を叩きつけボタンを押し掛け、受話器を上げていないことに気づき、慌てて受話器を取り上げ再び一連の番号を押す。
「少しは落ち着いたら」
「俺もそうしたい」
　言い返す。
　ほんとそうだ、いつもそうなんだ、もうちょっとこういう時に落ち着いて、いろいろきっぱりはっきりやれたら、ほんと人生どれだけ楽だったか。
　けれど、できない。
　できないまま、いつも、俺は。
　呼び出し音に耳を澄ませる。
『はい、こちら新日本タジック…』
「ばかやろうっ！」
「?!」
　繋がった瞬間に怒鳴りつけ、相手が黙り込んだ。
「パートナーのくせして何やってる！」
『ちょ…ちょっと待って、滝くんかい？』
「俺じゃ悪いか！」
　俺だって電話ぐらい掛けられるぞ。
『悪くはないけど。一体何だい、久しぶりだね、っていうか、君どうしてこの番号を』
「周一郎が消えた」

『…』
「昨日電話で呼び出されて一人で出かけてまだ帰ってない。連絡もつかない」
『…彼が…？』
　英は考え込んだ声で応じた。
「お前、立崎って知ってるか？」
『立崎三郎なら、タジック社の前社長派の人間だよ』
「そいつかも知れない」
『…どういうこと？』
　乾いてくる喉に無理矢理唾を呑み込み、出来る限り手短かに百合香のことを話す。当たって欲しくなかったのに、
『あり得るな』
　英は冷たい声で応じた。
『彼は僕らのバックアップを申し出た。それどころか、本社の不正摘発にも力を貸すと表明した。朝倉財閥の力は誰だって知っている。余計なことを探り出される前にと動いたのが居ても不思議じゃない』
「落ち着いてるなよ！」
　滲む冷や汗を拭いながら喚く。
「周一郎が殺されてからじゃ遅いんだぞ！」
　そうだあいつが殺されちまったら、ルトが捨て猫になっちまうじゃないか。いや違う、違うぞ、もっと大事なことだ。もし、周一郎が殺されたら。
　ぞっとした。
　冗談じゃない。
『滝君』
　英はうろたえない。それどころか口調を変えて尋ねてきた。
『君、朝倉さんの事を知ってるのかい？』
「はああ？」
　今日はどうしてみんな、謎謎ごっこをしたがるんだ？　よりにもよって、一分一秒を争うってのに？
「知ってるかって当たり前だろ！」
　俺はあそこでバイトしてたんだぞ。周一郎のことだって結構知ってる。かなりたぶん、きっと大いに知っている。
　喚き散らす俺に英は動じない。
『そうじゃなくて、朝倉さんがどうして君を放り出したか、理由を知ってるのかい？』
「お前とパートナーを組むからだろ」
『じゃ、知らないわけか』
　英は訳のわからぬことを呟いた。
『他には？　朝倉さんがどうしてこんなことに首を突っ込んだのかは？』
「タジック社が欲しかったんだろ」
『全く気づいてないんだな』
「だから、何だよ、一体。何の話をしてるんだ！」
『どうしてまた、朝倉さんが危ないからって僕に連絡まで取ってくるのかな？』
「ど、どうしてって」
　反撃されて鼻白む。
　どうしてかと言えば、そりゃ俺が無力だからということに尽きる。自分一人では周一郎を捜し出すことも助け出すこともできないからだ。
『君は餓にされたんだろう？　彼とはもう何の関係もないはずだ。なのに、どうしてわざわざ危険な事に飛び込んでくる？　まさか、危険だと気づいていないとまでは言わないよね？』
　ぐ、とことばが喉に詰まった。
　無力なくせに、何もできないくせに、人の力を当てにするしかないくせに、なぜできないことをやろうとするのか、そう尋ねられた気がした。
「…けど…そりゃ…関係ないかも知れないけど…」
　言いよどむ。
　うん、実はもう一回雇ってもらえないかと思ってさ。
　一宿一飯の恩義ってものがあるだろう。
　危険が好きだからさ、ふふっ。
　……違うな。
　どれも違う。
　それなら、俺は。
「……ほっとけないだろ…」
『は？』
「ほっとけないだろう！」
　ぼそりと唸ったのを聞き返されて意地になった。
「あいつが危ないんだからほっとけないじゃないか！　あっちはどう思ってようが、俺はあいつは友達だと思ってるんだから仕方ないだろが！」
　くすくす、と英は向こうで低く笑った。
『やれやれ、ほんとに……馬鹿みたいにお人好しだな』
「おい！」
『三十分後に迎えに行く。立崎の居場所に心当たりがある』
「お…おぅ」
　そうか、俺は周一郎を友達だと思ってたのか。何かあったらほっとけない、そんなに近い友達だと。
　切れた受話器を持ったまま、俺はしばらく放心した。

　時間は夜の七時を過ぎていた。
　英が来た時にちょうどラッシュに合い、一時間以上遅れたのだ。

「遅いぞ！」「悪い」
　苛つく俺に、英はやや緊張した顔を向けた。乗り込むや否や、ようやく空き始めた道を暗闇に向かって走り出す。
「立崎の居場所って？」
「タジック社の支部の一つだ。裏工作に使ってた所で、人目にもつかない」
　さらりと言い捨ててハンドルを切る。横目で見た俺に、例の人の良さそうな笑みを浮かべて、
「大丈夫だよ、朝倉さんがヘマをすることはないさ」
「と思うけど……でもどうして一人で出たんだか」
　前を揺れるテールランプを見ながらぼやく。
　周一郎が行方不明になった時から引っ掛かっていた。あいつにしては軽卒だろう、いや軽卒すぎる。
「狙ってくれって言ってるようなもんじゃないか」
「それを意図していたかも知れないよ？」
「え？」
　ぎょっとして思わず隣を見た。計器の光に淡く浮かび上がった横顔がいつの間にか鋭くなっている。
「立崎が朝倉さんに手出しをしたという具体的な証拠があれば、面倒な書類手続きは必要がなくなる。正当性を争わずとも、非を認めたも同然だ。本社の権威は失墜し、事実上、実権は新日本タジックと朝倉財閥に入る」
　英はちらりとこちらを見て笑った。
「少なくとも、僕ならそうする」
「けど……それならどうして一人で応じた？　お前にも知らせず？」
「……」
　英はしばらく黙ったままアクセルを踏み続けた。加速していく俺達に周囲の車が慌てたように道を譲る。
「おい」
　ちょっと飛ばし過ぎじゃないか。言い出そうとした矢先、妙に険しく顔を歪めた英が、ふいにほっと溜め息を一つついて苦笑した。
「やっぱり僕と君とはどこか似てるんだな」
「？」
　投げ槍な口調に瞬きする。
「君が朝倉さんの信頼を受けていないと思った時の気持ちが、今、わかったよ」
「英？」
「…今度の一件、朝倉さんは始めからタジック社を狙っていたわけじゃない」
　ぎゅんっ、と風が鳴った気がした。車は人通りが少なくなった道を一気に飛ばしていく。
「僕の意図もタジック社の狙いも知ったうえで、ほんの少しだけ相手の思惑通りに踊って、後はさらりと躱すつもりだったんだ。だけど……タジック社は朝倉さんだけじゃなくて君にも手を出した。それも、昔の知り合いを手駒に使う……一般的に言えば、卑劣な方法で。……だから、朝倉さんが乗り出した」
「へ？」
「君が殴られた時もそうだよ。あれは立崎の単なる嫉妬から来る暴走だったけど、君が傷を負う羽目になった。朝倉さんは君を引っ張り込んだ遣り口が許せなかった……だから、タジック社を徹底的に叩くことにした」
　ふいに様々な場面が一気に繋がって見えた。お由宇の思わせぶりな口調が耳の奥で響く。
『周一郎は一か八かで動くほど無謀な人間じゃないわよ、『あること』について以外わね』
「俺…か」
「そう、君、だ」
　噛み切るように吐いて、英は手荒くカーブを曲がり切った。
「君が殴られた時、彼は真っ青になっていた。大切なものが壊された子どもみたいに。結局君の側にずっとついていて、君が目覚めるまで離れなかった。あれで改めて自覚したんだろう、自分の近くにいると、君の命の保証がなくなるって。タジック社への芝居でもあったけど、本音は君を危険から遠ざけたかったんだ。……だから、餌にした」
　苦々しくて不愉快そうな声音だった。
「…芝居、か」
　百合香の声が聞こえた。
　全ては俺を危険から遠ざけるための芝居だったのか。黒い瞳が百合香の切なげな表情と重なる。何も言わない、絶対何も、いつも、いつも、いつも。
「そう、芝居、だ」
　英はアクセルを緩めた。目を細めて道の彼方を透かし見る。
「彼が信頼していたのは、いつも君だったんだよ。僕がいくら君そっくりに振舞えても、彼の信頼は得られない……今も、たぶん」
「今？」
「……朝倉さんが一人で応じたのは、心のどこかで、もし自分が帰れなくなるようなことがあったら、きっと君が助けてくれる、そう信じていたからだよ」
「いや、待てよ！」
　俺の声と同時に急ブレーキで車が止まる。
「立崎はこの近くのパブをよく使った」
　車を降りて先に立って歩く英に何とか追いつきながら尋ねる。
「待てって！　周一郎が、俺が助けに来るって信じてたって？」
「心の隅でね」
「でも俺は餌にされたんだぞ？　周一郎は家族でも身内でもない、俺が来るかどうかなんてわからないだろ？」
「…」
「それに、たとえ来たとしても、俺は何の取り柄もない『一般民間人』だぞ？　金も力も頭もない、厄介事ばかり引き寄せるし運もない。周一郎が危なくたって、助けられる要素なんてこれっぽっちも…」
「でも、来たじゃないか」
　英は奇妙な笑みを浮かべて俺を振り向いた。
「何ができるかわからない、むしろ何もできないかも知れない、おまけに散々冷たくあしらわれて、仕事も取り上げられて、居ないみたいに扱われて、その理由さえ知らなかったのに、君は『来た』じゃないか」

「う」
　答えようがなくなった俺の耳に、次の瞬間激しい物音と叫びが聞こえてはっとした。
「火事だあっ！」「『みその』から出火してるぞ!!」
　振り返った英の顔に察する。
「『みその』って」
「立崎の出入りしてたパブだよ、滝君！」
「わかった！」
　不安に駆られて走り出す、とすぐに野次馬達が押し寄せている小さな通りへ飛び込んだ。
「、んだこのっ」「こっちだ、滝…っ!!」
　突然、前を走っていた英が周囲に立ち尽くしている野次馬の中から一人の男を引きずり出した。
「立崎っ！」
「えっ」
　百合香を殴った男は思ったよりも小柄だった。英に襟首を掴んで引きずり出され、じたばたもがきながら俺を振り向く。
「放せよ、何だよ俺が何をしたって」
　狡そうな表情がまあまあの男前を台無しにしていた。卑屈な視線でねめつけてくる、こんな男が百合香の相手で、彼女のお腹の子どもの父親、そう思うとがっくりするほど情けなかった。
「朝倉さんをどこへやった」
「…知らねえな、何のことだか」
「とは言わせないぞ」
　胸元を握って吊り上げる英の怒りの表情に立崎はふいにくくくっ、と嗤った。
「大人のまねしたガキなら、さっきあそこで呑んでたなあ」
　しゃくる顎の先には燃え上がりつつある『みその』がある。ピンクの文字で書かれた看板が斜めになって音を立てて落下した。
「お前っ……滝君っ?!」
　瞬間、どこからそんなくそ度胸が産まれたのか、開かれていても暗い、扉に炎が回りつつある『みその』へ、俺は一気に飛び込んでいた。飛び込んでから、本当は水を被って飛び込むんじゃなかったかと思ったが、もちろん、後の祭りでしかない。
「周一郎ーっ！　どこにいるっ！　周一…あちちちっっ！」
　熱気と火勢に慌ててその場を逃げて奥へ走り込む。不思議なことに奥の方が火の勢いがましだった。外からの火、放火か、と気づく。なら少しは時間があるかも知れない。むかつくようなプラスチックの溶ける臭い、割れ砕けた酒瓶が火に煽られて強いアルコール臭を広げている。カウンターに零れた酒に蒼い火が走るのを見て，一瞬拍手しかけて我に返った。
　どうしたもんだか、この危機になるとお笑い芸人になる脳味噌は。一旦煮沸消毒でもした方がいいのか？　だからここへ飛び込んでるのか？
「周一郎ーっ…わちっわちっわちっ！」
　ジーパンの裾が焦げたのを慌てて叩く。果たして新しいジーパンは買えるのか？　あの主任は俺が戻るのを待っているのか？
「わわわわわ！」
　見る見る火が迫ってくる。消防車はまだか、誰か通報してくれているのか、咽せ込み咳き込み、ひいひい言いながら周囲を見回す。くらくらする頭がいつものように愚痴をばらまく。
　大体どうして、いつも俺はあいつを探し回っているんだろう。こんな中に飛び込んじまって、専門職が一杯居るのに、どうしてドが百乗ぐらいつく素人の俺が、こんなことをやる羽目になってるんだろう。しかも探している相手が、人をチェスの駒のようにしか考えていない奴で、自分の都合で馘にして路頭に迷わせた奴で、いつまでたっても意地を張ることしか感情を出せない奴で、それでも俺を心配してくれる奴で、本当は優しい奴で、猫の眼なんかで世界を見ちまってるから人を疑ってばかりいる奴で、俺を助けるために芝居を完璧にやり抜いてしまう奴で、あげくにこんなところで死にかけてる奴で。
（芝居）
　過熱してきた頭にそのことばだけがこびりつく。
　女の子が一人、嘲りを込めて吐き捨てた、みんな芝居でしかないと。結局人は騙し合って生きていくだけなのだと。
　俺はそのことばに、何か返そうとしていた、何かもっと違うことを。
「っ！」
　ふいに近くの棚が倒れてきて、慌ててもっと奥へ駆け込むと、そこには隠された階段室があった。螺旋上に巻き上がる階段、下から迫る炎に炙られながら、必死に駆け上がる。駆け上がりながら、なおも考え続けている、百合香に応じる返答を。
　確かにこの世の全ては仮面と嘘とでできているのかも知れない。全ては本心を隠した芝居でしかなく、騙し合うことしかできない、それが人間なのかも知れない。
　俺が周一郎に見事に騙され、あいつを詰り怒り自分にがっかりして恨んだように。傷つけあって、痛さに心を閉じて、それでも当たり障りなく、上辺を飾って生きていくのが人生なのかも知れない。
　けれど、城本。
　二階のドアへ辿りつく。熱くなりつつあったノブを何とか回して引き開ける。
「周一郎ーっっ！」
　これだけ呼んでも答えない。縛られて口を塞がれているのか、別の場所に監禁されているのか、それとももう、口も利けなくなっているのか。
「、くそっ」
　下でがらがらと派手に物が崩れる音がした。まだ二階に火は回ってきていない。けれどかろうじて閉めた扉の外から煙がじわじわ滲み出してくる。燃え上がるのは時間の問題だろう。
　けれど、城本。
　走り出して並ぶドアを片端から開ける。一部屋目は空。
　けれど、城本。
　二部屋目も空。

煙が眼に滲みて涙が出る、視界が霞む。慌てて姿勢を低くする。
けれど、城本。
芝居だけの人生かも知れない、嘘だけの夢、仮面だけの人との触れ合いかもしれない。
けれど、本当に、ほんの少しの真実も、そこには含まれていないだろうか。ほんの一瞬、互いの顔を見やって笑いあう夢は、あくまで理想（ゆめ）でしかないんだろうか。
俺はそうは思わない、いや思えないんだ、城本。
そりゃ、俺は今度も周一郎に振り回されて、あいつの回りをじたばたおろおろ走り回っていただけかも知れない。おまけにあの周一郎って奴は、どこまでいっても『芝居』でしか、俺に接することができない人間なのかも知れない。
けれど『芝居』の中でも何かわかりあえる一瞬があるような気がするんだ、城本。心を重ねられる、ほんのわずかな一瞬が。
「周一郎！」
三部屋目か四部屋目、窓に面した部屋でぐったりソファに身を任せている周一郎を見つけて駆け寄った。殺されたのかとぞっとしたが、胸が微かに上下していて、深く眠り込んでいるだけだとわかる。激しく揺さぶりながら怒鳴る。
「周一郎！　おい、起きろ！　何寝てんだ、こんなところで！　火事だぞ熱いぞ燃えちまうぞ！」
「…う…」
「うおっ」
屈み込んで気がつく、強烈な酒の臭い。
「お前酔ってるのかおい！」
ってか人が心配してたのに泥酔かよ、いやそれよりこれだけ酔っぱらうなんてどれだけ呑んだんだ一体。
「周一郎っ！」
「滝…さ…」
ようやく弱々しい声が戻ってきてサングラスがなくなった眼と視線が合った。
違う、こいつじゃない。
ぐたりと腕に崩れた躯にぞっとする。
こいつが正体をなくすほど呑むわけがない、こんなところで、周囲に敵しかいないところで。熱っぽく重い躯がときどきもがくように震える、抵抗するように。
誰かに呑まされたんだ、それも大量に。
飲み会で潰れた奴のことが頭をよぎる。確か急性アルコール中毒とかってのがあったはずだ。で、そういうのはできるだけ早く病院に運び込まないと命に関わるはずで。
「くそっ」
周囲を見回し、周一郎をソファに凭れさせ、窓に駆け寄る。
こういう時はどうだった、開けてよかったのか悪かったのか。ええい、開けなくてもいずれ炎に巻かれて死ぬだけだろう、開けちまえ。
思い切り窓を開け放つと、ごお、と不吉な音が廊下の外で響いた気がした。負けずに喚く。
「ここだーっ!! 助けてくれーっ!!!!」
「滝君！　飛び降りろ！」
すぐに英の声が戻ってくる。窓の下に消防らしい男達がマットのようなものを広げている。
「二階へもう上がれなくなってるんだ、早く！」
「周一郎も見つけた！」
「わかった、早く！」
英の側に立崎の姿はなかった。パトカーが一台、サイレンを鳴らしながら引き上げていく。放火、殺人未遂は最低つくはず、タジック社の命運も尽きただろう。
「周一郎！　しっかりしろ！」
「ん…」
ほとんど自力で立てないばかりか、手を離せばぐずぐず崩れていく周一郎の顔は蒼い。今更気づけば、ソファの陰に吐物があった。自分で吐いたのか、それとも体が反応したのか。どちらにせよ、このままでは明日の朝刊で有名人になってしまう。
「周一郎って！　おい！　起きろ！」
ぺちぺち叩いたところで反応しない。山根あたりをぶっ叩くつもりで勢いを込める。
ばつんっ！
「ひえっ」
予想以上に派手にあたって思わず身を竦めた。頬を張り飛ばされた周一郎がようよう瞬きして薄目を開ける。
「滝…」
「ああ俺だ！　起きて眼を覚ませ！　火事だ焼き鳥になるぞ！」
「力…入らなく……注射…され…」
「注射？　酒を注射されたのか?!」
「感覚が……なくて……立て……ません…」
「こんな時に敬語かよ、おらさ！」
肩を入れて引きずり上げる。重い。自力で立てない人間は本当に重い。周一郎ほど小柄でも、ひきずって窓に歩くのが手一杯だ。
「こっちだ、この窓から脱出するぞ！」
「……め」
「あ？」
「……ゆめに……似てる…」
ずるずるひきずられながら、周一郎が淡い声で続けた。
「…迷ってて……白い…靄の中で……出口……見つからなく……霧が…濃くて…」
「こんな時に夢の話かよ、ほっとくとここでも煙に巻かれて真っ白に……霧？」
喘ぎながら周一郎を見る。
「……出たくて……迷って……迷い続けて……もう…諦めようとして…」
白い靄の中で迷う夢？　俺と同じ夢じゃないか。

「…かなしくて……他の人に……ある出口……僕には……見えない…」
　ぼんやりと遠い瞳は今もまだ夢の中にいるようだ。
「諦めて……声が聴こえた……そっちは……明るくて……滝さんがいて……ああ……こっちだって……ほっとして……走って…」
　どおん！　ばきばきっ！
　崩壊する建物の中で、俺は周一郎の告白に気を取られている。
　ふいに見上げてきた周一郎がふわりと笑った。いつか英がこけた時に見せたような、懐かしそうな嬉しそうな笑み。
「滝さん……いるから……僕は……」
　青ざめていた顔が薄く紅潮する。満足そうな微笑みは見たことがないほど無防備だ。
「…だい…じょう……ぶ……」
「っ、うあっ、おいいいっ！」
　がくりと周一郎が崩れた。正確に言えば寝落ちた。そこでようやく、それでも今まで周一郎が少しは自分の脚を突っ張っていたと知る。数倍になった体重を、俺は半泣きで引きずって窓へ突進した。
「落とすぞ行くぞ周一郎無事でいろよっ！」
　窓に押し上げ突き落とす。わあっと声が上がりぼすんと音が響く。後ろから突然熱気が吹き出す。足元が揺れ、斜めに傾いでいく床が背後へ崩れて行こうとするのを必死に蹴って、窓に擱まり、サーカスの火の輪くぐりのライオンよろしく、虚空へ向かって飛び出す。
「うわおおおーっ！」
　一生一代の晴れ舞台、ああ外って涼しいんだ、世界って広いんだと考えた瞬間、自由落下する体に眼を閉じる。
　ぼすっ、どごっ！
「げっ！」
　確かに衝撃は弱められたはずだ、直接地面に激突するよりは。
　けれどマットを押し潰すように俺は端っこに落ち、勢いで投げ出されて再び地面に落下した。
「おおい、大丈夫か！」
　ひょっとして少し張りが弱かったかな、いやすまんすまん。
　苦笑いして覗き込む消防隊員を、俺は逆恨みの目でねめつけた。

7.友

　Dr.ドナルドのバイトは見事におじゃんになった。あの主任が、どうやら現場には不向きらしいと上に判断され、別の部署に飛ばされたのだ。従って、俺のドジにも関わらず，アルバイトとして雇い続けることはないわけで、自動的に俺の頭は胴体と泣き別れてしまった。
「どうするかなあ」
　ぼやきながら、トレーニングパンツにTシャツ、右手に真紅のバラという人目を引く格好で歩いている。とにかくあの火事で服は無惨な状態になってしまったし、穴が空いてたりほつれてたりで他に着れる服もほとんどなく、ついでにバラの花束でわずかに残っていた金も吹っ飛んだ。
　病院の中を歩いていると、俗に言う白衣の天使達がくすくすと微笑みを堪えつつ通り過ぎる。てやんでえ、天使とか何とか言ってても、感覚は一般人と同じじゃねえかと悪態をついている間に百合香の病室に辿り着いた。
　ノック。
「…」
　返答なし。
　おそるおそるドアを開けると、個室のベッドは既に空になっていた。床頭台の花瓶が、開け放った窓から入る初夏の風に飛ばされるまいとするように、小さな紙を押えつけている。俺はバラをベッドに置き、床頭台に近寄った。
　小さく折り畳まれた薄く青い便箋、広げるとぱさりと何かが滑り落ちる。
「？」
　拾い上げて、中学時代のクラス写真だと気づいた。写真の中の俺の姿は切り抜かれている。百合香の姿は黒いマジックで塗り潰されている。便箋に目を移すと、そこには昔憧れた細く軽い筆圧の紺色の文字がたった二行、涼しげに寂しげに並んでいた。
『　さよなら
　　滝くん　　』
　折りたたみ、写真と一緒にポケットに入れる。バラの花束を手に病室を出ると、看護師の一人と出くわした。
「あら、城本さんなら、今朝早く退院されましたよ？」
「…元気でしたか？」
「ええ、もちろん」
　元気を取り戻さない患者に退院はさせないだろうと言いたげな訝しい表情で、看護師は頷く。
「…どうもありがとうございました」
　のろのろと頭を下げた。看護師はいささか憐れみを込めた視線で微笑み返し、静かに立ち去っていく。少しだけ未練がましく後ろ姿を見送って、俺は溜め息をついて向きを変えた。
　もし、俺と百合香がもう少し早く再会していれば、もちろん恋人同士には時間が流れ過ぎていて無理だったかもしれないが、良い友人ぐらいにはなれていただろう。
　けれど、どこかで俺達はすれ違ってしまった、ほんの僅かな時のずれと神様とやらの悪戯で。
　そんなつもりはなかったけれど、考えながら歩いていて、つい習慣で朝倉家の長い長いレンガ塀に向かってきていた。
「にゃあん」
　突然聞き慣れた声がして立ち止まる。
「よう、ルト」
　目の前に、いつの間に現れたのか、青灰色の小猫が居た。尻尾をくねらせ、俺の視線を止めたと気づくと、くるりと向きを変え、付いて来いよと言いたげに歩き出す。
「おい、駄目だぜ、ルト。俺はクビになったんだから」
「にゃ」
　振り返ったルトは小走りに戻ってきた、かと思うといきなり俺の靴に駆け上がり、ためらいもなく素直に俺の脛に齧りついた。
「ぎゃ！」「ふっ」
　飛び上がる俺から軽く身を翻して飛び退り、例の声を出さずに鳴く顔で牙を剥き出す。それからぐいと顎を上げて顔を反らせ、再び前に立って歩き出そうとする。
「何だ？　何の用だ？」
『周一郎はね』
　ふいに頭の中にお由宇の声が甦った。

　ごたごたはほとんどおさまっていた。
　英はタジック社が周一郎を泥酔させて殺そうとしたことを交渉材料に、新日本タジック社としてロボット産業に返り咲いた。タジック社は事実上失墜、トップの入れ替えもスムーズに行われた。
　そう、ごたごたはおさまっていた、ただ一つ、周一郎の態度を除いては。
「周一郎はね、あなたのことを心配したのよ」
　お由宇は穏やかに笑っていた。
「だから、英が何かを企んだとき、あなたを巻き込まずに処理できるように、自分と同じ階に彼の部屋を準備したの」
「けど、英が近づいてもあいつは起きなかったぞ」
「あなたがいたでしょ？」
「…」
「そういうことを私に謎解きさせないようにしたところが、実に周一郎らしいけど」
　くすくす笑うお由宇に、彼女が話そうとする時に遮ったルトを思い出す。
「……けど……何でだ？」
　あいつの意地っ張りは今に始まったことじゃない。実は心配したなんて今更明かされたところで、ああ相変わらず意地っ張りだなあで済むはずだろうに？

「自分に照れたのかもしれないわね」
「へ？」
「ドイツから帰ってきて、また素直じゃなくなったって言ってたでしょ？」
「ああ」
「ドイツでの自分の行動を分析してみて、改めて眼を覆いたくなったのかもしれないわ。意識し始めると、あなたにどう接すればいいのかわからなくなった。本音はそんなところじゃない？」
　お由宇の恋人になる男はさぞかし大変だろう。その日のパンツの色まで見抜かれてしまうんだろう。
「白」「えっ?!」
　いきなり指摘されて思わず腰を押える。堪えかねたようにお由宇は笑い出しながら付け加えた。
「あなた、白しか持ってないんだもの」
　……ああ。

「にゃ」「ん？」
　ふとルトが立ち止まって瞬きし、相手が見上げたものに目を寄せる。
　門に貼られた例の紙、読もうと近づく俺の前で、身をくねらせてルトは朝倉家に入っていく。
『子どもの遊び相手求む、経験必要。男性、二十三、四歳の方。ドイツ旅行経験必要。啓仁大学、文学部三年（一年留年のこと）。お人好しでドジ、多少の皮肉には動じない性格であること。どこでもこけることが特技であり、お節介であること。現在資金・居住場所・家族などがなく、週給二万円で住み込み可能であること』
「…おい」
　さすがに呆気にとられる。
「これ……俺以外の誰が当てはまるんだ？」
　ぼやいたとたんに、キィ、と音を立てて門が開いた。
　一人の男が立っている。妙に目を惹きつけるカッターシャツにスラックス姿、標準からいくとやや小柄で華奢に見える体格、目元のサングラスが明るい陽射しの中で真っ黒に見える。端麗と呼べるほどの整った顔立ち、笑わぬ静かな口元。
　だが俺は、そのサングラスの奥の瞳をよく知っている、涼やかに澄んではいるけど、他に比べようもない威圧感も深さも、微かに漂う哀しみも。
「それはあなたの趣味なんですか？」
　周一郎はいつも通りにルトを抱き上げ、尋ねてきた。
「いや、俺というより」
　こちらを見上げる、たぶん、視線が合った。
「お前だろ、どうせ」
　花束をばさりと相手に突き出す。ためらいつつ、周一郎が受け取る。
「この広告、お前が出したのか？」
　薄くわずか周一郎の頬がひきつって染まった。不愉快そうに顔を背ける。
「僕じゃいけませんか」
　透けかけたサングラスの向こうから黒い瞳がちらりとこちらを伺う。不安そうに見えた、全く有り得ないことだったが。
『意識し始めると、あなたにどう接すればいいのかわからなくなった。本音はそんなところじゃない？』
　お由宇の声が、なぜだろう、懐かしそうな響きで戻ってきた。
「…だって滝さん」
　ぽつりと周一郎が呟く。瞳はサングラスに向け、どこともわからぬ世界を見つめている。
「アルバイトを馘になって、お金もないんでしょう？」
　お由宇あたりが話したのか。
「今なら俺が戻ってくると思って？」
「、そういうわけじゃ…！」
　びくりとして、周一郎は振り向いた。
「ただ僕はあなたが困るんじゃないかと……困ってるんじゃないかと、そう、思って」
　悔しそうに唇を噛む横顔は、初めて見た顔だった。いつもいつも、まるで役者のように素知らぬ顔で切り抜けてきた朝倉家の当主が、警察も世間も手玉にとって、罪悪感一つ浮かべなかった顔が、気持ちをいいあぐねて迷っている。
「俺が？」
「…っ」
　困ってるのはお前じゃないか。
　痛い部分を叩かれでもしたように周一郎は激しい一瞥を投げてきた。見返すとたじろぎ、やがて瞳がゆっくりと伏せられていく。長い睫毛に光が溜まる。
　だめなんですか、滝さん。
　耳に聞こえない声が問いかける。
　怒ってるんですか、僕のことを。
「そんなわけ、ないだろ」
「……」
　しょんぼりと肩が落ちる。
「俺が困ってないわけが、ないだろ」
「…っ！」
　周一郎が弾かれたように顔を上げた。
「お前もとことん意地っ張りだよなあ」
　続くことばを察したのだろう、見る見る嬉しそうな照れくさそうな、そう感じる自分に腹を立てたような、僅かに赤くなった頬で唇を曲げて、周一郎がふて腐れる。
「滝さんほどじゃありません」
「俺はいつだって素直だよ。部屋は？」
「前の通りです」
　歩き始めた俺に歩調を合わせて追いついてきながら、花束とルトを抱えた周一郎は繰り返す。

「同じ場所です。荷物は後でいいでしょう？」
「そうだな」
　うん、と伸びをしたのは居場所が見つかった安堵と、こいつとの付き合いはまだまだ始まったばかりだという確信からだ。
　これから先も手こずるだろう、何せ相手は筋金入りの意固地な男だ。
「…そうだ」
　思い出した。現時点で一つだけ優位に立てるポイントがあった。
「お前、酔っぱらってた時に、何言ったか、覚えてるか？」
「え」
　周一郎はあからさまに顔を強張らせた。
「そうかー、覚えてないのかー」
　にやにや笑いが広がる。
「僕が何か言ったんですか」
「さあなー」
「滝さん？」
「どうだろうなああ」
「滝さん！」
　一体何の話ですか。僕が何を言ったんですか。
　見る見る赤くなりながら、周一郎が尋ねてくる。
「滝さんっ！」
「わははっっ！」
　歩き続ける、俺達の家に向かって。

　吹き過ぎる風は、既に夏の気配を含んでいるようだった。

おわり

銀幕紙芝居

http://p.booklog.jp/book/120389

著者 : segakiyui
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/segakiyui/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/120389

電子書籍プラットフォーム : パブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト